

日本生理誌・第20巻12号・昭和33年12月1日発行（毎月1日発行）
〔昭和27年5月6日 第3種郵便物認可〕

日本生理學雜誌

JOURNAL OF THE PHYSIOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

第20巻 第12号

Vol. 20 No. 12

昭和33年12月1日発行

December 1958

第20巻完結記念号目次

戸塚武彦：日本生理学雑誌二十巻をかえり見て……………	1033
藤田敏彦：思い出……………	1034
浦本政三郎：日本生理学雑誌発刊ごろの思い出……………	1036
加藤元一：不減衰伝導学説の回顧……………	1039
越智真逸：日本生理学会の思い出……………	1049
中西政周：生理学会の思い出……………	1050
久野寧：日本生理学界初期の思い出……………	1051
正路倫之助：本誌創刊当時の回顧……………	1053
板垣政参：思い出……………	1053
日本生理学雑誌第1～20巻原著総索引……………	1054

附：第36回日本生理学会総会案内

日本生理学会会費納入のお願い

第15回日本医学会総会会員募集

第15回日本医学会総会学術集会主題

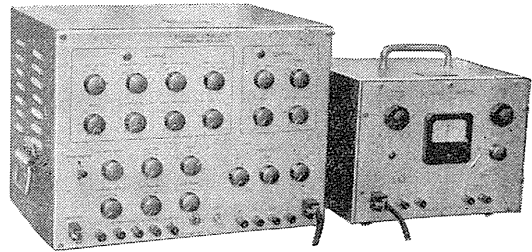
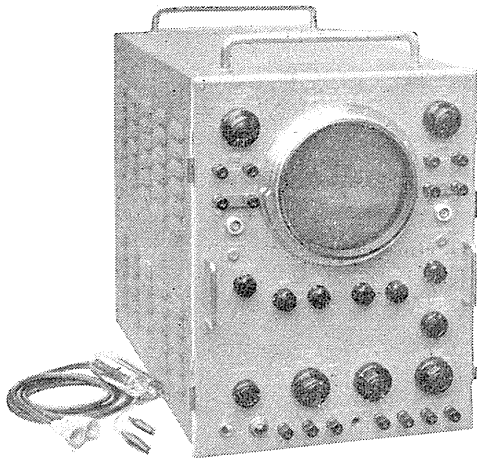
日 本 生 理 学 会

Physiological Society of Japan

二現象生体電気現象用

万能観測装置

二チャンネル刺戟装置



出力電圧：矩形波正及び負 0~100V

矩形波発生回路及び Isolator 各 2 回路

矩形波特性：Puls Width ∞ , 1000, 100, 10, 0.1msec. 6 段切換及び微調

Duraton ∞ , 1000, 100, 10, 1msec. 5 段切換及び微調

Freq 1, 10, 100, 1000 10000c/s

出力電圧：最大 100V (P-P)

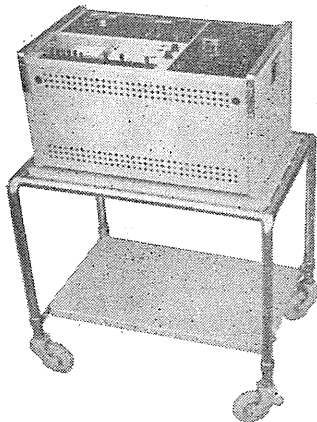


東京電気精機株式会社

東京都千代田区神田仲町2の11

電話 神田(25)代表 9186~9188

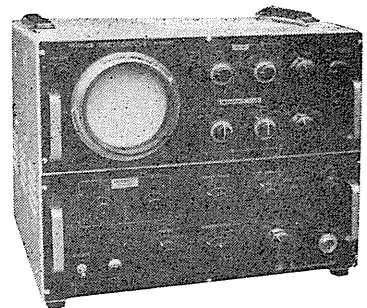
万能記録装置 (MPA-204)



小型二系統
EKG. EEG. GSR他



万能ブラウン管オシロスコープ (UB-203)



新型高安定度
EMG. EEG. EKG 他

誌名記入型録御申込下さい

製 作 品 目

脳 波 計・脳 波 分 析 装 置
二現象オシロスコープ・オシロスコープ用連続撮影装置
アネロケータ・電気刺戟装置
電磁オシログラフ・インク書きオシログラフ

三栄測器株式会社

本社 東京都新宿区柏木 1~95

TEL. (37) 7117・7118・8114・8115

工場 東京都武蔵野市吉祥寺 1635

TEL. 武蔵野 (022) 4941・7825・3265

日本生理学雑誌二十巻をかえり見て

戸 塚 武 彦

大正11年に日本生理学会が発足して10年以上も経つのに未だ独立した発表機関がないとはどうしたものであろうか、生理学者の誰しもが思う事であり乍ら、果してそれが立ち行くであろうかとの見通しが立たないので、之を言い出す人がなかった。それでも皆寄り寄りに種々な意見を交して居たものであったが、それらが東京生理学談話会を産み、余外集を産む原動力となったのである。勝手な事を議論するのは我々30代の連中であつたが、実質的にそれらの推進力となったのは浦本教授である。その辺の事情は別項に書かれていると思うから詳述しないけれど、そうした力に推されて昭和10年の京城の学会の評議員会に我々30代の若い教授達が生理学会の改組充実案（即ち会員制度）と共に雑誌発行の具体案を提出したのであった。その案は大體承認され、橋田教授、浦本教授及びその若年者の中で東京に居ると言うので戸塚の3名が常任幹事にされ、雑誌発行の事も委された。主謀

者の一人であり同時に一番若い僕が自然雑誌担当となり、第1巻第1号が翌昭和11年の2月に発行された。

一番大きな問題は、原稿の有無と会計とである。雑誌を会員の会費（当時6円?）で全部賄うと言う事は不可能なので2 pageを学会で負担して余は著者負担としたのは勿論一時的の窮余の策であつたが、それが今に至るまで続いているのである。その様に著者負担を必要とするので、従来夫々の大学の機関誌その他で無料又は逆に原稿料を貰って発表して居た諸学者からの論文は勿論望むわけにも行かなかつた。その中に於いてすべての論文をどんと出して下さり、そのお蔭で原稿難をかこつことなく済んだのは、皆様も調べて見て下さればわかるのであるが浦本教授である。少くとも最初の頃の生理学雑誌は慈恵大学雑誌の様な様相を示して居た。その内に世の中も少し宛麥って来、全国からも集って来る様になって今に至って居る。

表 日本生理学雑誌1~20巻

巻数	発行年度	綜説	原著	学会報告	小学会報	抄録	生理学論文表題	総頁	発行所
1	昭11.2~12.2		38	(15回) 211		53		430	三秀舎
2	12.4~12.12		33	(16) 154		61		374	〃
3	13		35	(17) 222		2		418	〃
4	14		43	(18) 195		2		448	〃
5	15		46	(19) 119	23			468	〃
6	16		71	(20) 122	77			702	〃
7	17		75	(21) 138	55			818	〃
8	18		66	(22) 165	30			706	文友社
9	19 (11号)		131					892	〃
10	21.8~23.7		58	(23) 42				324	鶴岡印刷
				(24) 101					
11	23.10~24.12		43	(25) 180				352	〃
				(26) 202					
12	25		68	(27) 346	160			392	〃
13	26		71	(28) 337	109			570	〃
14	27		64	(29) 388	169			544	〃
15	28	4	85	(30) 397	134			660	〃
16	29	1	92	(31) 233	126			804	〃
17	30	2	91	(32) 329	124		29年度	882	〃
18	31	1	96	(33) 234	243		30年度	994	〃
19	32	4	121	(34) 369	312		31年度	1334	〃
20	33	0	87	(35) 388	53		32年度	1131	〃
	計	10	1414	4872	1615	118		13216	

原著者延 1785名

実質的著者数 816名

又浦本教授が生理学評論を別に発刊されて、生理学雑誌の欠を補われた事も特筆すべきである。

別表は大體の回顧であるが、それでわかる様に戦争の勃発により、昭和19年の9巻が11号で終り、昭和20年はとうとう出せず、21年8月から僕が疎開して居た鶴岡で復刊し、23年7月まで、11巻が23年の10月から24年の12月までの間に細々と、時々は合併号などにし乍ら発行された他は何とか命脈を続け、現在では毎号の様に倍大号を綴

らねば間に合わぬ様になって来た。

最近のこの原稿の boom は一時的の現象としても、今や生理学雑誌は20巻(23年)の齢を重ねたと言う事になるのも皆様の絶大なる御助力によるものと思う。それとともに僕が之まで続けて来られた蔭の力としては、教室の佐々木祐治君に負う所が大である事も記して置く必要が

ある。

それにしても生理学雑誌は今の儘であってほならぬと思う。綜説、速報、そんな欄ももっと発展させる可きだと思ひ、編集方針にしても考える可き事がたくさんあると思ひつけてもここらが選手交代の良い時期だと思ひるので、之を機会にその様をお願いするつもりで居る。

思 い 出

藤 田 敏 彦

日本生理学会は大正11年4月京都で第6回日本医学会総会の時に生れた。それまでは単独の生理学会というものではなく4年に1回の医学会総会の(第1分科会は解剖学会)第2分科会として、生理・医化学・薬物学の3科合同の会が存在するだけで、その4年にただ1回の3学科合同さえも、私が初めて出席した大正7年の東大生理学講堂での第5回医学会総会の分科会はただ1日ですんだと思ひ。京都の第6回総会では2日間であった。

生理学会を組織したいとは、早くから大沢謙二先生も申されて居たが中々成立しなかつた。それは、第2分科会と同様に3学科を包含する方針のものなので、各学科のおん大の間の相談というか打合せというか、とにかく折合が付かなかつたためのものらしい。石原誠君が、いつかの国際生理学会(?)に出席しての帰国早々に、是非生理学会を作らねばならぬとの意見を寄せられたが、それでもまだ実現を見るに至らなかつた。所が、京都の分科会の機会に急転歩で生理学会が生れた。誰から発案せられたかは忘れたが、医化学・薬物学へ気兼ねすることなく生理学だけでやって行こうではないか、ということ、瞬間に衆議一決、思い立ったが吉年、善は急げで、早速その同じ大正11年の7月に第1回を東京で開くことになった。すぐ3カ月後に生理(だけの)学会を開いても演題があるかどうかと気遣いもしたが、案じるより生むは易

く、演題数も約70題、2日間一杯という(今の演題数に比較すれば物の数でもないが)3カ月前の、4年の1回の3科合同よりも演題が多いという盛会であった。

この誕生もやはり機運である。その頃丁度医専が皆大学になったばかりの、各大学の研究も盛り張り張切った所で、胎動既に盛んではち切れるばかりになって居て、ここで殻を破って生れた。春の学会の興奮発揮の後の丁度過常期に、熱のさめやらぬ前に、開会という適期を得て、かく盛会を見たことと思ひ。

生理学会で特点の一つと思ひことは、会長を設けぬことであろう。会長の選挙というような煩わしさがなく、単に開催地の教授が(2人あらば2人で)当番幹事を務めることにした。又座長を誰彼と交代することをせず、これまた御苦労ながら、当番幹事が引受ける。(しかし、近年の如く会場が数班に分れることになることと座長も1人や2人ではすまぬのは止むを得ぬ)。

第2回は福岡、第3回は仙台、次は奉天と大きなペンデルを描いて開催地が動いた。その福岡の学会は、麻酔神経の伝導の減衰不減衰が大問題となり始め、その論争は新聞だねにまでなつて、数年連続の激烈を極めたものである。このお蔭で日本の単離神経線維の研究が非常に進歩して、神経生理学に大いに貢献することになったことは思ひ深いものである。

仙台の学会には特に大沢・天谷両先生をお招

きして御来会を得た。大沢先生は、演題を持たずには出席できないと演題を出された。これが多分先生の学会演説の最後のものかと思う。その御自筆の掛表は、会后先生がおいて行くといわれ、今猶教室に保存してある。

奉天学会行きでは、殆んど全員が下関から奉天まで、船中を同うしたので、2日間の予備学会が開かれたようなものであった。若い人々に取っては初めての海外渡航ともいってよいので、幾つか赤毛布を演じたりもした。朝鮮海峡では(昼であったが)船酔いを心配して、初めから臥る覚悟をしているものもあり、中には吊り床を用意した人もあった。船が動揺しても垂直に安定して居ようという積りである。幸に好晴平穩の天気でいささかの動揺もなしにすんだ。奉天着の晩には、会員の多数が下痢を始めた。京城での弁当によるものであろうということであった。天谷先生も同行されたのだが、幸に先生は無事で、学会にも出席され、吾々も安心して喜んで居た所、2日ばかり遅れて先生の下痢が始まった。若いものは大抵1日で治ったのに、先生の症状は少し重くて3~4日臥床せられた。やはり老人の経過は発病治癒とも緩慢なのであると語り合った。

仙台・奉天では演題の数も100以上となり、奉天までは日程2日であったが、今回の東京以後では3日間となった。爾来年々増加して、遂に、1ヶの会場だけでは全部を演了することは困難となって、漸次数ヶ会場に分演することとなるという盛況である。(それどころでなく、年1回の総会だけではものならず、幾つかの地方学会が毎月とか年何回とか催されるに至ったこと)。実に多くに増えた次第である。私は、初めの頃には、浦本君・久野君には及ばなくとも大抵毎年出席して居たが、定年退官後、欠席が多くなり、殊に戦後は、新潟以外には皆欠席して、生理学界最近の進歩に接することの出来なかったことは遺憾至極である。来年の東京の会には久々に出席したいと思って居る。

生理学会の創立が案外に遅かったと同様に、生理学の雑誌の発刊も(ことに邦文のものは)遅産であった。欧文のものは最初橋田の J. of Biophysics として、生理学会誕生と殆んど同じ頃に発刊になり、3巻まで発行して後、文部省の Jap. J. Med. Sciences の中の一つ Jap. J. of Physiol. として引続がれ、戦争と共に廃刊になった。これら欧文生理学雑誌には原著の外に学会演説の欧文要旨が載せられ、これも外国で注目引用された。しかし、その廃刊と共にこれもなくなった。邦文生理学雑誌の創刊は欧文誌に後れること十余年、それが今や20才の成年に達した。慶ばしいことである。この雑誌は学会の機関であるから、純原著だけでなく、総会の演説の要旨も登載され、今では各地方集会の演旨、時には綜説さえも加えられ更に毎年度の研究論文題目も集録されて、私の如く集会に出席しえなかつたものにとっても大いに有り難い。ただ惜むらくは、学会演説の欧文要旨が載らない事である。もしこれが出来れば更によかるう。というのは、原著の要旨や図表の説明が英文になって、対外的に役立とうという主旨からいえば、講演要旨も同様にあってほしい。けれどもこれは得隲望蜀で、まだ無理であらう。この上に欲をいえば、他の専門・非専門医学雑誌所載の生理学的原著の要旨をも日本生理学雑誌に載せて、生理学研究の現況が、この雑誌1つだけあれば通観出来ると、文献渉猟の労を省きえてよいが、などと、不精の老人が虫のよいことを考えるけれども、これは、中央雑誌の領文なのかも知れぬ。一方欧文誌としては久野君の Journal が発行せられ、これは戦前のものに比して非常に立派に出来て、内容紙質印刷とも外国一流誌に比して遜色のない光彩を放って居る。我国欧文雑誌も数多く出て居るが、この Journal に比肩すべきものは少いと感ずる。わが、この邦文欧文両誌の榮ある成長を祈る。両誌の寄贈を頂いて居ることを感謝しつつ、妄言多罪。

日本生理学雑誌発刊ごろの思い出

浦本政三郎

(山形県衛生研究所)

1. 生みのなやみ

科学に客観性を持たせるのは文字である。その業績を文字や数字や記号を用いて発表することである。昔は *folia* 今は *paper* と呼ばれる。日本生理学会は大正11年(1922)に結成されたが、学会の機関雑誌が発行され始めたのが昭和11年(1937)で、その間15年を要した。正に昔なら元服の年頃である。

それまで学会の発表業績などはどう処理されたか、当時は当番幹事が抄録を印刷していた。生理誌が発刊されてから、始めてそれが機関誌上に掲載されるようになった。生理誌が発刊された年は倉敷の労働科学研究所が愈々東京に進出する年で、暉峻義等所長が当番幹事を引受け、その年から始めて生理誌に出た。素晴らしく部厚い抄録だったことが記憶に残る。

話を前に戻し、生理誌の発刊が学会結成後15年もかかったのは、生理誌だけだったのではない。多くの医科専門誌がそうだったといつてよい。それは日本の教育制度の変遷に依る歴史的必然だった。大正9年に医科単大の認可制度が始まり、それまでの医専は教育機関ではあったが、研究機関とは云えなかった。医科単大制度でやっと研究機関となった。だが、研究体制の古い東大、京大、九大の研究陣営に追いつくまで15年を要したと観るのが一応至当な見解でないかと思う。

それまででも研究業績発表についてのなやみは随所に観られる。生理学会の発足した当時は(今でも続いているが)、医学雑誌は先ず学校雑誌だった。雑誌のさばけさきは同校出身者という形であり、実用性の要求の強い臨床医学では、その専門誌が基礎医学より先立っていたが、今日の如く学術誌を専門とする雑誌社はまだ成立たない頃で、邦文の基礎医学専門書がや

っと出始めたのが、ちょうど生理学会の結成された頃だった。学校雑誌の別刷を集めて教室論文集を纏め、同学教室に寄贈しあうようになったのもその頃からである。そのトップは京大石川教室らしく、その第1巻は大正5年(1916)に出た。当時京大では、専門誌ではなかったが、目星しい研究業績を欧文に訳出し、大学紀要(*acta scholae medicinalis universitatis Kyoto, Japan*)として外国にもおくられていた。一方生理だけの欧文論文集のトップは京大正路教室で、大正14年(1926)に出始めた。

特記すべきは東大生理の橋田教授が主幹で、*J. of Biophysics* を刊行し出したことで、それが大正15年だった。だが、時期尚早のためだったか永続出来ず、やがて学術研究会議の *J. of med. science* の *III. Physiology* (1930) に引継がれた。これが亦官庁仕事で餘り一般化しなかった。

以上はいずれも生理誌発刊までの道行きだった。古い大学はとにかく、新制大学ではそこまで追いつけなかった。実験施設はとにかく、研究者の育成が、陣営が整わなかった。だが、あの単科医大の昇格案がだれの発案構想であったか、化学の大御所桜井錠二博士が学術研究会議の設立を構想し、発足せしめたと同じに、それは記憶されてよい大改革だったと顧みられる。

2. 日本生理誌の産婆役は誰がつとめたか

前記のような次第で、学会機関誌の要望は次第に高まって来たが、とりあげ婆さんの役は案外にも婆さんでなく若い層であった。昭和9年、この年は日本医学会が東京で開かれ、生理学会はその第3分科会で、関東大震災後やっと復興建築が出来たばかりの慈大で開かれた年だったが、学会後間もなく東京生理学雑談会というのが誕生し、雑談会の機関誌生理学餘外集が

生理誌発刊促進の役目を果たしたのであった。その産婆役は雑談会の発起人、福田邦三（名大）・福原武（新大）・林麟（慶大）・久保盛徳（慶大）・西丸和義（慈大・脈研）・鈴木正夫（千大）・杉本良一（慈大）・戸塚武彦（日本医大）・内山孝一（東大）の9名で、生理学研究の大衆に呼びかけた。会誌編集は内山孝一氏担当し、黒幕は橋田教授で、会誌の巻頭言は概ね無適先生の所信であった。

この雑談会の第1回は昭和9年5月17日赤阪の幸楽でひらかれた。長老永井潜先生も出席され、東竜太郎氏が「英国の生理学会について」の話があり、たまたま当時は減衰不減衰伝導学説の論争華やかな頃だったので、英国では discuss の意味が討論ではなく、どこまでも discuss で、膝を交えながら「よく味い、かみしめてみる」のが本旨だとの話もなかなか味がかった。会食は支那料理で、随分ご馳走が出たが、会費2円だったとはいささか郷愁を感じる。

日本生理誌の発刊については経済問題、特に掲載料が容易ならぬ問題であった。餘外集第1巻2号に戸塚教授が「日本生理学雑誌の費用について」、福田邦三教授が「生理学誌の財源の問題」を投稿されている。結果は「柏餅」みたいに、学会は原著の初頁と最終頁の印刷費だけを負担、中味は本人払いという制度に落ちついた。中々ニューモラスで、専ら編輯を担当してもらった戸塚教授の案である。だが助手副手など将来専門家になる人々にとっては中々の負担で、投稿者は自然各大学研究科生の業績が主

生理誌創刊号より5巻までの原著しらべ一覧

年代	巻号	原著 総数	大学別原著数
1936	1	38	慈大25, 慶大7, 名大4, 東大1 セブランス1
1937	2	33	慈大20, 新大4, 名大, 東大, 京大, 日本医大各2, 慶大1
1938	3	35	慈大25, 東大5, 慶大, 日本医大 各2, 千大1
1939	4	43	慈大14, 京大8, 新大7, 慶大, 日本医大各4, 阪大, 日歯, 京城 大各2
1940	5	46	慈大28, 京大, 日本医大, 日大歯 各3, 慶大, 名大, 東大, 阪大, 金大, 岡大, 京城大各1

となる傾向があった。生理誌第5巻までの原著表を作って見たら、慈大生理が随分多い、これは慈大の歴史が古く、卒業生が多く、小金もたまり、この機会に少しは勉強もしてみようと志した人が多かった結果だろうと思う。

3. 生理学雑談会の雰囲気

雑談会のメンバーは、それから25年もたち、すでに還歴を迎えた仁が2,3を数える。だがあの頃が日本生理学会として1つのエポックだった。

Bringing up father (親父教育) の時代であったとも回想される。餘外集第1巻の目次を見ても、その様相が窺われる。学想、詩想、隨想が淀みなく表現され、筆者も創巻号に「生理学繁昌記」などの与太記事を書かせてもらったが、蛙鳴坊氏は川柳、墓の仙人氏は狂歌で、諸先生を見事に諷刺している。既に物故された諸先輩のものだけを、1つは先師を思慕する意味で、1つは当年の学会風景の回顧の一端に再録させてもらいましょう。

蛙鳴坊氏の川柳

1. 光頭が消えて生理が暗くなり（京大，天谷先生？）
2. 減衰で押し切る意気な髪黒し（京大，石川先生？）
3. アルレスもニヒツも空と観じけり（東大，橋田先生？）
4. 物識りは毛の生え方に思案顔（岡大，生沼先生？）
5. 透過性活力説で鼻がつき（北大，宮崎先生？）
6. ヘーベルにオス，ムスクルス重荷なり（北大，朴沢先生？）

墓の仙人氏の狂歌

1. 人は皆蛙にうつつ抜かす時，我民族に呼びかけんとす（東大，永井先生？）
2. 横腹にいきなり窓を明けられて，驚きさわぐ猫のはらわた（新大，横田先生？）

こうした発刺として尙詩情を湛える学界風は、印象がわけて深い。一方ではまたBringing up father といった句も発散させた。だが餘外

集が餘外ではなく、本来の使命をさっさと果させた。これは案外に狸爺さんが後にひかえていたからとも観られる。本山に納っていた無適和尚さんなど、無適の、餘外のとのご託宜で、餘外どころか、まっすぐ本筋に導進させたという観方も嘘ではあるまい。

4. 生理誌成長の子守役は誰だったか

生理学雑談会で押せや押せおせと漕ぎつけ、とうとう昭和11年2月25日生理誌創巻号が生まれた。三秀舎の印刷で、用紙は当時の岩波の「科学」と同じ、飛切り上製の、卵色の洋紙だった。現在の生理誌の用紙に較べると全く貴族的用紙だった。

その年はちょっと前述したが、臺仙氏の狂歌に「身は鄙にかくれ棲めどもトロッキーその怪気焰社会を動かす」と諷刺された労研所長暉峻氏が当番幹事で倉敷に学会が開かれ、変り種の文博兼常音楽研究所長が母韻のエレクトロノグラムを発表した年だった。労研東京進出記念出版かどうか、暉峻氏邦訳の William Harvey の皇帝に奉った心臓血管生理書ももらった。一方学会報告抄録が生理誌に集録されたものの別刷で、各頁の半分はメモを書きとめるための白紙で、正に抄録の豪華判だった。学会も始めて5分科会に分れ、別に総会があり、各分科会の座長がその概要を総会に報告させられたのは大役だった。5分科会に分けたので、十分にデスクラスしてくれと時間の制限を無くした。ベルが鳴らされないので、これはノーベル、ショーだと無適先生に褒められたり冷かされたり、内容は忘れてしまい餘計な事が記憶に残っている。

生理誌発刊以来20年、忘却されない一事は、

創刊号から編集、校正、連絡などの一切を引受けられる戸塚教授の絶大なる努力への感謝の念である。久野名誉教授は国際生理学会の常事理事でもあったが、年月は短かいけれども Jap. J. of Physiology の編集も亦同然だが、椽の下の力持は、動もすれば忘却されがちである。生理誌の場合は、筆者が鶴岡生れて、生理誌と同じ鶴岡印刷会社で、長いこと社団法人庄内医学会誌を印刷してもらっている縁故で忘れ難い。幸い明春は学会が東京で、当番幹事が戸塚教授だから、一席その感謝慰労会には是非出席させてもらいたいと念願する。

5. 附記

生理学雑談会が主目的たる生理誌発刊の目的を達し、そこから東京生理学談話会が誕生し、それから月例談話会が120回を越している事実も亦大きな歴史的歩みだった。斯して地方部会も次々に生れたと観るべきだ。餘外集がその目的を達して廃刊する少し前から、日本生理学評論の刊行を目的とし、生理学試道集を何巻か刊行し、生理評論も戦争苛烈になって2巻で休刊のみである。生理学学会第1回から15回までの報告題目は生理評論第1巻に集録されている。米国では1937年は Annual Review of Physiology が創刊され、筆者がそれを試道集に紹介した覚えがある。日本の生理学も著しい進歩で且つ国際的に成長したので、追々そうしたものも必要だろうと思われる。過去を顧ることは、同時に亦将来を眺めることである。現在と現実とは別である。現実には過去を負うとともに未定がいつでも含まれている (33. 7. 5)。

不減衰伝導学説の回顧

加藤 元 一

不減衰学説の発表

最初の国内発表は大正12年(1923)年福岡で開かれた第2回日本生理学会の席上であった。

慶応生理からこれに出席したのは、私と牧亮吉君、それに大塚藤吉君(当時助手、後京城帝大教授)と大塚九二生君(当時助手、後京医城専教授)であった。私は不減衰学説の輪廓が出来上り、それを生理学会で発表しうることを喜びとし、誇りとも思っていた。これが私の慶応に赴任以来最初の生理学会への出席であり(第1回の時には私は外遊中でした)、そしてまた一方、恩師石川先生から流石は加藤はやりおたと大いにほめて頂けるものと信じていたからである。

私の演題は学会初日の午前中に組まれてあった。私は得意満面、発表を終って降壇せんとした。ところが意外、石川先生は満面朱をそいで立上り、「斯かる幼稚な研究をもって Verworn 先生の学説を批判せんとするは潜越至極である。そんな不減衰学説とやらで Verworn 先生や Lucas のあの広汎な研究成績が説明出来ると思うか! 余に2時間の時間を与えれば、慶応の学説をこっぴ微塵に打ちくだいて見せる。どうだ!!」

これを晴天の霹靂と云わずして何であろう。私は恩師に対して何と返答してよいか言葉が見当らず、真青になって演壇の一角に暫く立往生していた。そして首うなだれて座席に帰った。

私の一生を通じてこれ程の大きな shock をうけたことはない。なぜ石川先生があんなに烈火の憤りを爆発させられたのか判らない。自分は賞められるものと信じていた。自分の心で他人の心を忖度する世間知らず馬鹿者ではある。

これは大正12年4月の出来事で、当時の師弟の間の気持ちは現代の師弟間のそれとは大部違

ったものがあつたと思う。「7尺下がって師の影を踏まず」と云う様な古風な風習がいくらかまだ残っていた様に思われる。

恩師から強く打ちひしがれた私等4人は、昼食時の休憩を待って、そのまま宿に引きあげた。

そして落胆と憤慨と入り乱れた複雑な気持をもてあまして、ヤケ酒を呑み出した。それ切り学会には出席しなかった。

あとで聞いた話であるが、私達一行が欠席した席上で石川先生から「慶応(加藤)を生理学会から除名しよう」との提議がなされた由、しかしそれは採択されなかったのだそうである。

悲憤の思いを抱いて私等4人は東京にかえった。その汽車の中で私はいった。「あの調子だとこの先如何に努力してみたところで、この種の研究に関する限り日本ではとても駄目である。3年先きの大正15年にはストックホルムで第12回万国生理学会が開かれる。その会に乗り込んで不減衰学説の実験を公開し黒白を天下に問おう」。

私はこう云って涙ぐんだ、3人の中には泣いていた者もあった。

慶応の研究室ではこの時以来文字通り獅子奮迅の活動が開始された。

教室は勿論、総動員で不減衰学説の完成に没頭。私の忙しさは又格別、当時まで生理学の講義は全部私1人でやっていた時代であったから、その準備もしなくてはならぬ、教室内には約30名の助手諸君がいる。この研究者にはそれぞれのテーマを与え、その実験を指導し、自分でも実験をやり、夜おそくなってからまとまった業績を英文タイプに打つ。勿論私は研究室に泊り込みである。文字通り昼夜兼行のガンバリ方である。

その最中に突発したのがあの関東の大震災(9月1日)である。研究室は幸いにして焼失を

免れたが、絃電流計は台から落ちてこわれてしまった。何しろ東京の3分の1強が焼失し、鉄道が不通になったので市民の食糧を関西から船で運ぶという様な状態である。実験に必要な墓が手に入らない。皆夢中になって、ブラックを建てている。実験を続けるためにはどうしても自分で出かけて行って墓を捕えねばならぬ。

止むを得ず昼の時間をさいて、墓取りに出かけ、夜になって実験する事になる。私と牧君と郊外の住宅近くの茶畑の中をあちこち墓を物色して泥棒と間違えられるなど、笑えぬ喜劇的一幕もあった。しかし如何なる困難も私達の「何が何でもやりぬくぞ」という決心をばむ事は出来なかった。昼夜兼行の努力は依然として続けられた。

助手の1人張谷君は芝の済生会の官舎から四谷の私の生理学教室に毎日通っていたが、四谷から芝の官舎にかえるには12時半が終電車である。12時になると張谷君は、「先生お先きに失礼します」と私に挨拶して帰って行ったことを思い出す。

しかし余り心身の過労のためであろう、今迄病気というもの知らなかった私が遂に慶応病院に入院せざるを得なくなった。私はベットの上で、私の書いた不減衰伝導学説(英文)の校正を続けた。

かようにして大正13年(1924)にでき上がったのが英文単行本(不減衰伝導学説)上巻で、これが欧米各国の大学や研究所に向けて発送された。

第12回万国生理学会行

大正15年(1926)になると、先きに発送した私の英文不減衰伝導学説上巻“The Theory of Decrementless Conduction”の反響が欧米の各国から現われ出した。とくに米国が1番早かった。これは Herbert 大学の Forbes 教授一門がまさきに不減衰学説に呼応したためであろう。しかし日本ではそうではない。内心では不減衰伝導に心を傾け、賛成していながらも、学会などでそれを公に云う勇氣のある人はなかった。

林麟君(当時助手)がよくいったものだ。「正に国内1人の義人なしですなあ」そして公に聞こえるのは石川教授を旗頭とした一群の悪声のみである。先ず不減衰学説は国内では四面楚歌と云ってよい。

1. 出発準備

私は決然起って懸軍万里、第12回万国生理学会に赴き、不減衰学説の実験を公開して、天下に黒白を問わんと決意したのである。行く先は云うまでもなく Stockholm である。

同行する教室員諸君は、牧亮吉君(当時助手、現大阪府立労働科学研究所長)、内村良二君(当時助手、現昭和医科大学長)、三宅亮一君(当時助手、現在品川で産婦人科開業)、松山覺君(当時助手、戦病死)それに私を加えて5名である。実験に要する機械、器具一式は日本から持って行く。そのために1年も前から機械屋を督して特別上等なものを準備させた。

学会で公開する実験は左の3種で、その受持は次の如くにきめた。

1. 長短比較麻酔実験 牧君
2. 麻酔部の悉無律実証実験 三宅君
3. 麻酔部位に与えられた強弱刺激効果の差異は電流滑走によるもので悉無律に従わない証拠とはならないことを示す実験(以後これを切断実験とよぶことにしよう) 内村君

私は全部の実験の指揮、指導に当り、公開実験当日には、来賓者に対して実験の説明及び、それに対する質問及び、討論に应答する。

以上は公開実験に就いてであるが、私には別に大役がある。それは大会に於いて、不減衰伝導学説“The Theory of Decrementless Conduction”と題して、1時間に渉る講演(英語)と、それに対する質問、討論に应答をすることである。

以上の如く役割がきまると、実験担当者達は、初めての検舞台に立つべく、希望に燃えて、大正15年の初頭、まだ屠蘇気分さめやらぬ内から、勇躍して部署につき、準備を始めた。公開実験は8月であるから、まだ半年以上も先のことではあるが、世界の碩学の面前で公開する一

生一代の晴れの実験に、万遺漏なきを期したわけである。

私は実験準備万端の指揮をする一方では、私の受持である講演の為に、不滅衰学説の理論と数多くの実験の中から、適当に抄録して、しかも不滅衰学説全体の要領が得られるように塩梅し、それを印刷したパンフレットを学会に持参するように準備した。

私のスケジュールでは、5月東京出発、Siberia 経由で5月末日までに Stockholm 着。すると8月の大会までに6,7の2カ月の余裕がある。その中で7月は公開実験の準備に費やすとして、なお6月1カ月の余裕が生じるから、それを利用してヨーロッパを一巡りしよう。同行の諸君としては初めてのヨーロッパ行であるから、Berlin も見度いであろう。Paris にも London にも行きたいであろう。一方私としては各大学を訪問して、私が先に送っておいた不滅衰学説、上下両巻(大正15年には不滅衰学説下巻も出版された)に対する批判も聞きたい。又若い人達にとっては予じめ知名の学者達に会っておけば、公開実験の日に「上る」ことも少なからうと云うものである。

5月の出発を前にして4月東京で日本医学総会が開かれ、その総会に於いて、不滅衰学説の特別講演を依頼された。これは全く予期せぬことであったが快よく引受けた。それは国内に於いては四面楚歌であると思っていた私の不滅衰学説に対して、国内にも若干の関心を持つ学者のあることを物語るものであり、幸先のわるい話ではない。又私としては、この機会に私の講演に併せて、Stockholm で公開すべく準備してある前記3種の実験も供覧しようと考えたのである。之は確かに実験担当者にとっては好個の腕だめし、度胸だめしになるであろう。斯様な意味で特別講演当日は必要な実験道具を自動車数台に積み込んで、東大の安田講堂に乗り込んだ。これは先ず出陣を祝したものと見えよう。

2. 墓の輸送 Siberia 縦断

いよいよ懸軍万里、Stockholm 行きの日近づいた。一番苦心したのは墓の輸送である。こ

れを百数十疋携行して、供覧実験に使用しようというのである。Stockholm につうじる道は2つある。1つは印度洋まわりの船であり、他はSiberia 経由の汽車である。印度洋の暑さに挑んで、墓を運搬することが殆んど不可能に近いことは墓の性状を知る人のすぐ気付くことであるが、仮りにこれが可能としても、それから先が大へんだ。Nappoli に上陸して、ヨーロッパ大陸を縦断し、独逸に出て、また海を渡って Stockholm に入るか、または Gibraltar, Biscay 湾を廻って、Holland に上陸、海を渡って、Stockholm に入るかの外に途はなからう。これには40日以上が必要であろう。こう考えて見るといやでも Siberia 経由にしなければならない。

さて、汽車で運搬する方法である。袋かなんかに一しょに入れれば、話は至極簡単であるが、それでは必ず全部死んでしまう。墓は生餌ではなくては食わない。これに長い長い Siberia の旅をさして、そして3カ月さきの実験に使用しようと云うのであるから、正に難中の難である。結局大きい冷蔵庫用の箱3つを造り、その棚に1疋ずつならべてすわらせておくことにした。大変な荷物である。これは貨車の中に積み込んでおくことは出来ない。客車の中において始終世話をしてやらねばならぬ、墓係は牧君である。実験道具その他の荷物係が三宅君と松山君、会計係が内村君、そして渉外係を私がやることにした。渉外係の任務は頗る重大である。何となれば、時は1926年の春で、Siberia の通行はまだ安全とは云われぬ。Lenin の革命が成功して、労農 Russia が出来、鉄道や駅は全部、労働者が占拠して、秩序が完全に保たれているとは云われぬ状態である。Ural の Ekaterinburg では Russia の皇帝、皇后その他の皇族が根だやしに殺されて、血の香がまだただよっている。こんな時期に顔色のちがった日本人の一群が甚だしくグロテスクな姿をして墓や実験道具をもって Siberia を通らんとするのである。若し同行の諸君に万一のことがあっては、私は主導者として、本人にたいしては勿論のこと、家族の人々に対して申訳ない。そこで念の

ために故後藤新平伯にお願いして Russia 当局から「保護証」なるものを受けて貰った。それには Russia 語で「加藤教授一行並びに実験動物は国際的儀礼をもって無事 Siberia を通過せしむべきものなり云々」としてある。私はこの保護証を後生大事に内ポケットに納めて東京駅を出発した。ところが幸か、不幸か、この保護証が物をいって、無事ことなきを得るという事件が起ったから、用心はしておくべきものである。話は前後するが、この事件を一寸ここで話しておこう。

墓係としての牧君の仕事は、見ているのが気の毒なほどである。Siberia の汽車は駅に着くと、30分位は停車する。牧君は駅に着くや否や列車を飛び出し、駅の附近を急ぎ見廻って、若草を集めて来て墓の尻の下に布いてやる。そして頭から「ジョロ」で清水をかけてやって元気づけでやる（そのために「ジョロ」を日本から持って来た）。そんなに世話してやっても Siberia の途中で2疋、3疋と次第に死んで行く。全くもって心細い限りである。或駅で牧君が型の如く墓の世話をしている時、2疋ばかり死んだのがいたので、何気なくその死体を客車の便所の穴の中に捨てた。これが飛んでもない事件を引越こすことになったのである。

Siberia では列車が駅につく毎に、工夫風の係員が大きな金鎚をもってレールや車輪を叩きながら巡視して、故障の有無をしらべて歩く。運悪くもこの工夫殿の鼻の先きに牧君の捨てた怪物が落ちて来たのである。工夫君、さぞ驚いたことであろう。見たこともないグロテスクな怪物が俄然列車からレールの間、しかも自分が今しゃがんで検査している頭にすれすれに降って来た。「ギヤッ」と云う奇声が聞こえて間もなく、鎚をもった大男が私達の箱に大変な勢いでどなり込んで来た。「ド奴の仕方だ」とでも云うのであろう。大声でわめき散らす、Russia 語なのでさっぱり分らない。こちらが英語で云っても、独逸語で云っても先方には通じない。先方の云うことは分らないが、その態度、語気、表情から見て「これは只事ではない。大変なこ

とになった」という事は分る。どうも「汽車は出してやらないぞ」といっているらしい。なり行きによっては、汽車から引ずり出されそんな形勢になった。何しろ急に労働者の天下になって、無教養の連中が有頂天になっている時代とて手がつけれない。

見ると牧君は真青になっている。私も事の急なにあわてたと見え、懐中にある例の保護証のことを忘れていた。それに気がついて「そうだ」とばかり、大きなソ連政府の印のつづばである保護証を彼につきつけ、伝家の宝刀の切れ味や如何にと見守った。ところが残念ながら工夫殿にはそれが読めないらしい。それをもって一先づ駅の事務所の方に帰っていった。

駅には乞食が一杯うようよしていた（あとで聞くと、それ等は乞食ではなく、一般市民で、あの当時はあんな服装しか出来なかったのである）。その中に誰か文字のよめる人がいたのか、それとも協議でもしたのか、例の工夫君は保護証をもって、若干丁寧な態度に改まって帰って来た。これで無事に事はおさまったが、この事件の為1時間ぐらゐも発車は遅れたであろう。

こうゆう突発的の出来事はあったにしても、汽車で走っている間はまだよい方である。こまるのは乗換えの時である。墓の入った大箱3つは赤帽に運ばすわけには行かない。吾々の手で客車からおろし、手車様のものに乗せて別の列車又は船まで運ばねばならぬ。何しろ、箱の中には大事な墓殿威儀を正して端然とならんでるのであるから、横にすることは勿論危険である。こうした心づかいは他人では出来ない。どうしても吾々自身の手でやらなければならない。しかもこういう苦心を少なくとも10度は繰り返さねばならなかった。「何時間先きには乗り換えだ」と考えるだけで神経衰弱になりそうだと一同こぼしていた。先づ東京駅で自動車から列車へ、神戸では列車から汽船へ、大連では船からホテルへそして更にホテルから列車へ、そのほか、当時は大連から Harbin に着くまでに、長春で乗り換えねばならなかった。しかもそれが真夜中であつたのでその苦勞たらお話しにな

らなかった。しかし Harbin からは Siberia を縦断、白樺の林に送り迎えられ、遠く Ural を越えて一路 Moskva に入ることができた。

当時首都 Moskva の混乱ぶりは、恰も関東大震災直後の東京の様であった。Kremlin 界隈のとある食堂で食事をしていると、きたない孤児の一群を連れてきたない服装をした女が食卓の傍に不遠慮にやって来て「何かくれ、孤児に与えろ」と云う。往来する市民を見ても店先を見ても、終戦直後の東京といった状況である。これは考えて見ると無理のない事で、第一次大戦から革命へと、二重の戦禍に見舞われたわけで、食うものも、着るものも無くなった筈である。鉄道沿線に跣足の人が多く、駅には乞食が充満していると思ったのは、乞食ではないわけが解った。

Moskva から Leningrad を過ぎて、1歩 Finland に入ると、俄然として視野が一新する。駅は清掃され、心地よい緑の田圃が広々と眼前に展開して来る。「やれやれ、やっとの思いでここまで来た。命拾いでもした様な気持で一同ホッとしたのであった。思えばやかかいな大荷物を持って、言葉も通じない混乱の長い旅をよくもそこまで無事にやって来たものだと思う、幸運であった。

Helsinki から Stockholm まで、Baltic 海を南下する船の旅は快適であった。先年 Helsinki で開かれた Olympic に参加した人は見たであろうが、船から見る海浜の風物、山河、飛ぶかもめの姿、隠見する小島のたたずまいなど、さながら瀬戸内海を旅している心地で、郷愁をそるものがある。

私は日本を出てから、目的地に着くまで、随分と勉強した。旅行中毎朝目がさめると寝台車のベットのの中で先づ大会でやる不滅衰学説の講演の稽古を1回する。これが1時間。それが終わると、起こり得べき、質問や討論を予想して、それに対する答弁の稽古をする。これが少なくとも1時間はかかる。以上が全部すまなければベットから降りず、朝食もとらない事にきめていた。

Stockholm では、Caroline 大学 (Carolinska Institutet) の生理学教室に Liljestrand 博士 (生理の助教授で、本大会の準備委員長) を訪ね、不滅衰学説の講演と、公開実験に関する諸事万端の打合せをした。そして携行して来た実験道具一式及び、墓を同氏に預け、その保管と保護とを依頼した。時は5月31日であった。

公開供覧実験の準備

大会を1カ月の先きに控えて、私達一行は意気軒昂たるものがあつた。まず公開実験の準備をするために、Caroline 大学から実験室を借りねばならない。実験道具一式は周到に日本から持って来てある。感応電気機は申すに及ばず、刺戟装置、麻酔箱、各種の手術道具、それに導線から電鍵用の水銀に至るまで、用意して来たのである。借りたいものは、部屋と実験台 (机) と電池だけである。

2つの部屋を用意してもらい、大きい1つは供覧実験室に、1つは控室に定めた。大きい実験室の窓際に大テーブルを2つおき、それぞれ、牧君受持の実験 (長短比較麻酔実験) と三宅君受持の実験 (悉無律の実証実験) の装置を据えつける。内村君受持の切断実験は部屋の中央においた大机に準備した。

これから毎日この実験室に通って、公開実験の準備や稽古をするわけである。

何分、日本を出てから約1カ月半、実験から遠ざかっていたので、腕が鈍っている。これを大会までの1カ月の間に元の腕前またはそれ以上に磨き上げなくてはならぬ。

私の今1つの役目である不滅衰伝導学説の講演の方は、旅行中と雖も必ず、日に1回は稽古しているし、加之 Berlin 大学では Hoffmann 教授の追悼講演で試験済みであるから、大して心配はいらないわけであるが、然し天下の晴れの舞台ではあり、莫大な努力と時間とをかけて、わざわざこの大会まで来たのであるから、念には念を入れて万全を期さねばならぬ。

これから約1カ月の間、毎日実験室に通わねばならぬ関係上、一行の宿は大学に近い Hotel

Continental の2間続きの2室(バス付)に定め、私と牧君とがその中の1室に、隣りに内村君と三宅君とが同室した。このホテルから実験室まで徒歩約15分の距離である。それからの毎日の日課は左の如くである。

朝食をすますと、3人を実験室に送り出す。そしてそれぞれの受持の実験を稽古する。私は午前中ホテルの部屋に残って、講演の稽古を2回する(これが正味2時間かかる)。講演に要する大きな図十数枚(丈夫な紙を布で裏打ちしてある)は東京から用意して来た。これを部屋の壁一杯にはって、それを鞭で指しながら、大会でやるのと同じ調子で、声を出して稽古するのである。それがすむと討論応答の稽古をする。「あの質問がかかるかもしれない」「この質問が来るかもしれない」と可能性のある質問を予想して、その答弁を練るのである。最後にそれをノートに書きつける。その数が多くなって遂には索引をつけねばならぬほどになった。その方の稽古に1時間半以上かかる。全部を終る頃には声がかれて、相当疲れて来る。これで丁度12時頃になるから、3人分の弁当(弁当といっても丸い「パン」を2つに割って、中に「ハム」又は「チーズ」を挟んだもの)を私をもって大学の実験室に行く。4人でその弁当を食う。「パン」がばさばさしてお茶が欲しい。慶応ならば「小使お茶をもって来い」と云うところだが、ここではそうは行かない。実験室の水道の栓を捻り、首を曲げて、流れ出る水をじかに口に受けて我慢する。

夕方まで実験の稽古をつづけ、それを終ってホテルに帰り夕食をすますと、あとは自由で、美しい水の都のあちこちを散歩する、水の都の美しさ。

「1日の仕事は終わった。なすべきことはなした」という安心した気持も手伝って、この夕方の散策は実に快適である。北の都の夏は夜11時過ぎになってもまだ明るい。悠々釣りを楽しんでいる人を暫く立って見る。鯛と鯉との合の子の様な魚(日本では見たことがない、鯛にしては口のあたりが尖り過ぎている)、がよく釣れるそれを

大きな紙袋に入れているのが、我々には面白く且つおかしく感ぜられた。魚まで呑気なのであろうか、見ている間に次から次へと釣れる。ステッキの先に糸をつけたものでもつれる。「あの連中が日本から来た加藤教授一行だ。日本から大きな墓を持って来て、大会で公開実験をやるのだそうだ」などと云う市民の声が行きずりに耳によく入る。市民には目についたことであろう。何しろ顔いろのちがった4人がいつもそろって夕方になると散歩に出る。1カ月前から来てとまりこんでいるものは外にはない。

斯様な平穩無事な日課が20日余りも続いた。大会が日1日と近づいた。日が迫るにつれて、一行の気持に少しずつ、妙な変化が現われ出したのに私は気付く様になった。私は念のために睡眠薬(カルモチン)を1瓶日本から持って来て、それを寢室の小机の上においた。それが誰が飲むのか、少しずつ減ってゆくのである。

実験には絶大の自信がある。これは私にしても、牧君にしても、内村、三宅君にしても皆同じである。だからこそ遠路をここまで来たのである。しかし公開実験は只1度きりで、やり直すわけには行かない。牧君の受持の長短比較麻酔実験にしても、消滅時間が長短同時の成績に充分の自信はある。しかしその只1度きりの公開実験で、若し万々一、長い麻酔部位の方の消滅時間が短かく出たらどうしよう。若しそんなことでもあったら、滅衰学説を再確認させるために来た様なことになる。しかも前にも述べた通り、普通の実験では、そうなり勝なのである。もし手術の時に世界中の学者の眼に牧君が多少でも「上って」手術の手運びに多少の狂いでも生ずれば、長い方が早いという Verworn の様な成績が出ないとは神ならぬ身の保証は出来ない。若し万々一そんなことにでもなったらどうだろう。実験担当者としては私に対してすまない、私は又慶応に対し、又日本に対して相すまぬ。こう考えてくると、3人の実験担当者が寝られなくなったのは無理はない。只1度の実験に総ての運命を賭けるのである。

昔源平屋島の戦の時、那須の与一宗高が、扇

の的を見事に打ち貫いた。与一は充分の自信があったからこそ、平家方の誘いに応じて、駒を波間に乗り入れたのである。しかし風はあり波はある。扇的的はゆれている。はずれる可能性が絶無とは云われない。若しあの一矢が扇の要を射貫かなかったらどうであろう。与一は弓矢の面目にかけて、生きてはいなかったであろう。

実験担当者の3君の気持は正に与一のそれであったのである。私は口でこそ云わね、心の中は3人と同じこと、或いは3人以上のものであったのである。

公開実験

明日はいよいよ運命を決する日である。充分に休養しておこうと、ふだんよりも早くベットに入った。私は実験担当者の諸君が充分に寝てくれる様に心に祈った。暫くすると隣のベットで牧君が軽いイビキを始めた。寝ついたらしい。よい塩梅である。私自身は講演と実験の説明をするのであるから、寝られなくとも大したことはない。講演用のパンフレットもあるし、又充分に稽古もしている。しかし実験者はそうは行かない、充分に寝ていないと、大事な手術の時に知らず知らず手が震えて思わぬ失敗をするかもしれない。3人とともに良く寝てもらわねばならぬ。皆寝ついたらしいので私もカルモチンを呑んで寝た。

私は朝早く、一同のまだねている内に起き出し、バスを取って沐浴し、体を清めて廊下に出た。そして東天、明治神宮に向って合掌した。これは那須の与一が弓に矢をつがえて、暫く瞑目、南無弓矢八幡大菩薩と祈ったと同じ心境であろう。事は甚だ非科学的に響くが、しかし実験室に行く途中で自動車にぶつかる事なきにしもあらず、又何かの偶然で、科学のワクを越えた予期せぬ不幸の出来事が突発することがあるかもしれない。斯様のことのない様に、無事実験を終らせ給えと祈念したのである。午前中は私の講演で午後が実験である。

充分の用意を整えてホテルを出た。皆肅として声なく歩いた。途中に小さな橋がある。私は

「この橋を帰りに渡る時、どんな気持で渡るだろうか」と心に思ったが口には出さなかった。

講演

不滅衰学説1時間の講演を終った。稽古に稽古を重ねてあるので、日本語の講演と同じである。すると案のじょう Fröhlich 博士(滅衰の本山 Verworn の高弟で、Bonn 大学の助教授、滅衰学説全盛時代には最も盛んに活躍した人)が質問に立った。この質問は兼ねて予期して、何べんとなく応答を練習しておいたものである。自分ながら鮮やかに答弁できた。

次いで、ソ連 Kazan 大学の Samoiloff 教授(神経専門家)が立って、私の学説に対して賛辞を述べたあと、「従来、中枢の制止現象を滅衰をもって説明していた。然しそれは無理である。……滅衰論は今や健全ではない」と結んだのは愉快であった(因に、ソ連の学者は多くは独逸語で講演する。露西亜語は万国生理学会の公認語となっていない。公認語 official language は英、独、仏、伊国語であった)。

私の丁度前の机に Herbert 大学の Forbes 教授(最初に不滅衰学説に呼応した人)がいた。私の講演が、麻酔部位に於ける動作電流試験のところまで来ると、私は Forbes 博士に眼をやりながら聴衆に向い「ここに Herbert 大学の Forbes 教授が来ていられる。同博士は吾々と同一の実験をして同一の(不滅衰の)成績を得られた。依って私は Forbes 教授にこの部分の報告を譲り度い」と Forbes 教授を促した。

これは Forbes 教授の Washington の生理学会に於いて示された美しい態度に対する私の寸志と敬意とのしるしである。

現在欧米に「加藤及び Forbes の不滅衰学説」と2人の名でよぶ学者や教科書もあるが、私はむしろ、これを心よく甘受するものである。

斯くの如くして、午前の不滅衰学説の講演は予定の如く首尾よく終了した。

午後が問題の公開実験である。

供覧実験

午後1時開始予定の供覧実験の準備は完全に整った。私は実験担当者の3人に向い「どんな

質問をされても、決して自分で答えてはいけない。その応答は私が全部引うける。英語や独逸語を考えている間に、肝心の手の方がお当守になる。私は実験室のボードに「実験装置に手を触れないように願います」と大書しておいたにもかかわらず、まっ先に実験室に入って来た Fröhlich 博士 (Verworn の高弟で午前中に質問した人) は導線のつなぎ方まで1つ1つしらべ出した。何か誤りでも見つけて突込んでやろうと思ったのであろう。

そうする内に各国の学者諸君 (特に神経生理学に興味を持つ人が多い) 来るは、来るは、その中には勿論 Adrian もいる。Cremer もいる。A. V. Hill もいる。Lapicque もいる。大体学者の顔振れのそろったところで、私は**実験開始**を宣し、供覧する3つの実験について、簡単に説明した。念のためにその要点をしるすと、

第1実験

牧君の供覧する「長短比較麻酔実験」は旧学説では、麻酔部位の長い方が消滅時間が短かく、そしてその成績が減衰学説の一大根拠となっているが、これは誤りで、分枝部と麻酔薬拡散の影響である。私達のする様な周到な手術をやり、且つ限界長 (6 mm) 以上の神経麻酔部を用いて、その長短の消滅時間を比較すれば、正に同時である。ここに供覧する実験では、15mm と、30mm とを麻酔部位として比較して、消滅時間の同時であることを御目にかける。

第2実験

三宅君の供覧する「悉無律の実証実験」に於いては、大なる興奮も、小なる興奮も、麻酔部位に於いて同時に消滅する事を御目にかける。即ち麻酔部位が悉無律に従うことを御覧にされるのである。Lucas と Adrian の両博士は (Adrian は来場して三宅君の実験台の傍らに立っている) 興奮の大小 (大きさ) は、これが消滅しないで伝導しうる麻酔部の長さによって測定されうるといふ。換言すれば、大きい興奮は長い麻酔部位を、小さい興奮は短距離しか伝導する事が出来ないと、両博士はこの「モットー」の下に数々の研究をなし遂げたのであるが、私は今、

ここに、大なる興奮も小なる興奮も、消滅する時には同時であるということ、即ち麻酔部位が悉無律に従うことを、検証してお目にかげんとするのである。

第3実験

内村君の供覧する「切断実験」は、麻酔部位に与えた強弱2つの刺戟効果の差異は、Verworn によれば、麻酔部位が悉無律に従わず且つ減衰のある証拠とされているが、これは誤りで、電流滑走のためであることを実証してお目にかげんとするものである。麻酔部位に強刺戟を与えると、筋の収縮するのは、この強電気刺戟が麻酔部位外まで滑走して、正常なる神経部位を刺戟するためである。弱刺戟が筋収縮を起さないのは、弱刺戟は遠距離 (麻酔部位外) まで滑走し得ないからである。電流滑走距離は、刺戟電流の強いほど大であることは、私の発見した新方法によって滑走距離を測定して見ればわかる。斯様なわけであるから、強刺戟で筋肉の収縮を見て、その直後に、その刺戟部位を一気に切断 (極大の機械的刺戟) して見ても、筋肉は微動だに示さない。これ機械的刺戟には滑走ということがないからである。本実験では、麻酔部を切断しても筋肉は収縮を示さない事実をお目にかける。

大体以上の様に説明しておいて、牧君の第1実験から開始した。Fröhlich 博士が眼を皿の様にして監視している。

麻酔箱には蛙 (Holland 産の大きい水蛙) から取出した神経の長い部位 (3.0cm) と短い部位 (1.5cm) とが渡してある。

牧君は、麻酔薬を麻酔箱に入れて、ストップウオッチを押した。これから長短麻酔部位に於ける消滅時間を衆人看視のうちに測定するのである。ストップウオッチは、1分、5分、10分、15分と不気味に動いている。ストップウオッチが20分を指した。私は云った。

「今麻酔時間は丁度20分を過ぎました。長短とも近心正常部刺戟によって筋肉が収縮を示す。即ち長短ともまだ伝導しています」数十の瞳が牧君の電鍵を握る手と、目標の筋肉を凝視して

いる。

「あっー」短い麻酔部位の方が1足先に消滅時間(伝導麻痺)に達した。ストップウォッチは24分15秒を指している。直ちに長い部位の方を検すると、これも伝導中断、その間1秒の差か!

「短い方が24分15秒で伝導中断、長い方は24分16秒、却って短い方が1秒早かった、が正に同時である」とアナウンスする私の声が、うれしさと感激とで、うわずっていたそうである。

次は三宅君の第2実験。この実験は牧君の実験に比較すれば危険率が少ないもので、私は初めから、それほど心配していなかった。果して大小の興奮は全く同時に消失した。三宅君の実験を終始熱心に見ていた Adrian は、

“Wonderful Demonstration!”

といて、私に握手を求めた。誠に立派な態度である。

残るのは内村君の第3実験(切断実験)である。

ここまで来ると私の心も大分落ちついて来た。内村君は麻酔箱に麻酔薬を入れ、消滅時間の来るのを待って、スポイトで麻酔液を吸いとり、次いで麻酔部位に強弱の2電気刺戟を与えて見た。弱刺戟は筋収縮を起さないが、強刺戟は筋肉の収縮を起した。ここまでは、誰がやっても問題はないところである。誰がやっても必ず Verworn の云う通りになる。そのあとで、すぐに、今電気で刺戟した麻酔部位を切断するのである。強い電気刺戟では筋が収縮をしめすが、切断(機械的刺戟)では動かぬことを示さんとするのである。

内村君は電気刺戟を終わって、將に鉗を取って麻酔部を切断せんとする姿勢を示した。俄然、観衆の後から声がかかった。「ここからは筋が動くか、動かないか見えない」多くの学者が切断の時の筋の動否を自分の眼で確かめんとするのであるが、後方の席の人にはそれが見えにくいのである。「よし、では僕が切断の瞬間に、筋が動いたか否かをアナウンスしよう」と申出たのは、1番前列にいて実験を見ている Holland の

Groningen 大学教授の Buytendijk 博士である。

内村君は右手に鉗を持ち直し、左手でその手首のところを支えて、静かに鉗を神経に近づけた。鉗と神経との距離が1, 2cm に近づいた。「あっ! いけない! 手があんなに震えている」あの様に手が震えていては、筋が動くかも知れない。私は見ていられなかった。眼を天井に向けて視野をはずした。そして「静かに! 静かに! 落ついて!」と日本語でいった。

何秒か流れた。

“Keine Zuckung!! no twitch!!”

Buytendijk 教授のかけ声が高く響いた。

私は天井から、実験に眼を移した。内村君は麻酔部位を切断し終って、静かに鉗を引くところであった。

“Revolution der Physiologie” と誰かがさげんだ。祝詞をのべ、握手を求める学者が続いた。中でも仲の良い Berlin の Cremer 教授や、Berlin 大学の Ascher 教授は、お祝いを述べて私の肩に手をやりながら「供覧実験というものは、どんな実験でも、そんなにうまく行くものではないのだが、今日の供覧実験は誠に見事であった。あなたもさぞ満足であろう。お目出度う」と喜んでくれた。そして Ascher 教授は、日本への帰り途に是非 Berlin 大学へもよって貰いたいと、つけ加えた。

私共は自分の生れた日本で、この様な親しみのある言葉をかけられた事がないので、つい眼頭があつくなってしまったのである。

翌日、私は本大会に於いて神経、筋肉部門の議長を依頼された。

実験後記

大正12年4月、福岡で最初に不減衰学説を発表して以来、胸底に画いていた今日のこの公開実験、四面楚歌をじっとこらえて今日あるを待っていたこの公開実験は、予想以上の美事さをもって終了したのである。

賞讃の拍手を背に浴びながら実験室から出た。そしてホテルへの道を歩いた。皆無言である。一語も発するものがない。途中にある小橋も無言で渡った。今迄背負っていた重い責任、

それで緊張しきっていた心が、急に弛緩したためであろうか、自分でも何だかわけの分らない心理状態である。これは単なる疲労ではない。その中に泣き度い様な気持が交っている。これが勝者の悲哀というものであろうか。

ホテルに帰って食卓についた。私は実験を受持った3君に対して改めて「御苦労でした、感謝します」私は眼頭が熱くなって涙を止めることが出来なかった。シャンペンを抜いて祝盃をあげ、それぞれ東京の家族に、「大成功」の電報を打った。私は別に学校（慶応）へも電報を打った。これでやっとお互のからだの内部に「実験は大成功裡にすんだ」のだという実感が起った。

この晩私の脳裏を去来した感想をここに記しておこう。

「もうこんな事は決して2度とやるまい」思えば大胆無謀な事をやったものである。幸い実験がうまく行ったから、よかったものの、万一失敗していたらどうであろう、仮りに牧君の実験で長い麻酔部位の方の消滅時間が短かく出たらどうであろう。また内村君の切断実験で若し筋が動いたらどうであろう。内村君の手があんなに震えていた。その危険も絶無とは云えない。自信は充分にあるとはいえ、公開実験は只1度きりである。

名人那須与一の矢と雖ども、只一矢のみでははずれることが無いとは云えなかったのだ。与一はうら若い武士の一生を、あの一矢に賭けたのだ。我々の実験もこれと同じであった。私自身は主唱者であるから、どうなろうとも当然のことであるが、帯同した3人は人の子であり、夫であり、父である。ああ危険なことをしたものだ。もう2度とこんな事はやるまい。

とればうし、とらねば物のかげなら

ず、捨つべきものは弓矢なりけり。

真に捨つべきものは弓矢である。

実験を受持った当人はさることながら、当守をあづかった父君や母君や細君はどんなに心配されたことであろう。思えば心なきことをしたものである。

「捨つべきものは弓矢である」

公開実験の当日、私の当守宅では、早朝、家族に女中まで明治神宮に参拜して、実験の成功を祈念した。他の実験担当者3人の家庭でも同様であった。その中で牧君の当守宅の実験当日の様子が父君のSingaporeの領事館宛の手紙で分った。と云うのは、私共一行の帰途のスケジュールにMarseilleから船で印度洋経由、Singaporeに寄港することが予め打合せてあったからである。

牧君の当守宅では、実験の当日、氏神様に参拜して帰り、居間に父君、母君、それに奥さんが集まり、実験の結果はどうなったであろう。うまく行ってくればよいが、と心配の額を集めていた。

そこへ、電報！

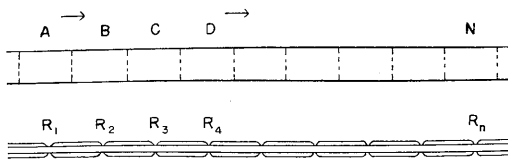
“ダイセイコウ、アンシミアレ”

家族の人々は皆だまってしまった。一語を発するものもない。牧君の父君の手紙の原文をもってすれば「一家声なく……」私はあの時から30有余年を経た今日、これを書きながら、あの当時の感激が脳裡に蘇って来て涙が止まらない。眼鏡が曇って筆が運べない。

不減衰伝導学説を顧みる

私は1930年に単一神経繊維の生態別出に成功した。そしてそれ以後、その単一神経繊維を用いていろいろの実験が行なわれて来た。それ等の実験成績についてはここに申し述べる余白はないが、その主要な点については読者諸君に於いて充分承知のことと思う。今、これ等の新事実を知って不減衰学説を顧みると、興味津々たるものがある。不減衰学説は単一神経繊維生態別出の成功前にできたもので、前者は1923年、後者は1930年の創始である。不減衰学説の樹立当時は、単一神経繊維が生きてままで別出されて、それが実験に使用出来ようなどは、世界中で誰1人として（私もまた）夢想だにしなかったものである。

人によっては「単一神経繊維の研究が進んだので、不減衰学説は無用になった」などと考え



興奮伝導説明用模型

上: 神経又は火薬の綱で, A, B, C, D, ……N等の section に分けて考える。

下: 単一神経繊維で $R_1, R_2, R_3, R_4, \dots, R_n$ はラ氏絞輪。

ている人があるかもしれないが、これは思わざるも甚だしいと云わねばならぬ。

心ある読者諸君は、この単一神経繊維によって得られた諸成績（拙著「科学者の歩める道」p. 167~178 参照）が、如何によく、それ以前に樹立された不減衰学説の説くところと一致し、之を立証するに役立っているかに驚嘆されたと思う。私自身もその両者の一致に喜びと同時に驚嘆している一人である。

不減衰学説の根本思想は御承知の様に「神経の興奮の伝導は、途中の場所場所で与えられるエネルギーによって営まれるもので、興奮はA（模型図を見よ）で与えられたエネルギーによってBへ、Bで与えられたエネルギーによってC

へと、その場所場所で与えられたエネルギーによって、伝導して行くもので、減衰することはない。そして正常と非正常との間には単に量的の差があるのみで質的の差はない」ということである。

今や単一神経繊維による研究が進歩したおかげで、以前には単にAよりBへ、BよりCへと、只抽象的にのみ表わされていた場所（即ち途中でエネルギーを与える場所）が判明したのである。これが $R_1, R_2, R_3, R_4, \dots, R_n$ （神経繊維の図を見よ）等の絞輪部なのである。

藁では絞輪間の距離 (R_1 と R_2 の距離) は約 2mm であるから、 R_1 で与えられたエネルギーによって 2mm 先の R_2 へ、又 R_2 で与えられたエネルギーによって 2mm 先の R_3 へと、跳躍的に悉無律に従いながら伝導して行くのである。

麻醉薬を作用させて非正常にした場合は、その非正常の程度に応じて興奮の大きさ（ラ氏絞輪に生ずる動作流の大きさで表わされる）は量に於いては小となるが正常の時と質に於いては変化することなく、即ち尙依然として悉無律に従い減衰することなく伝導されるのである。

日本生理学会の思い出

越 智 真 逸

日本生理学会の創設を初めて建議したのは大正2年の頃であった。それ迄はパラジエーテンの如く他の学会に便乗して発表するに過ぎなかった。

それで当時の京大生理学教授石川日出鶴丸先生に同じく助手たりし同僚正路倫之助氏と共に日本生理学会の設立を建議した。

その条件としては、1) 会頭又は会長なるものを置かないこと、2) 全国の各大学の生理学主任教授を、その年の主任とする事であった。

之の制度は以後永く保持されて現今に及んで居る。之は今日から考えて最も優秀な制度であったと信じて居る。願くは今後共、永く之の制度を続けたいと思う。

生 理 学 会 の 思 い 出

中 西 政 周

(高槻市大阪医科大学)

筆者は昭和14年以後10年余も生理学界を離れて居たので、学会の思い出を語るとなると、それ以前に遡ることになる。しかも老境に入って記憶力も大いに衰えたので、思い出せることは極めて僅かなものになってしまった。

偶々先頃浦本政三郎教授から氏の最近の著「過去半世紀の日本生理学界の回顧と展望」(山形県衛生研究所報 No.1 別刷)を恵与されたので一読したが、詳しく当時の学者達の活動状況や研究分野が述べられて興味があつたので、読者にも一読をおすすめしたい。之で当時の生理学会に報告された諸学者の研究方向も窺えるであろうと思うので、筆者はただ前頃の学会の空気といったようなもので思い出せるほんの僅かなことを記してみようと思う。

筆者が思い出す頃の学会では恩師である京大の故石川日出鶴丸先生、東大の故橋田邦彦先生と東北大の藤田敏彦先生達が最長老として控えて居られた光景が眼前に彷彿する。当時は今と較べると大学の数も少なく従って学徒の数も少なく、又指導教授の研究分野に一般生理学的なものが多かつたので、今日のように研究分野が多岐に分れて学会の会場が幾つもあるというのではなく、一堂に会してむしろこじんまりした学会であつたと言えよう。

そうして若い学徒の好い研究には長老の先生達が讃詞や激励の言葉を与えたりして、なごやかな光景も見られた。著者も長老の先生達には慈父のような心持で接することが出来た。尤も一時は神経興奮伝導の減衰、不減衰の論争が京大石川学派と慶大加藤学派とのあいだに交わされて、出席者の注意を集めたこともあつたが、然し今日の学会と比べて特に取り立てて云う程の特徴という程のものは外にはなかつたように

思う。研究報告に対する質疑応答でも今と同様にむしろ低調であつたと思う。之は矢張りそれに与えられる時間が短か過ぎるので、質問者も応答者も十分に意を尽し得ないからであろう。いつも思う事であるが研究報告の数が多い事が必ずしも重要ではなく、其の研究が正しくなされて居るか否かを検討することが重要なのではないかと思う。之につけて思い出すが、筆者が若い頃英国 Cambridge 大学の故 Langley 先生(筆者が始めてお会いした時既に72才の高齢であつた)の教室でお世話になっていたころ Langley 先生主催の生理学会が開かれて、筆者もその末席に列なつたことがある。此の時は有名な Bayliss や Haldane などの長老も来られていた。中堅どころでは Hill や Barcroft が目についた。出席者数は70~80名位であつたように思う。此の学会では口演が終つてそれに質問が出ないと必ず Langley 先生が Hill を顧み、何か云うことはないかと促すのである。Hill は少し意見を述べることもあり、又は別に云うことはありませんと答えて居た。此の「研究には必ず批判を加える」という行き方は、筆者は始めて見たところであつて深い感銘を受け学会はこうあるべきだと思つた。かようなやり方は日本では見なかつたので物足りない思いがして居たが、最近いつ頃であつたか忘れたが、大阪大学で近畿生理学談話会が開かれた時に、初めて吉井教授は口演者に対して質問がないと、其の研究方面に関係ありと思われる教授を指名して批判を促しておられたので、筆者は若き日の英国での経験を思い出して、こりや好い事を始めて呉れたと心ひそかに喜んだのである。然し之も此の談話会だけで止んだのは惜しかつた。地方会では是非之をやってもらい度いと思う。「批判

の無い処に発達はない」のであるから。尙質問
 応答の短か過ぎることに関連して思うことは、
 管ての「生理学餘外集」(月刊)や「生理学試道集」
 の事である。此の種の刊行物で学会での討論の
 不足を補なってはどうかであろうか、又兼ねて会
 員の随筆や書評さては和歌俳句の類までも載せ
 たり、又学会や生理学雑誌の在り方について広

く「会員の声」を聞いてみてはどうであろうか。
 とにかく少しはくだけた読物も与えてもらい度
 いと思う。内山教授あたりに御願いたいの物
 である。どうやら学会の回想から脱線したよう
 であるが、少しく筆者の希望も述べさせてもら
 った次第である。

日本生理学会初期の思い出

久野 寧

日本の生理学は1876年大沢謙二先生がTiegel
 講師の後をうけて東大に生理学講座を開かれ
 た時から発足したものと見える。その後年を経
 て少数の医学校に生理学が講ぜられた様である
 が、それは生理学の発展に功献する所少なく、
 1899年に天谷千松先生が京大の講座を開かれた
 時から画期的進歩を示すこととなったと思われ
 るので、東大と京大との2講座が日本生理学の
 黎明期というのは当然ぬかもしれぬが、兎に角
 その第1期を代表するものといいうるのであ
 ろう。

大沢先生の許に多年助手をしていたのは生沼
 曹六氏で、その以前のは明らかでない。永
 井潜氏は助教となる予定をもって1904年に独
 乙に留学され、その後私しがしばらく助手とな
 りその翌年橋田邦彦氏が助手となった。

当時の東大生理学教室は赤門を入った左側に
 新築された赤レンガ2階建の4教室の1つで、
 当時としては立派なもので、教室員数に対
 しても亦その内に行われる実験に対しても過
 大なものであった。

大沢先生は独乙留学中には犬、猫、家兎につ
 き脊髄随索の切断実験を行い、当時信ぜられ
 た運動系と知覚系の完全分立を否定する成績
 を挙げられ、これは後年にいたるまで文献に
 引用せられた有意義の研究であったが、東
 大ではかような複雑な動物実験は行われず、
 いろいろの面白い思い付きの小実験が試
 みられた。先生は釣

魚の趣味が深く、これに関連してゴンズイ
 に刺されるのはその頭骨に関節により起立
 する尖鋭な小骨片があるためであることを
 明らかにし、その巧みな標本が作られて
 いた。また精虫の化走性を供覧するには
 イトメの精虫と卵とを使用するのが最も
 適当であることなども示された。

この教室の内庭には小池があり数羽の鴨
 が飼われていたが、私は先生からこの鴨
 の尾腺(preen gland)を剔出して、その
 前後の羽毛の脂肪量と水量とを測定する、
 すなわちこの腺の水鳥の羽毛防護の意
 義を検査する問題をあたえられ、その
 実験を行ったが、一向変化が認められ
 ずそのままとなった。

余事ながらこの問題は仏国においても
 試みられ同様陰性の結果が報告された
 が、後年中国における研究で、この腺
 を去られた鴨は羽毛が著しく害せられ、
 体温が低下するのみならず、ビタミン
 D欠乏によりクル病となる。すなわち
 この腺はDの前階級物質を分泌して鳥の
 生命を維持するに重要な役目をするも
 のであることが明らかにされた。私共
 がこの著しい変化を見おとしたのは、
 手術した鳥と健康な鳥とを一所に飼
 っておいたためであって、腺を失った
 鳥は他鳥の腺口を啄ばみ、脂肪とビ
 タミンとを取って自体にぬりつけ自
 体を守るのである。これは鳥類には
 1種のVitamin senseのある証とも
 なり、誠に興味ある問題であったのに、
 この問題を大沢先生から戴いた時は、
 ほんの思い付きの小問

題のように思って充分の観察をしなかったのは遺憾なことであった。

当時生沼氏は独自で問題を考え先生の助言により色々の実験をやり、又内科から吉村喜作氏が来て実験を行う等の事もあったが、私がこの教室を去った1904年末までは、実験が連日行われるという程の事もなく、講義には実験供覧は極めて稀であり、学生実習も全く行われず、教室員は多くの時間を読書に過ごす有様であった。

教室として実験生理学の形をはっきり整えたのは天谷千松先生の京大生理学教室であったと思う。私が同先生の教室に入ったのは1906年の始めであったが、当時教室には石川日出鶴丸氏が助教授、小池巖雄氏が助手で共に末梢神経の問題につき毎日蛙の実験を行っていた。私は別の方面のことをやることを許されて温血動物の血行系の実験をしていた。

天谷先生は雑誌、文献の蒐集に完璧を期せられ、博覧強記でよく文献の所在を指示されたが、機械類の設置にも熱心であった。機械類は当面の実験に必要というよりも、主な機械、新しいものは皆集めるといった行き方であって、例えば神経に関するものでは Reizsirene, Reizwähler の如きものがあり、歴史的のものでは Helmholtz の Ophthalmometer, 新しいものでは Spektrophotometer, 心臓灌流装置のごときものが備えられた。1911年には Cambridge 製の Cardiograph が入荷して、先生も私共も毎日その使用法の練習に熱中し、2箇月程の間は絃を破損しては之をとり代えるのが仕事であった。これら特殊の機械は、それをどの研究に使用するという意図の有無は別問題として、兎に角そ

の使用法をマスターすることが助手の1つの重要な役目であった。

講義時間の殆んど半分には実験供覧が行われた。それだけの数の供覧をするためには、供覧に適しない程の複雑な実験も加えねばならず、そして先生はその実験の必ず成功することを要求されたので、助手の立場の困難は相当なものであった。

学生生理学実習は頗る充実したものであって、実習項目の数は現在の実習のそれと大差なき程であった。しかも十数組の学生が同一の実習をするのが原則となっていたので、沢山の器具が必要であり、又それを毎回列べかえる仕事と、学生に必ずやりとげさせよという先生の要求に応ずる事は、助手の大きな負担であった。

天谷先生ご自身としては特記すべき程の大きな研究業績をもたれなかったようであるが、上述のように後進を導くために充分の機会と鍛錬とを与える点において稀にみる学者であったと思う。これがその教室の伝統ともなり、この流れをくむ人のうちには手技に長じた人が多いようである。

以上のように大沢、天谷の両先生により開かれた日本の生理学界は、講座数、そこに研究する学者数並びに研究業績においても年々長足の進歩をとげたに拘らず1922年に至るまで日本生理学会の開設をみななかったことは、今から省みて不思議とも思える程のことである。それには色々の事情もあったであろうが、隔意なき討議が学問の発展に大切であるという思想が十分に進んでいなかったのがその主な原因の1つではなかったかと思う。

本誌発刊当時の回顧

正路 倫之助

本誌編集主幹戸塚教授から指命が来まして、本誌創刊以来20巻を重ねることになりましたので、その記念号に回顧談を書くようにとのことです。当時2~3年前から、雑誌を出してはとの希望が少壮評議員の間にあると聞いて居ましたが、私などは雑誌を出して若し継続できず、中途で廃刊するようなことでもあってはとの引こみ思案から、毎年の学会のときの評議員会で提案もせず経過してしました所、昭和10年でしたか京城で学会のあった時の評議員会で提案可決せられました由、私は其の際何かの故障で学会を欠席しましたが、編集刊行の事務を東京

在住の諸教授で引き受けて下さる由あとで聞きまして、胸なで下ろした次第でした。それ以来、福田、戸塚等在京諸教授の一方ならぬ骨折りと、会員諸君の熱心な支持とで、現在に至るまで20余年間、戦時中の止むを得なかった時期以外は中絶のこともなく継続せられ、近年は久野教授の骨折りで欧文生理学雑誌も刊行せられるようになり、日本生理学会も世界の生理学界に顔出しできるようになりました。思えば私など当時躊躇した者共は汗顔の至りで、やはり年を取ると臆病になるものとしみじみ後悔しています。

思 い 出

板 垣 政 参

生理学の発達については、浦本博士の興味ある論文、過去半世紀の日本生理学会の回顧と展望に詳起されて居る。茲には筆者の古い思い出を認める事にする。日記を失い、又目下の状態では九大、久大生理で記憶を確かめる事も不便であるから、唯筆者の脳裏にある事文を記す事にする。

確か明治39年が大沢謙二先生の東京大学教授在職25年の御祝があったと記憶するし、さらに昭和31年には先生の誕生百年が東京で行われたが、先生は日本人として東大が唯一つの日本の大学であった時の最初の生理学の教授であられたので、日本の生理学史は、前大沢時代、大沢時代及び大沢以後の時代と分けるといふ内山氏の見解は適当であると考え。其の他の理由の1つは大沢時代を転機として叙述的生理学から、実験生理学に移行したからである。其れは、生沼、石原、永井、石川、藤田、橋田等の先生

の門下の多くの生理学者が洋行し、之に相接して門弟以外の久野、佐武等が洋行し、帰って来て夫々の持場で実験を始め門下を指導したからである。筆者自身は元来生理学を志して居た訳ではなかったが特殊の事情で京大卒業の翌年明治41年の始め、石原教授の助手として、九州大学の生理に来らざるを得ない事になったのである。石川先生は筆者の1年生の時に東大を卒業せられ天谷教授の助手として京大に来られ、筆者が4年の時は既に助教授となって居られ、時に教室に御訪ねすると非常に喜ばれて、中々話が尽きなかったが、洋行が待ち切れぬ思いであられた。其の節は久野氏は旧教室に於いて心臓に関する研究をして居られ、石川先生は大麥氏を賞めて居られた。

福岡に来ると、石原先生が39年秋帰朝、生理学講座が独立した勿々であり、実験という事を盛んに叫ばれ、筆者等は講義の際の実験教示準

備には全く来る日も来る日も寧日なく、深更に及んで成功する事も時々あった。又41年、万難を排して、生理学実習を始めたのである。即ち出来る丈実習に間に合う器械を借入れ、又生理学教室には附属金工場を持って居ったので、それで間に合うものは其の方で造り、又簡単なものは自作とし、テキストは Schenk・Fuchs からとり、独文のコンニャク版も学生にわたした。独逸の Schenk の教室でも、石原先生の洋行中に実習を始め、先生が其の御手伝をしたとて自慢して居られたのだから、福岡に於ける実習の開始は世界でも早期の方に違いない。

元来日本に於ける生理学会の始まりは相当遅く、筆者も石原先生の御使として、上京の途次などに、岡山の舟岡、大阪の木下先生等を訪問して、学会の事を御図りしたが、中々其の時期が来なかった。

一体、日本の医学会の各科に就いて見ると、概して臨床方面の夫れが早く成立し、外科学会の如き、明治時代既に相当猛烈なる討論が行われ、東大、京大の対立の傾向著しく、富田忠太郎氏に対する鳥瀧隆三氏の討論の如きは、聴く人をハラハラさせたものである。

元来生理は単独の学会を持たず、連合医学会の1分科会として生化学、薬理と合併して組織されて居ったもので、大正11年連合医学会が京都で開かれた時にも同様であった。其の時出席の生理学者間に、以上の3つを合わせて独立の1学会を造ろうかとの話も出たが、結局単独に生理学会を造るといふ説が勝を占め、善は急げという事で、来年を待たず、今年中に第1回を東京で開くことにきめ、9月11日及び12日に互って東大生理学講堂に開かれたが、大沢先生を始め、生沼、石川、藤田、橋田、佐武、北村、坂本、板垣等37題の発表があった。聴集の中に渡辺鼎とかいう専門家ならぬ人が殆んど1々の講演に対して独得の討論をして居った奇現象があった。翌12年は第2回を福岡でやったが、生理学は其の内容の広い学問である為か、学会は第1回でも多彩を帯びて居ったが、此の時も、栄養研究所、呉内科、動物学者、植物学者等多

方面の参加があり、演題も累進的に多かった。此の時主催者側は会員の便利の為に、予め演者に抄録の提出を願い、万難を排して1題を1枚に印刷して講演前会員に配布した。其の時加藤元一教授はいきなり、不減衰学説を出して全会員をあっと謂わせたが、丁度階段講堂の下端から2段目の中央に席を占めて居られた石川教授は、吾に2時間の時を貸すならば完全に加藤学説を破って見せると猛烈に討論された。それから、相当永くの間、京都、慶応両者の論争が続き、慈恵の浦本教授は両者の論点の異なる所を突き止めんと努力せられた。此の論争は逸早く出発した東大橋田教室の電気生理学の研究と相俟って、刺戟生理学、引いては全生理学会の発展に寄与した事は争われない事である。尙学会の発展には、石原、永井、生沼、石川、藤田、橋田、久野、越智、正路、緒方、加藤、浦本引いては坂本、林、福田等諸氏の功績は勿論、諸現役諸氏の諸研究は録すべきもの多いことは慶賀すべき事である。

学会は発展して、分科会となり、各地方には、地方談話会を設立して、発表の機会を多くして居るが、瀬尾氏の感覚生理学の研究は筆者不敏にして未だ明瞭に理解出来ぬが、意識時間の方面から従来手の付けられなかった方面を拓いたものでなかるうか。同氏は意識時間を理解する事により知覚の実態を理解せんと努め、此の点を生理学の立場から研めんとしたもので、

A. 意識時間そのものを対象とする研究に於いては、同時性の問題研究を主とし、意識時間を科学的時間に対応させながら、時間そのものの理解へと努力が払われ。

B. 知覚の経過を対象とする研究に於いては、視知覚(光、色)の経過を対象とし、Aの研究で明らかにされた事柄を根拠として、視知覚持続の測定が可能であることを明らかにし、初感覚と測定光に対応する感覚と時間的に如何に関係し、現象的に如何なる結果を呈するか等のことが明らかにされて居る。筆者は此の方面の発展を望むものである。

日本生理学雑誌

第1~20巻原著総索引(内容別)

- 612-08 実験法, 実験技術……………1057
- 612.0 一般生理学, 生理学総論
- .014 細胞並びに生体の一般生理現象……………1057
- .014.4 細胞及び生体に対する環境の影響……………1058
- .014.42 電気的作用, 電気生理学一般……………1058
- .014.43 熱及び寒冷的作用……………1059
- .014.45 音響及び振動的作用……………1059
- .014.461 水, 組織の水分……………1059
- .014.462 物理化学的な力……………1059
- .014.481 放射線的作用(X線)……………1059
- .014.482 放射性物質的作用(α , β , γ 線, 宇宙線)……………1060
- .015 生理化学……………1060
- .015.1 酵素, 醗酵物質……………1060
- .015.3 物質代謝……………1060
- 1/8 生理学各論
- 1 血液循環
- .11 血液の性質……………1061
- .111 赤血球……………1061
- .112 白血球, リンパ球……………1062
- .114 静脈血……………1062
- .115 血液の凝固……………1062
- .116 血液の全量……………1063
- .117 血液の物理的性質……………1063
- .118 血液の生物学的性質, 血清反応……………1063
- .12 血液の化学的性質……………1064
- .13 血液循環, 血行の力学……………1065
- .14 血圧……………1067
- .15 血流速度及びその測定法……………1068
- .16 脈拍……………1068
- .17 心臓……………1068
- .171 心臓収縮の機作……………1069
- .172 筋肉としての心臓; 心筋の被刺激性, 収縮性及び生理形態学……………1069
- .173 心臓の仕事; 化学的, 力学的及び熱的現象……………1071
- .174 心筋に対する毒物の作用……………1071
- .178 心臓の神経支配……………1071
- .18 血管運動神経……………1072
- 612.2 呼吸
- .21 呼吸運動, 呼吸の力学……………1073
- .22 呼吸の化学, ガス交換の機作……………1075
- .23 血液のガス交換……………1075
- .26 組織呼吸……………1075
- .27 生体に及ぼす気圧の影響……………1076
- .28 呼吸に及ぼす神経系的作用……………1076
- 3 消化, 栄養
- .31 口, 歯, 唾液腺……………1078
- .32 胃, 胃液……………1079
- .33 腸, 中腸, 腸の腺……………1080
- .34 肝臓, 胆汁……………1081
- .36 大腸, 盲腸, 直腸……………1082
- .39 栄養……………1082
- .391 飢餓, 渴, 栄養不足……………1082
- .392 栄養物質の動態(一般)……………1082
- .397 脂肪の挙動……………1082
- .398 蛋白その他含窒素栄養物質の挙動……………1083
- 4 腺の生理, 分泌
- .42 リンパ系, リンパ, リンパ節……………1083
- .43 内分泌, 胸腺……………1084
- .44 甲状腺及び副甲状腺……………1084
- .45 副腎, その他の内分泌腺……………1084
- .46 腎臓, 尿……………1084
- .461 尿の化学的性質, 尿検査法……………1084
- .463 尿分泌……………1086
- .465 腎臓の生理形態学及び生理的組織学……………1086
- .466 腎臓の病態生理……………1086
- .467 尿の排泄……………1086
- 5 動物体温, 発熱
- .53 体温調節, Thermotaxis……………1087
- .56 体温……………1087
- .57 熱病, 異常発熱……………1087
- .59 暑熱及び寒冷が生体に及ぼす作用……………1087
- 6 生殖, 発育, 年令, 老衰
- .61 男性生殖器……………1088
- .62 女性生殖器……………1088
- .63 受精, 妊娠, 出産……………1088
- .65 生後の発育……………1088
- .66 各種生理現象に対する年令の影響

1088	.813	神経興奮の電気現象.....1105
.67	更年, 老衰, 死.....1088	.815	末梢神経の生理形態学.....1106
.7	運動器官, 声, 皮膚	612.816	神経(並びに筋)の被刺激性(興奮性).....1106
.73	平滑筋.....1089		末梢神経系の各論.....1112
612.74	横紋筋.....1089	.819	脳, 神経中枢一般.....1112
.741	筋の収縮.....1089	.82	心理学的生理学, 精神機能.....1112
.743	筋の電氣的現象.....1095	.821	神経細胞一般, 神経中枢.....1112
.744	筋の化学.....1096	.822	神経中枢における循環.....1113
.745	筋収縮が生体に及ぼす力学的, 熱的作用.....1098	.824	脳の回転, 大脳皮質.....1113
.746	筋機能の病的異変, 痙縮, 戦慄...1100	.825	大脳基底部.....1115
.748	筋の神経支配.....1100	.826	脊髓.....1115
.75	骨, 関節, 結合組織, 腱膜, 滑液囊の生理.....1100	.83	視覚, 生理光学.....1117
.76	移動運動; 動物体の運動の原理...1100	.84	眼の血管膜, 虹彩, 脈絡膜.....1117
.77	動物の発電及び発光.....1101	.842	視束(視神経), 網膜.....1117
.78	声, 発音.....1101	.843	色覚の障害.....1118
.79	皮膚.....1102	.845	聴覚.....1118
.8	神経系, 感覚器	.85	嗅覚.....1118
.8.01	一般理論, 神経支配の理論.....1105	.86	味覚.....1119
.81	末梢神経系.....1105	.87	一般感覚, 触覚, 平衡感覚.....1119
		.88	交感神経系.....1119
		.89	

原著内容別索引

612-08 実験法, 実験技術

612-08

- 1 (1950) 江藤 喬・山形寿郎
毛細管インク描記法 12, 154-156

612-08

- 2 (1954) 畠山一平・加藤良二
滴数法による流量測定について 16, 454-458

612-08: 537.72

- 3 (1954) 畠山一平
簡単な煤紙描記用電流計 16, 124-126

612-087

- 4 (1940) 川畑愛浩
一新体表面積計算式 5, 245-254

612-088

- 5 (1937) 戸塚武彦・佐々木祐治
Mariotte 瓶による灌流法の吟味 (1つの流出速度
自記装置) 3, 134-138

612-088

- 6 (1939) 高木健太郎
流出液量描記法の一新案に就いて (Slit液量計 "Schlitz-Stromuhr" に就いて) 4, 352-357

612.0 一般生理学, 生理学総論

612.014 細胞並びに生体の一般生理現象

612.014.1

- 7 (1938) 渋谷善秀
脂肪に対する筋細胞形質膜の透過性に就いて 3,
340-345

612.014.1

- 8 (1940) 丹野楯彦
滲透現象に対する透過的概念に就いて 5, 208-218

612.014.1

- 9 (1956) 山根彦二・田代 裕
細胞内可溶性燐分劃の contamination について 18,
656-658

612.014.1

- 10 (1956) 田代 裕・山根彦二
細胞内リポイド抽出及びリポイド燐の turn over と
contaminationに関する研究 18, 659-662

612.014.1

- 11 (1956) 田代 裕・山根彦二
細胞内核酸及び燐蛋白燐の turn-over 及び inorg.
P³² の contamination について 18, 663-665

612.014.1: 612.35

- 12 (1956) 山根彦二・田代 裕
肝細胞内の核酸分布と核酸燐の Rate of Renewal
18, 666-668

612.014.1: 612.014.461

- 13 (1941) 大久保金藏
残生組織の膨化率による 家兎水分平衡機制の研究
6, 291-304

612.014.1-083: 612.014.462

- 14 (1955) 舟木 広
組織粉末の膨潤 (溶解) 熱 17, 741-742

612.014.1: 612.014.463

- 15 (1955) 舟木 広
塩類溶液中における膨潤 (溶解) 熱 (I) 17, 733-
740

612.014.1: 612.014.462.6

- 16 (1958) 奥村 修
生体酸塩基平衡調節の生理的諸相 特に酸負荷時の
調節に就いて 20, 966-987

612.041.1-083: 612.014.469

- 17 (1942) 篠崎尚次
Adrenaline 及び Acetylcholine の定量法 7, 675-
679

612.014.1: [612.17+.33+.35+.46+.73/.4+.79

- 18 (1949) 伊藤真次
海猿諸臓器の焦性葡萄糖量
11, 18

612.014.2

- 19 (1936) 渋谷善秀
オジギ草 (*Min.osa pudica*) の葉関節の組織学的生理
学的研究 1, 158-164

612.014.2

- 20 (1943) 伊藤真次
人体の総 Cl 量並びに細胞外液量の測定 8, 663-667

612.014.2

- 21 (1958) 青山辰夫
生機成立の本態に関する物性論的研究 (高分子複合
系 Liponucleoprotein system と水との相関) 20,
235-252

612.014.2: 611.13

- 22 (1937) 浅井 貞
小動脈分岐部の壁細胞に就いて 2, 144-146

- 612.014.23 : 612.172
23 (1957) 亀山重徳
 マウスの心室筋細胞電位, その正常像及び興奮周期, 低温の影響 **19**, 572-581
- 612.014.31 : 581.18
24 (1953) 柴岡孝雄
 オジギソウの興奮伝導 **15**, 241-252
- 612.014.31 : 612.014.423 : 581.184
25 (1937) 清水茂弥
 オジギ草の刺戟生理学的研究 (V) おじぎ草の葉柄及び茎に於ける負傷電位に就いて **2**, 14-18
- 612.014.31 : 612.014.44 : 581.184
26 (1957) 松本政雄・後藤鹿島・田島和穂・唐木田良成・柿沼俊助・高橋文典
 オジギ草に関する研究 (第1報) 対光反応について **19**, 1257-1262
- 612.014.4 細胞及び生体に対する環境の影響**
- 612.014.42 電気の作用, 電気生理学一般**
- 612.014.421
27 (1939) 矢野真琴
 Lucas氏振子による電流切断時間間隔の理論的算出法 **4**, 334-338
- 612.014.421
28 (1941) 戸塚武彦
 広い範囲に涉って時間を変えられる一種の Rheotom **6**, 123-125
- 612.014.421
29 (1944) 永井健三・本川弘一
 50サイクル除去用濾波器 **9**, 328-334
- 612.014.421
30 (1950) 松本政雄・江藤 喬
 生物電気研究に必要な万能増巾器に就いて **12**, 157-161
- 612.014.423 : 612.013.6
31 (1956) 祐森市蔵
 コロジウム膜の膜電位差に及ぼす諸物質の影響について **18**, 541-556
- 612.014.423 : 612.133/5
32 (1957) 米沢 潔
 灌流-血管膜電位差の発現機構についての研究 **19**, 871-881
- 612.014.423 : 612.014.424
33 (1944) 江上義之
 定常及び過渡的狀態に於ける神経線維上の電位分布に関する解析的研究 (第2報) 刺戟が指数函数的減少電流で与えられた場合 **9**, 453-462
- 612.014.423 : 612.014.424
34 (1944) 江上義之
 定常及び過渡的狀態に於ける神経線維上の電位分布に関する解析的研究 (第3報) 刺戟が交番電流で与えられた場合 **9**, 463-469
- 612.014.423 : 612.133-083
35 (1954) 斎藤貞二
 灌流-下肢血管-膜電位差の研究 (第1報) 同液膜電位差について **16**, 37-44
- 612.014.423 : 612.133-083
36 (1954) 斎藤貞二
 灌流-下肢血管-膜電位差の研究 (第2報) 濃度効果と塩類効果 **16**, 45-51
- 612.014.423 : 612.133-083
37 (1954) 志多清英
 灌流-下肢血管-膜電位差の研究 (第3報) 標準膜電位差の季節的変動 **16**, 79-83
- 612.014.423 : 612.133/4-083 : 612.014.469
38 (1954) 志多清英
 灌流-下肢血管-膜電位差の研究 (第4報) 諸種薬物灌流の影響 **16**, 139-151
- 612.014.423 : 612.133-083 : 612.392.01 : 613.1
39 (1954) 志多清英
 灌流-下肢血管-膜電位差の研究 (第5報) Vitamin 効果の季節的差異 **16**, 174-176
- 612.014.423 : 612.135 : 612.32/3
40 (1954) 上田哲也
 灌流-胃腸血管-膜電位差に関する研究 **16**, 605-621
- 612.014.423 : [612.46 : 612.13] : [612.46 : 612.13
41 (1954) 塩見 清
 灌流-腎血管-膜電位差の研究 **16**, 777-796
- 612.014.423 : 612.135 : 612.627
42 (1955) 岩田賢次
 灌流-卵管血管-膜電位差の研究 **17**, 82-98
- 612.014.423.4 : 612.79
43 (1948) 大木誠止
 生体蛙皮電位に就いて **10**, 9-16
- 612.014.43 熱及び寒冷の作用**
- 612.014.43 : 616.001.17
44 (1955) 横関珠治
 火傷時の血液濃縮に就いて **17**, 345-351
- 612.014.45 音響及び振動の作用**

- 612.014.45 : 534.321.9 : 612.118.221.3
45 (1941) 柴田定一
 超音波の組織透過性 I. 溶血度測定法 **6**, 268-272
- 612.014.45 : 534.321.9
46 (1941) 柴田定一
 超音波の組織透過性 II. 酸化能測定法 **6**, 273-276
- 612.014.45 : 534.321.9
47 (1941) 柴田定一
 超音波の組織透過性 III. 温度測定法 **6**, 277-280
- 612.014.461 水, 組織の水分**
- 612.014.461 : 612.79 : 612.014.462.2
48 (1952) 寺野敬治
 動物膜の水透過に関する研究 (14) 生体 γ 皮膚水透過に対する外液陽イオン電荷の影響 **14**, 282-286
- 612.014.461 : 612.79 : 612.014.462.6
49 (1952) 寺野敬治
 動物膜の水透過に関する研究 (15) 生体 γ 皮膚水透過に対する pH の影響 **14**, 287-291
- 612.014.461 : 612.79 : 612.014.423
50 (1952) 山本 清
 動物膜の水透過に関する研究 (16) γ 生体対称皮電位と電気浸透 **14**, 292-296
- 612.014.461 : 612.79 : 612.014.463
51 (1950) 柿沼美清
 動物膜の水透過に関する研究 (2) γ 皮膚の水透過に及ぼす無機塩類の影響 **12**, 62-66
- 612.014.461 : 612.79 : 615-099-036.88
52 (1950) 柿沼美清
 動物膜の水透過に関する研究 (3) γ の経皮 ion 中毒死について **12**, 325-326
- 612.014.461 : 612.79 : 613.1
53 (1950) 柿沼美清・大下内 章
 動物膜の水透過に関する研究 (4) γ 皮膚水透過の季節差と個体差 **12**, 327-328
- 612.014.461 : 612.79 : 612.014.469
54 (1950) 及川恒一
 動物膜の水透過に関する研究 (5) 生 γ の皮膚水透過に及ぼす有機低分子の影響 **12**, 329-332
- 612.014.461 : 612.79 : 612.014.43
55 (1950) 及川恒一
 動物膜の水透過に関する研究 (6) 生 γ の皮膚水透過に及ぼす温度の影響 **12**, 333-336
- 612.014.461 : 612.79 : 612.014.462.6
56 (1950) 及川恒一
 動物膜の水透過に関する研究 (7) 生 γ の経皮緩衝作用に就いて **12**, 337-340
- 612.014.462 物理化学的な力**
- 612.014.462.1-083
57 (1937) 丹野楯彦
 透過性膜に於ける滲透現象に就いて **2**, 139-143
- 612.014.462.1
58 (1954) 北川 孝
 陰性滲透に関する知見補遺 **16**, 404-419
- 612.014.462.1 : [612.172.6 + 612.467.1] : 612.014.422
59 (1936) 花岡虎男
 透過性の研究 (4) 心外膜及び膀胱壁の食塩透過性について膜を隔つる溶液の比伝導度の変化による観察 **1**, 94-106
- 612.014.462.1 : 612.467.1
60 (1936) 花岡虎男
 透過性の研究 (5) 膀胱壁の塩類透過についての実験 **1**, 170-184
- 612.014.462.1 : 612.467.1
61 (1936) 花岡虎男
 透過性の研究 (6) 原位膀胱壁の血中より膀胱内の液への塩類透過についての実験 **1**, 230-238
- 612.014.462.1 : 541.9
62 (1937) 松岡脩吉
 Ringer 液の成分及び他の物質の濃度対氷点降下度の表 **2**, 1-3
- 612.014.481 放射線の作用 (X線)**
- 612.014.481 : 612.172-083
63 (1939) 藤本慶治
 X線作用の生理学的研究 (1) 剔出墓心臓に対する影響 **4**, 309-320
- 612.014.481 : 612.744
64 (1941) 石川 勲・上小鶴克巳
 X線の生理学的研究 (2) 骨格筋の化学過程に及ぼす影響 **6**, 233-238

- 612.014.481 : 612.741.4/5
65 (1943) 土橋義雄
 X線の生理学的研究 (3) X線の骨格筋粘弾機構に及ぼす影響に就いて **7**, 427-431
- 612.014.481 : 612.11
66 (1941) 藤本慶治
 生体組織のX線吸収に関する研究 (その1) 血液に就いての研究 **6**, 1-10
- 612.014.481 : 612.74
67 (1941) 藤本慶治
 生体組織のX線吸収に関する研究 (その2) 筋肉に就いての研究 **6**, 11-15
- 612.014.481 : 612.79
68 (1941) 藤本慶治・土橋義雄
 生体組織のX線吸収に関する研究 (その3) 皮膚に就いての研究 **6**, 385-395
- 612.014.482** 放射性物質の作用 (α, β, γ 線, 宇宙線)
- 612.014.482 : 546.33.02
69 (1948) 森 信胤
 人工放射性ナトリウムの薬理学的研究 **10**, 109-116
- 612.014.482 : 546.33.02 : 612.465
70 (1948) 森 信胤
 人工放射性ナトリウムを指示とする腎臓機能の検索に就いて **10**, 141-148
- 612.014.482 : 546.33.02 : 612.014.462
71 (1948) 森 信胤
 人工放射性ナトリウムの膜の透過性に及ぼす影響に就いて **10**, 149-150
- 612.015** 生理化学
- 612.015.1** 酵素, 醱酵物質
- 612.015.11
72 (1940) 鳥羽英次
 Glutathion-Neosalvarsan 系の電動能的可逆性 **5**, 240-243
- 612.015.1
73 (1942) 井戸東一
 Cholesterin-Esterase の研究 (第1報) 各種臓器の Cholesterin-Esterase **7**, 195-200
- 612.015.1 : 612.34
74 (1942) 井戸東一
 Cholesterin-Esterase の研究 (第2報) 膵臓の Cholesterin-Esterase **7**, 201-205
- 612.015.1 : 612.014.469-064
75 (1953) 嶋越美夫
 脱水素酵素に対する Urethane-抑制 (Methylene青法) の疑義 **15**, 622-626
- 612.015.1
76 (1957) 岩崎隼太
 各種臓器の Carbonic Anhydrase に就いて **19**, 1234-1238
- 612.015.1
77 (1958) 中馬一郎・原 芳子・川嶋昭司・辻井 主
 肝 mitochondria のコハク酸脱水素酵素系に関する研究 I. 電子受容体の種類と酵素活性について **20**, 1-7
- 612.015.1
78 (1958) 中馬一郎・原 芳子
 肝 mitochondria のコハク酸脱水素酵素系に関する研究 II. 各種受容体の電子運搬系における連絡部位について **20**, 8-13
- 612.015.1
79 (1958) 中馬一郎・辻井 主・川嶋昭司
 肝 mitochondria のコハク酸脱水素酵素系に関する研究 III. 電子受容体間の相互作用 (リレー効果) について **20**, 14-19
- 612.015.3** 物質代謝
- 612.015.3 : 591.34
80 (1942) 井戸東一
 蝌蚪の変態期に於ける糖原並びに石灰量 (両棲類変態期の物質代謝 其の1) **7**, 206-211
- 612.015.3 : 612.013.7
81 (1944) 岡 芳包
 代謝物質の生成熱 I. $l(+)$ Glutamin酸, $l(-)$ Asparagin酸, $l(-)$ Tyrosinの生成熱 **9**, 365-367
- 612.015.3
82 (1944) 岡 芳包
 熱的測定による遊離エネルギーの計測 I. $l(+)$ Glutamin 酸の低温度に於ける比熱, エントロピー及び遊離エネルギー **9**, 359-364
- 612.015.3
83 (1948) 高田文夫
 アミノ酸の遊離エネルギー論的研究 (VI) $l(+)$ -Glutamin酸 = NH_4Cl 系の酸化還元電位 **10**, 242-246
- 612.015.3 : 612.766.1
84 (1952) 山岡誠一
 体育運動のエネルギー代謝に関する基礎的研究 (第1報) 全身運動時に於けるエネルギー需要量の個人差 **14**, 327-337

- 612.015.3:612.766.1
85 (1952) 山岡誠一
 体育運動のエネルギー代謝に関する基礎的研究(第2報) 局部運動及び静的運動時のエネルギー需要量の個人差とその強度指標 **14**, 395-400
- 612.015.3:612.766.1
86 (1952) 山岡誠一
 体育運動のエネルギー代謝に関する基礎的研究(第3報) 総合的な一連のスポーツ運動時のエネルギー需要量の算定 **14**, 533-539
- 612.015.3:612.763
87 (1953) 山岡誠一
 体育運動のエネルギー代謝に関する基礎的研究(第4報) エネルギー代謝より見た諸種のスポーツの強度の比較 **15**, 101-106
- 612.015.3:612.53:613.13
88 (1957) 古志谷淳三
 水分塩分代謝の季節馴化 水分塩分代謝の季節変動(第1報)(体温調節機能と物質代謝の季節に関する研究 第5報) **19**, 1037-1050
- 612.015.3:612.53:613.13
89 (1957) 古志谷淳三
 水分塩分代謝の季節馴化 高温馴化時の水分塩分代謝(第2報)(体液調節機能と物質代謝の季節に関する研究 第6報) **19**, 1148-1161
- 612.015.3
90 (1958) 大柴 進
 基礎代謝の生理的変動に関する研究 **20**, 1004-1014
- 612.015.31:612.453:597.82
91 (1949) 鈴木陽之助
 蛙の食塩代謝に於ける副腎皮質の意義 **11**, 86-91
- 612.015.31:612.433
92 (1950) 鈴木陽之助
 蛙の食塩代謝に於ける脳下垂体前葉の意義 **12**, 79-83
- 612.015.31:613.1:612.53
93 (1953) 吉村寿人・大原重信・山本克起・田中光雄
 人体鉱物代謝の季節変動(体温調節機能と物質代謝の季節的相関に関する研究 第1報) **15**, 47-57
- 612.015.31:612.392.01C
94 (1953) 入江紀文
 食塩摂取と Vitamin C 代謝 **15**, 570-574
- 612.015.31:612.014.469
95 (1955) 水野重恒
 抗ヒスタミン剤とカリウム代謝 **17**, 327-332
- 612.015.36:612.014.423:612.014.462.6
96 (1939) 金杉重信
 無酸素的に電動能系の pH を測定する一方法 **4**, 344-347
- 612.015.36[612.82:612.741.1
97 (1954) 松本淳治
 痙攣の酸化還元電位的研究(1) 痙攣脳の酸化還元電位 **16**, 420-423
- 612.015.36:612.741.1
98 (1954) 松本淳治
 痙攣の酸化還元電位的研究(2) 痙攣機序に就いて **16**, 424-427
- 612.015.348-083:616-002.155
99 (1957) 塚田裕三
 炎症性滲出液に於ける 2, 3 の蛋白質の生理学的研究 **19**, 1031-1033
- 612.1/8** 生理学各論
612.1 血液, 循環
612.11 血液の性質
612.111 赤血球
- 612.111:612.121.2
100 (1957) 西田悦郎
 赤血球内容の pH 測定について(第 I 編) 赤血球内容, 血漿, Heparin, NaF, Saponin, Evans blue の緩衝価 **19**, 31-37
- 612.111:612.121.2
101 (1957) 西田悦郎
 赤血球内容の pH 測定について(第 II 編) 赤血球内容の pH およびその温度係数 **19**, 38-44
- 612.111:612.121.2
102 (1957) 西田悦郎
 赤血球内容の pH 測定について(第 III 編) 血漿 pH の変化に伴う赤血球内容の変動について **19**, 45-50
- 612.111-08
103 (1941) 松田幸次郎
 廻折計(Diffractometry)による赤血球直径測定法の吟味 測定方法及び正常に近き直径分布の場合に於ける測定値の正確度 **6**, 84-91
- 612.111-083:612.128
104 (1954) 関口 晃
 赤血球浮游液の Catalase 能の研究(第 II 編) 実地面 **16**, 27-36
- 612.111-083:612.128
105 (1954) 関口 晃
 赤血球浮游液の Catalase 能の研究(第 III 編) pH 及び滲透圧の影響 **16**, 165-168

- 612.111.1
106 (1939) 江田得一
 Sahliの方法による血色素定量法に就いて **4**, 3-11
 612.111.1:599.323
107 (1953) 中馬一郎・嶋越美夫
 白鼠酸化血色素のアルカリ分解に関する研究 **15**,
 402-408
 612.111.22:612.117.2
108 (1938) 田中義三
 赤血球の大きさと粘度との関係 **3**, 12-15
 612.111.22:612.116.2
109 (1938) 田中義三
 貧血と赤血球の大きさととの関係 **3**, 16-22
 612.111.7:612.014.445
110 (1957) 牧野秀夫
 外的生活条件と血小板(其の3)紫外線照射と血小板数との関係 **19**, 206-221
 612.111/2:[612.53:612.015.3:613.1
111 (1953) 山本克起・江口文野
 人体血液有形成分の季節変動(体温調節機能と物質代謝の季節相関に関する研究 第2報) **15**, 454-463
612.112 白血球, リンパ球
 612.112.12:612.015.3
112 (1936) 稲田朝美
 食事性白血球増加の原因について **1**, 129-132
 612.112.92:615.361.452
113 (1954) 八村正夫
 Adrenaline反応について **16**, 525-531
 612.112.8:612.111.2:612.893
114 (1958) 青柳幸男
 白ネズミの血液像日間変動について **20**, 486-494
612.114 静脈血
 612.114-08:612.173.3
115 (1939) 矢崎定雄
 人体混合静脈血採取法並びに心臓分時容量に就いて **4**, 427-433
612.115 血液の凝固
 612.115:612.118
116 (1942) 広村嘉彦
 血液凝固の研究(其の1)血清の作用 **7**, 767-771
 612.115-063:612.118
117 (1942) 広村嘉彦
 血液凝固の研究(其の2)血清の血液凝固促進作用に就いて **7**, 772-783
 612.115
118 (1942) 広村嘉彦
 血液凝固の研究(其の3)卵白及び血漿の新鮮度と血液凝固との関係に就いて **7**, 784-791
 612.115-063:612.398.12
119 (1942) 広村嘉彦
 血液凝固の研究(其の4)血清蛋白質の血液凝固促進作用に就いて **7**, 792-800
 612.115-063:547.96
120 (1942) 広村嘉彦
 血液凝固の研究(其の5)卵白蛋白質の血液凝固促進作用に就いて **7**, 801-804
 612.115-063:547.96
121 (1942) 広村嘉彦
 血液凝固の研究(其の6)牛乳蛋白質の血液凝固促進作用に就いて **7**, 805-810
 612.115:612.014.462.1
122 (1942) 広村嘉彦
 血液凝固の研究(其の7)滲透圧の影響 **7**, 811-817
 612.115:612.275.1
123 (1949) 望月秀男
 血液凝固に及ぼす航空低圧の影響(第1報) **11**, 107-108
 612.115:612.275.1
124 (1949) 望月秀男
 血液凝固能に及ぼす航空低圧の影響(第2報) **11**, 109-115
 612.115:[612.63.01/2+612.662
125 (1951) 中野裕雄
 性周期, 妊娠及び産褥間に於ける血液凝固に就いて **13**, 447-453
 612.115-063:612:429
126 (1955) 森下敬一
 Stress時の血液凝固促進機序に就いて(第1篇)自律神経系 **17**, 858-869
 612.115-063:612.89
127 (1955) 森下敬一
 Stress時の血液凝固促進機序に就いて(第2篇)細網内皮系 **17**, 870-876
 612.115.1:612.014.424
128 (1949) 名和能治・伊藤秀三郎
 電撃に依る家兎プロトロンビン時間の動揺に就いて **11**, 135-136

- 612.115.1 : 612.015.1
129 (1953) 塚田裕三
 線維素溶解現象に関する研究 **15**, 627-635
- 612.115.1-063
130 (1957) 塚田裕三・岡本彰祐
 血液線維素原の増加因子に関する研究 **19**, 1034-1036
- 612.115.2-08 : 612.014.463
131 (1942) 福田邦三・大山英男
 福田・早瀬法血液凝固時間測定の方法に就いて、特に凝固誘導液としての Ringer 溶液の組成及び濃度の影響に就いて **7**, 756-760
- 612.115.2
132 (1951) 李鐘晩
 各種脊椎動物の正常血液凝固時間に就いて **13**, 221-223
- 612.115.3 : 612.014.469
133 (1936) 福田邦三
 Chicago 青を凝固阻止剤として用いる際の 1 つの注意 **1**, 133-134
- 612.115.3 : 612.014.469
134 (1953) 李鐘晩
 静脈内注射された諸物質が血液の凝固に及ぼす影響 **15**, 107-115
- 612.115.3 : 612.017.3
135 (1953) 李鐘晩
 過敏症性ショックが血液凝固に及ぼす影響について **15**, 116-119
- 612.115.3-083
136 (1949) 望月秀男
 稀釈血液の凝固に就いて **11**, 116-125
- 612.116 血液の全量**
- 612.116.2-083 : 612.143
137 (1940) 栖原六郎・大久保金蔵
 家兎瀉血致死量並びに瀉血時血圧の変化に就いて **5**, 203-207
- 612.116.2 : 612.796 : 612.56
138 (1948) 長島長節
 貧血快復時に於ける皮膚色の变化と体温の關係に就いて **10**, 195-197
- 612.116.2 : 612.221
139 (1949) 長島長節
 貧血快復時に於ける瓦斯代謝の変動に就いて **11**, 24-26
- 612.116.3 : 612.419
140 (1957) 森下敬一・竹村竜之助・田中誠禾・城所進・栗原恒夫・方沢郷・羅立芳・山田年比古・久保川道男・上田 是・伊崎輝雄・青井保男・矢内良徳
 ACTH, Cortison 及び Cobalt Chlorophyllin 増血反応の本態に関する生理学的研究 (第 1 報) 骨髄動脈結紮家兎に於ける検索 **19**, 1002-1010
- 612.116.3-083 : [612.172 + 612.216
141 (1939) 栖原六郎
 増血致死に於ける水分平衡機制の研究 (其の 1) 家兎増血死に於ける心臓搏動数と呼吸数とに就いて **4**, 358-369
- 612.116.3-083 : 612.126.212 : 612.171
142 (1940) 栖原六郎
 増血致死に於ける水分平衡機制の研究 (その 2) (循環血量の変動が心臓に与へる影響に就いて) **5**, 169-194
- 612.116.3-083-087
143 (1940) 栖原六郎・大久保金蔵
 増血致死家兎の死後臓器重量とその体重比 **5**, 195-202
- 612.117 血液の物理的性質**
- 612.117.2 : 612.115.3
144 (1936) 田中義三
 各種凝固防止剤の血液粘稠度に及ぼす影響について **1**, 219-224
- 612.117.2-08
145 (1936) 福田邦三・佐藤豊次
 Pipette 型粘稠度計 **1**, 264-265
- 612.117.2
146 (1938) 村上 昇
 血液の表面張力の研究 **3**, 253-258
- 612.117.2 : 612.014.462.7
147 (1957) 今西義晃
 血清の表面粘度について **19**, 132-142
- 612.117.7 : 534.321.9
148 (1949) 岩瀬善彦
 超高周波に於ける組織特に血液の導電的並びに誘電的研究 **11**, 164-168
- 612.118 血液の生物学的性質, 血清反応**
- 612.118.221.1
149 (1944) 鈴木俊雄
 赤血球沈降速度に関する研究 **9**, 181-195

- 612.118.221.1
150 (1957) 森 貞次
 迅速微量血球沈降速度測定法に関する研究 **19**, 236-248
- 612.118.221.1:616-006.6
151 (1957) 森 貞次・臼井 進・中村 司・西村聖二
 癌患者における血球沈降速度 **19**, 249-253
- 612.118.221.2:612.741.1:612.014.43
152 (1956) 高雄幸一郎
 痙攣に伴う血液蛋白異常熱凝集反応の分析 **18**, 370-379
- 612.118.221.3
153 (1951) 藤沢正輝
 溶血に関する研究 **13**, 260-271
- 612.118.221.3:612.118
154 (1953) 小河 博
 溶血に関する研究 **15**, 539-551
- 612.118.221.3
155 (1957) 下田武司
 溶血に関する研究 **19**, 103-112
- 612.118.221.3
156 (1957) 老川賢良
 諸種塩類溶液における低張性溶血について **19**, 416-424
- 612.118.24:612.014.469
157 (1948) 辻 豊
 Pilocarpinの血清に因る滅毒は吸着現象か **10**, 17-22
- 612.12 血液の化学的性質**
- 612.121:612.287
158 (1956) 本田良行・野村 博
 迷走神経切断による呼吸性Alkalosisについて **18**, 214-217
- 612.121.2:612.014.43
159 (1940) 川畑愛浩
 人体温熱刺戟による血液 pH の変動 **5**, 255-259
- 612.122:612.392.01C
160 (1936) 金鳴善・李炳熙
 Vitamin C と血糖量 **1**, 290-292
- 612.122:612.392.01E
161 (1955) 板井忠生
 Vitamine E と血糖 **17**, 807-809
- 612.122:616.633.45
162 (1939) 島 寛一
 健康人並びに 糖尿病患者に於ける 血糖曲線に就いて **4**, 252-261
- 612.122
163 (1941) 大村 正
 血液乳酸の消長に就いて (2) **6**, 221-228
- 612.122
164 (1944) 原田久雄
 血液乳酸の消長に就いての研究 (3) 脱線維血及び血清の乳酸量 **9**, 55-58
- 612.122
165 (1944) 原田久雄
 血液乳酸の消長に就いての研究 (4) 血液乳酸静止価 **9**, 59-62
- 612.122:612.21-083
166 (1944) 原田久雄
 血液乳酸の消長に就いての研究 (5) 特殊呼吸時の血液乳酸 **9**, 63-69
- 612.122.3:612.766.1
167 (1937) 北条和雄
 運動後の血液乳酸の消長に就いて **2**, 4-13
- 612.122+612.461.82
168 (1943) 吉川春寿・福山富太郎
 血液及び尿中焦性葡萄糖酸の定量法 **8**, 492-497
- 612.122:612.79:612.014.47
169 (1954) 真柄三夫
 家兎に於ける 緊縛過血糖並びにこれと 皮膚圧迫との関係について **16**, 317-325
- 612.122.1:612.39
170 (1957) 桃井国忠
 食餌性血糖上昇機序に対する一考察 **19**, 1272-1279
- 612.122+612.115.2-063]:612-083
171 (1956) 宮下 勉
 瀉血並びに輸血時のストレス症候としての 過血糖及び血液凝固昂進に就いて **18**, 646-655
- 612.124:612.3
172 (1951) 山本正道
 血液蛋白の栄養学的意義に関する研究 (第1編) 食蛋白量と血液性状の関係に就いて **13**, 408-414
- 612.124:612.39
173 (1951) 山本正道
 血液蛋白の栄養学的意義に関する研究 (第2編) 血液蛋白の貯蔵蛋白としての意義 **13**, 462-470

- 612.126:612.014.461]:612.53:612.015.3:613.1
174 (1953) 田中光雄・松田太郎・江口文野・川野輝夫・岩崎隼太・千早卓郎・益子研三・平松茂良
 人体血液水分の季節変動について(体温調節機能と物質代謝の季節相関に関する研究 第3報) **15**, 524-533
- 612.126.13:612.434.018
175 (1953) 伊藤真次・本村光博
 後葉ホルモンによる血液 Cl 濃度の低下 **15**, 534-538
- 612.126.41-08
176 (1958) 菓子井幸則
 遠心限外濾過法による血清中の限外濾過性カルシウムの研究 **20**, 318-324
- 612.126.41:[612.014.462.6+612.014.463
177 (1958) 菓子井幸則
 血清中の限外濾過性カルシウムに対する pH 及び枸橼酸の影響 **20**, 325-330
- 612.127:612.133:612.014.43
178 (1941) 矢崎定雄・会田勘二・井上 章
 人体加熱時に於ける動脈血液瓦斯の変動 **6**, 117-122
- 612.127+612.121.2]:612.223.1
179 (1937) 正路倫之助・吉村寿人・斎藤幸一郎・野口昌信
 酸素欠乏気の吸入による人体動脈血の瓦斯並びに pH の変化に就いて **2**, 331-334
- 612.127:612.122.3-08
180 (1936) 北条和雄
 測圧式瓦斯分析装置による血液乳酸の定量 **1**, 258-263
- 612.127.1-08
181 (1937) 斎藤幸一郎
 微量血液瓦斯分析法 **2**, 213-224
- 612.128-083
182 (1953) 関口 晃
 赤血球浮游液のカタラーゼ能の研究(第1編) 酵素液としての赤血球浮游液 **15**, 357-367
- 612.128
183 (1955) 舟木 広
 血液カタラーゼ反応の熱解析(塩類の影響 I) **17**, 664-679
- 612.129:577.16C]:612.015.31
184 (1953) 土井弘正
 食塩過剰摂取の血中ビタミン C 濃度に及ぼす影響 **15**, 260-264
- 612.129-08:577.16C
185 (1953) 土井弘正
 Hydrazine法による家兎血中総 Vitamin C 濃度 **15**, 575-576
- 612.13 血液循環, 血行の力学**
- 612.13:612.134
186 (1950) 渡辺俊男・西本和夫
 静脈瓣と血行に就いて **12**, 185-191
- 612.133:612.148:612.741.1
187 (1942) 銭場武彦
 内圧の変化に基く小血管の収縮性に就いて **7**, 178-181
- 612.133:612.359:612.833.133
188 (1952) 銭場武彦・岸 良尚・佐々木弘純
 頸動脈洞反射と肝臓血管 **14**, 102-105
- 612.133:612.741.1
189 (1944) 入沢 宏
 動脈の収縮性に就いて **9**, 889-892
- 612.133:612.741.1
190 (1948) 入沢 宏
 動脈各位の受動的収縮性に就いて **10**, 46-49
- 612.133:612.741.1
191 (1949) 萩原 仁
 動脈分岐部の収縮性 **11**, 128-129
- 612.133:612.741.1:612.014.469
192 (1944) 市河三太
 Adrenaline に依る大動脈の収縮過程に就いて **9**, 701-703
- 612.133:612.741.2
193 (1951) 福場友重
 動脈の筋量に就いて **13**, 237-242
- 612.133:612.741.4
194 (1951) 福場友重
 動脈の弾性組織に就いて **13**, 230-236
- 612.134:612.741.4
195 (1952) 入沢 宏・沖田 実
 大静脈の伸展性に就いての一実験 **14**, 267-271
- 612.133:611.732.4:612.014.43:599.325
196 (1948) 入沢 宏
 温上昇による耳朶動脈の拡張に就いて **10**, 100-102
- 612.134
197 (1951) 八田博英
 静脈環流に関する一実験 **13**, 291-293

- 612.134 : 612.741.2
198 (1949) 渡辺俊男
 静脈に於ける筋量分布に就いて **11**, 249-258
- 612.134 : 612.741.4
199 (1950) 渡辺澄男
 静脈の伸展性に就いて **12**, 84-86
- 612.134 : 612.833.95
200 (1940) 銭場武彦
 大静脈近心部に於ける自動的収縮性に就いて **5**,
 370-378
- 612.133/4
201 (1941) 銘苅 進
 小血管の連絡枝に就いて **6**, 659-661
- 612.133/4
202 (1942) 西丸和義・渡辺俊男・銭場武彦
 小血管内血行調節に就いて **7**, 761-766
- 612.133/4-083
203 (1957) 垣田堅二郎
 動静脈吻合に関する研究 (第1報) その基本形態に
 就いて **19**, 897-902
- 612.133/4-083
204 (1958) 垣田堅二郎
 動静脈吻合に関する研究 (第2報) 吻合部に就いて
 の 2, 3 の実験 **20**, 123-138
- 612.133/4 : 612.014.43
205 (1944) 福場友重
 温上昇の小血管に及ぼす影響に就いて **9**, 704-707
- 612.133/4 : 612.014.462.4
206 (1943) 市河三太
 血管に対する K, Ca-ion の作用に就いて **8**, 684-
 687
- 612.133/4 : 612.014.469
207 (1943) 篠崎尚次
 小血管系に対する acetylcholine, histamine の作用
 に就いて **8**, 487-491
- 612.133/4 : 612.014.469
208 (1944) 篠崎尚次
 小血管系血行に対する adrenaline, pituitrin の作用
 に就いて **9**, 413-416
- 612.133/4 : 612.014.469
209 (1951) 飯塚恒治
 乳酸の血管系に対する作用 **13**, 309-312
- 612.133/4 : 612.15 : 612.335.5
210 (1957) 岡田 斌
 腸間膜血流に関する研究 特に毛細管内血流速度に
 ついて **19**, 629-635
- 612.133/4 : 612.339] : 612.833.135
211 (1951) 銭場武彦
 腹腔血管から蹠膜血管への反射 **13**, 175-178
- 612.133/4 : 612.741.1
212 (1938) 木内 茂
 小血管の所謂 Tonus に就いて **3**, 47-50
- 612.133/4 : 612.741.1 : 612.014.469
213 (1942) 百々芳雄
 血管の Tonus とカフェインの作用 **7**, 603-607
- 612.133/4 : 612.741.1 : 612.014.469
214 (1942) 百々芳雄
 化学的刺戟による血管の Tonus に就いて **7**, 631-
 634
- 612.133/4 : 612.741.1 : 612.014.469
215 (1939) 八田博英
 血管の Tonus と Acetylcholine 及び Histamine との
 関係 **4**, 421-426
- 612.133/4 : 612.741.1 : 612.014.469
216 (1943) 西丸和義・飯塚寿夫・篠崎尚次
 血管収縮機転と化学物質との関係 **8**, 54-59
- 612.133/4 : 612.731.14
217 (1936) 丹野楯彦
 血管の持続的収縮性と血管の物理的弾性について
1, 135-138
- 612.133/4 : 612.741.1 : 612.014.462.1
218 (1940) 曾爾太郎
 血管口径と滲透圧との関係 **5**, 386-389
- 612.133/4 : 612.741.1 : [612.184 : 612.014.424
219 (1940) 銭場武彦
 坐骨神経の刺激による下肢の血管拡張に就いて **5**,
 379-385
- 612.133/4 : 612.741.4
220 (1938) 木内 茂
 小血管壁の弾性に就いて **3**, 304-309
- 612.133/4 : 612.741.4
221 (1939) 木内 茂
 小動脈の伸展性に就いての実験 **4**, 12-17
- 612.133/4 : 612.763
222 (1953) 太田三郎
 運動時に於ける血液循環系変化の機序 **15**, 93-100
- 612.133/4 : 612.79] : 612.563
223 (1951) 福場友重
 皮膚血管と温度との関係 **13**, 216-220

- 612.133/4:612.563
224 (1957) 大原孝吉
 血管拡張度指数 (Vasodilatatorischer Quotient VDQ) の妥当性について 附 皮膚温と血流量との量的関係 **19**, 1315-1322
- 612.133/4:594.56
225 (1953) 安藤義夫
 章魚の血管の自働運動に就いて **15**, 20-24
- 612.133/4:597.82:591.34
226 (1936) 浅井 貞・百々芳雄
 蝌蚪の血管について **1**, 266-268
- 612.133/4:612.73/4
227 (1943) 中原一郎
 筋肉内の血行に就いて **8**, 688-693
- 612.134:612.741.9
228 (1950) 渡辺俊男
 静脈の組織構造と血行に就いて **12**, 135-139
- 612.134:612.833.95
229 (1940) 渡辺俊男
 静脈の週期的収縮に就いて **5**, 367-369
- 612.135
230 (1944) 江上義之
 毛細管中の血液の流れに就いて (第1報) **9**, 742-748
- 612.135
231 (1944) 江上義之
 毛細管中の血液の流れに就いて (第2報) **9**, 749-754
- 612.135:612.3
232 (1949) 小川義雄
 消化管系統に於ける毛細管分布の研究 大腸粘膜に於ける所見 **11**, 97-101
- 612.135:612.3
233 (1949) 小川義雄
 消化管系統に於ける毛細管分布の研究 胆嚢粘膜に於ける所見 **11**, 102-103
- 612.135:612.3
234 (1949) 小川義雄
 消化管系統に於ける毛細管分布の研究総括 **11**, 104-106
- 612.135:612.146
235 (1954) 畠山一平
 血管の拡張収縮による血管網の流れの抵抗の増減 **16**, 127-138
- 612.135:612.15
236 (1952) 沖田 実・入沢 宏
 毛細管内血流速度について **14**, 98-101
- 612.135:612.315
237 (1949) 小川義雄
 消化管系統に於ける微細血管分布の研究 食道粘膜に於ける所見 **11**, 57-59
- 612.135:612.32
238 (1949) 小川義雄
 消化管系統に於ける微細血管分布の研究 胃粘膜に於ける所見 **11**, 60-65
- 612.135:612.33
239 (1949) 小川義雄
 消化管系統に於ける微細血管分布の研究 小腸粘膜(絨毛)に於ける所見 **11**, 66-71
- 612.135:612.741.1
240 (1939) 木内 茂
 網状毛細管に於ける収縮性 **4**, 189-192
- 612.135:612.741.1:612.833.135
241 (1949) 入沢 宏
 下肢毛細血管の収縮による 反対側下肢毛細血管への血管反射 **11**, 22-23
- 612.135:612.833.95
242 (1949) 入沢 宏
 毛細血管の周期的収縮に就いて **11**, 19-21

612.14 血圧

- 612.14:612.21]:612.337
243 (1953) 銭場武彦・岸 良尚
 小腸からの血圧, 呼吸反射に就いて **15**, 43-46
- 612.14:612.21]:612.014.469
244 (1955) 飯野 貢
 r-アミノ酪酸及び類縁物質の血圧-呼吸に対する作用 **17**, 766-773
- 12.14:[612.819.5:612.014.424]612.819.91
245 (1944) 豊田昊衍
 三叉神経刺激の血圧に及ぼす影響に関する 実験的研究 (I) 三叉神経刺激時の家兎血圧の変化並びにそれと迷走神経との関係 **9**, 777-786
- 612.14:[612.819.5:612.014.424]
246 (1944) 豊田昊衍
 三叉神経刺激の血圧に及ぼす影響に関する 実験的研究 (II) 三叉神経刺激時の血圧の変化と内臓神経, 頸動脈竇神経及び大動脈神経との関係 **9**, 787-792
- 612.14:612.014.469
247 (1951) 銭場武彦・入沢 宏
 Nicotineの血圧に及ぼす影響に就いて **13**, 203-210

- 612.14 : 612.216
248 (1948) 加藤 保
 Traube の血圧動揺と呼吸中枢の周期的興奮に就いて **10**, 151-156
- 612.143 : 612.819.91
249 (1955) 小笠原今男
 血圧の第3動揺 (1) 迷走神経の影響 **17**, 16-21
- 612.143 : 612.826
250 (1958) 小笠原今男
 血圧の第3動揺 (2) 短周期第3動揺と脳幹網様体 **20**, 382-387
- 612.14 + 612.16] : 612.844 : 612.014.47
251 (1953) 福原 武・角 忠明・岡田博匡
 眼球圧迫の心搏及び血圧に及ぼす影響 **15**, 190-192
- 612.144
252 (1953) 銭場武彦・岸 良尚
 大静脈圧に就いて **15**, 8-15
- 612.144 : 612.412
253 (1951) 銭場武彦・福場友重・岸 良尚
 脾静脈圧の周期的変動について **13**, 328-331
- 612.14/5 : 612.014.469
254 (1958) 荻野舜亮
 Chlorpromazine の大腿動脈に於ける圧流速関係に及ぼす効果 **20**, 525-532
- 612.145
255 (1948) 市河三太
 毛細血管の内圧耐性に就いて **10**, 103-105
- 612.146 : 612.014.463
256 (1950) 奥津国福
 食塩性高血圧に就いて **12**, 362-367
- 612.146 : 612.014.469
257 (1954) 入沢 宏・銭場武彦
 Nicotine に依る一過性血圧下降 **16**, 52-55
- 612.146 : 612.215.8
258 (1957) 横村庄一郎
 肺腔壁を隔膜とする滲透現象について **19**, 16-25
- 612.146.2 : 547.435-292
259 (1954) 島山一平・加藤良二
 麩の後肢血管灌流標本に及ぼすアセチルコリンの作用について **16**, 459-469
- 612.146.2 : 612.185 : 612.174
260 (1958) 寺師 博
 r-アミノ酪酸の血圧低下作用と各循環領域に於ける作用の差異 **20**, 812-822
- 612.146.2 : 612.828
261 (1956) 高安健之
 r-アミノ酪酸による血圧低下の機序に就いて **18**, 325-336
- 612.146 : [612.819.911 + 612.899
262 (1956) 山田 豊
 神経系統と血管灌流量との関連性に就いて (第1報) 神経中枢各部位の作用 **18**, 34-42
- 612.146 : [612.819.911 + 612.899
263 (1956) 山田 豊
 神経系統と血管灌流量との関連性に就いて (第2報) 支配径路の探求特に交叉性の問題 **18**, 43-51
- 612.146 : [612.819.911 + 612.899
264 (1956) 山田 豊
 神経系統と血管灌流量との関連性に就いて (第3報) 各中枢間の相互関係 **18**, 61-68
- 612.146.3-083
265 (1950) 海老原千春
 頸動脈袼摘出手術の血圧調節範囲に及ぼす影響 **12**, 321-324
- 612.148 : 612.18
266 (1957) 島山一平・加藤良二
 肺血管運動神経について **19**, 347-354
- 612.15 血流速度及びその測定法**
- 612.15-08
267 (1953) 山本克起
 循環血液量測定に関する知見補遺 **15**, 449-453
- 612.15 : 612.014.469
268 (1958) 荻野舜亮
 Chlorpromazine の末梢循環、特に血流量に及ぼす効果 **20**, 253-261
- 612.16 脈拍**
- 612.16
269 (1951) 島山一平
 動脈々波の基礎振動と末梢抵抗 (其の1) 理論的考察 **13**, 360-366
- 612.17 心臓**
- 612.17 : 612.133/4 : 612.014.469
270 (1951) 銭場武彦
 Nicotine の心臓血管に対する作用 **13**, 198-202
- 612.17 : 612.015.3
271 (1957) 八木舎四
 心臓代謝の部位による差異と其の意義 **19**, 882-891

- 612.17-083 : 612.133/4-083 : 612.35
272 (1952) 八田博英
 心臓除去後の血液の流動と肝臓との関係について
14, 358-362
- 612.17+612.13] : 612.014.469
273 (1951) 佐藤 宏
 Epinephrine 及び Nor-epinephrine の心臓, 血管
 作用の比較 **13**, 497-498
- 612.171 心臓収縮の機作**
- 612.171
274 (1937) 福原 武
 福原武著 “His 氏束切断による心臓分離に就いて”
 の追加 **2**, 225-226
- 612.171
275 (1938) 渡辺嘉造伊
 心臓球の自働性に就いて (第3報) Stannius 氏第1,
 第2結紮及び私の所謂第3, 第4結紮後に於ける心
 臓球の態度に就いて **3**, 51-55
- 612.171
276 (1938) 渡辺嘉造伊
 心臓球の自働性に就いて (第4報) 心臓球結紮 (第
 4結紮) 及び室球間結紮 (第5結紮) に就いて **3**,
 56-60
- 612.171
277 (1955) 三田八玄
 心室性期外収縮の実験的研究 **17**, 22-31
- 612.171 : 612.014.47
278 (1955) 横山正松・入沢優氏
 蛙心臓に対する機械的刺激の影響 **17**, 535-539
- 612.171.1 : 612.172.6
279 (1942) 上野一晴・前川広光
 心臓球の続発性期外収縮に就いて **7**, 397-406
- 612.171.1
280 (1956) 畠山一平
 くり返し収縮による心筋収縮状態の漸次変化につ
 いて **18**, 1-14
- 612.171.1 : 612.23 : 612.741.1] : 612-08
281 (1956) 青木一郎
 藜灌流心臓のガス代謝, 収縮曲線及び ECG の同時
 記録に用い得る新実験装置について **18**, 710-717
- 612.171.1 : 612.014.43
282 (1948) 後藤昌義
 温度特性による藜心活動機序の考察 **10**, 157-164
- 612.171-083
283 (1944) 藤条久成
 心臓球各部及び房室境界の結紮効果に就いて (第
 1編) **9**, 268-278
- 612.171-083
284 (1944) 藤条久成
 心臓球各部及び房室境界の結紮効果に就いて (第
 2編) **9**, 279-282
- 612.171-083
285 (1944) 藤条久成
 心臓球各部及び房室境界の結紮効果に就いて (第
 3編) 室球標本に於ける観察 **9**, 283-289
- 612.171.1-083
286 (1944) 藤条久成
 心臓球各部及び房室境界の結紮効果に就いて (第
 4篇) 心臓電気描図に就いての研究 **9**, 379-392
- 612.171.1-083
287 (1944) 藤条久成
 心臓球各部及び房室境界の結紮効果に就いて (第
 5篇) 球結紮と漏斗自動の干渉に就いて **9**, 393-396
- 612.171.1-083
288 (1944) 藤条久成
 心臓球各部及び房室境界の結紮効果に就いて (第
 6篇) 特に蛙心及び亀心に就いての研究 **9**, 397-405
- 612.171.1-083
289 (1955) 西本和夫
 カキ心臓に於ける結紮実験 **17**, 524-527
- 612.171.1-083
290 (1957) 牧野 博
 人工的心室粗動の研究 **19**, 174-188
- 612.171.1-083
291 (1958) 土肥 豊
 心室性期外収縮の実験的研究 **20**, 349-381
- 612.171.5-C8
292 (1957) 桑原薫三
 携行用電気聴診器の試作 **19**, 1119-1122
- 612.172 筋肉としての心臓; 心筋の被刺激
 性, 収縮性及び生理形態学**
- 612.172 : 612.014.469] : 612.172.4
293 (1936) 清水茂弥
 心筋に対する一沃度醋酸の作用についての心臓機
 械曲線並びに電気心働曲線による研究 **1**, 139-147
- 612.172-083 : 612.014.462.4
294 (1944) 市河三太
 藜洞房標本の収縮性に対する陽 ion の作用 **9**, 716-
 720

- 612.172:612.014.463
295 (1948) 岳 繁雄
 心臓機能に対するカリウムの意義 **10**, 317-323
- 612.172+612.73/4]:612.014.469
296 (1951) 瀬在昌次
 Acetylcholine 感受性並びに抗 histamine 剤の抗 acetylchoine 作用に就いて **13**, 146-150
- 612.172-083
297 (1944) 小池 昇
 心筋条片標本の実験的研究 (第1報) 正常環境にある心筋条片標本の生理学的性状に就いて **9**, 665-671
- 612.172-083:612.014.469
298 (1944) 小池 昇
 心筋条片標本の実験的研究 (第2報) 心筋条片標本の生理学的性状に対する諸種薬物の影響に就いて **9**, 672-676
- 612.172.1:612.392.62
299 (1958) 中沢正雄
 高カリウム血による心臓機能障害 **20**, 959-965
- 612.172.2:612.172.61
300 (1941) 上野一晴
 代償休止の成因に就いて **6**, 213-220
- 612.172.2:612.144:597.82
301 (1937) 佐伯寛吉
 ヒキガエル静脈洞, 心房標品の拍動数に及ぼす静脈圧の影響に就いて **2**, 27-34
- 612.172.3:612.014.424
302 (1938) 山中俊雄
 心臓の自働点に対する頻数刺激の影響 **3**, 299-303
- 612.172.2:[612.014.43+612.014.469
303 (1942) 篠崎尚次
 心臓各部の搏動数に対する温度, Adrenaline, Acetylcholine の影響に就いて **7**, 438-443
- 612.172.2:612.014.47
304 (1955) 西本和夫
 機械的刺激による カキ心臓収縮数の 変化に就いて **17**, 275-278
- 612.172.2:612.014.43
305 (1956) 入沢 宏・入沢 彩・西本和夫
 温度の変化による カキ心搏動歩調取り部の 検索について **18**, 564-567
- 612.172.2:612.014.43
306 (1956) 入沢 宏・入沢 彩・西本和夫
 イタヤ貝心臓の局所加温による反応 **18**, 568-570
- 612.172.2:612.014.45
307 (1956) 加藤政孝
 音響刺激に対する心搏反応 **18**, 767-774
- 612.172.2
308 (1956) 加藤政孝
 実験動物の心搏リズム **18**, 867-874
- 612.172.3
309 (1939) 田村満国
 心臓の自働点に直流を通じた時の週期的変化 **4**, 390-405
- 612.172.3-083
310 (1952) 有馬洋恵
 心室条片の電気刺激要素の研究 **14**, 401-408
- 612.172.3
311 (1957) 安富 博
 心房筋の被刺激性に関する研究 **19**, 903-917
- 612.172.4
312 (1936) 吉森 延
 心筋の電気緊張に関する研究 (5) **1**, 107-118
- 612.172.4-083
313 (1937) 菅原頼梯
 2, 3 の実験条件下に於ける電気心働曲線に就いて **2**, 335-341
- 612.172.4
314 (1936) 清水茂弥
 心筋の階梯期に於ける Elektrokardiogramm についての研究 **1**, 16-21
- 612.172.4
315 (1937) 清水茂弥
 心筋の電気緊張に関する研究 **2**, 35-40
- 612.172.4
316 (1937) 牧 政一
 心筋の電気緊張に関する研究 (7) **2**, 249-257
- 612.172.4:597.82
317 (1940) 上野一晴
 麤の心臓電気描図に於ける竇棘の検出に就いて **5**, 411-414
- 612.172.4:597.82
318 (1941) 上野一晴
 麤心の電気描図に於ける心臓球の棘に就いて **6**, 113-116

- 612.172.4
319 (1942) 上野一晴・前川広光
 心臓球の電気描図に就いて **7**, 167-170
- 612.172.4
320 (1948) 小溝協三
 胸部誘導電気心働図の電位分布より観たる分析 **10**, 33-40
- 612.172.4
321 (1951) 西沢一男
 肢誘導に於ける短絡の影響 **13**, 247-259
- 612.172.4:612.4
322 (1955) 朝比奈一男・北原藤子・山中みよ子
 心臓電流の内分泌腺に及ぼす影響について **17**, 10-15
- 612.172.4:597.82:591.34
323 (1957) 伊利憲助
 蝌蚪発生に伴う心電図 **19**, 165-173
- 612.172.4
324 (1956) 星 猛
 心電図標準肢誘導の単極誘導的解釈 **18**, 834-844
- 612.172.4:612.014.423
325 (1958) 加藤 漸
 容積導体としての胸廓 (I) QRS の地図に就いて **20**, 801-811
- 612.172.4:612.178-063:612.014.424
326 (1937) 山口周正
 心臓促進神経刺激の電気心働曲線に及ぼす影響に就いての研究 **2**, 233-239
- 612.172.61-083
327 (1937) 福原 武
 His氏筋束切断による心臓分離に就いて **2**, 19-26
- 612.172.61
328 (1941) 上野一晴
 室球伝導の恢復に就いて **6**, 683-685
- 612.172.6:612.014.469:612.178
329 (1942) 前川広光
 室球伝導の恢復に及ぼす薬品及び神経の影響 **7**, 293-302
- 612.172.6:612.014.43
330 (1944) 織部道雄
 墓心房室伝導系に於ける干渉期と温度の関係に就いて **9**, 708-715
- 612.172.6:612.014.469
331 (1944) 塩谷外男
 家兎房室伝導の恢復と之に及ぼす Pilocarpin の影響に就いて **9**, 766-776
- 612.172.61
332 (1944) 福田 博
 家兎心臓に於ける房室伝導の恢復と期外後周期の変化に就いて I. 房室伝導の恢復に及ぼす迷走神経の影響 **9**, 873-878
- 612.172.6:612.172.4
333 (1957) 日高暎二
 温血動物心室筋繊維の走行について **19**, 535-552
- 612.173** 心臓の仕事: 化学的, 力学的及び熱的現象
- 612.173.3:612.014.482
334 (1940) 佐藤幹治
 Zwaardemaker の Paradox-Phänomenに就いて **5**, 38-42
- 612.173.3:612.014.482
335 (1940) 佐藤幹治
 Zwaardemaker の粒子当量説に関連する 2, 3 の実験 **5**, 43-50
- 612.173.3:612.014.482
336 (1940) 佐藤幹治
 Radium Emanation の心臓効率に及ぼす影響に就いて **5**, 32-37
- 612.173:597.82
337 (1942) 福原 武
 ヒキガエルの心臓の洞心房標品についての力学的研究 **7**, 95-100
- 612.173.2:597.82
338 (1941) 福原 武
 ヒキガエルの心室の等長性並びに等張力性収縮 **6**, 305-315
- 612.174** 心臓に対する毒物の作用
- 612.174
339 (1938) 山口周正
 電気及び機械曲線を指標とせる curare の心臓作用に就いての研究 **3**, 369-378
- 612.174:612.014.469-064
340 (1942) 篠崎尚次
 Adrenaline と Acetylcholine の拮抗的作用に就いて **7**, 696-701
- 612.178** 心臓の神経支配
- 612.178:612.014.424:597.82
341 (1940) 桜田 持
 心臓神経に就いての研究 (I) 墓心臓外周に於ける心臓神経走路の刺激生理学的探求 **5**, 274-280

- 612.178.1 : 612.014.424 : 597.82
342 (1940) 桜田 持
 心臓神経に就いての研究 (Ⅱ) 心室に迷走神経線維が分布するか否かに就いての刺激生理学的探究 **5**, 281-287
- 612.178.1-064 : 612.014.424 : 597.82
343 (1940) 桜田 持
 心臓神経に就いての研究 (Ⅲ) 心臓抑制効果を目標とせる迷走神経の潜刺激時に就いて **5**, 288-292
- 612.178.2-063 : 612.014.424 : 597.82
344 (1940) 桜田 持
 心臓神経に就いての研究 (Ⅳ) 心臓促進効果を目標とせる交感神経の潜刺激時に就いて **5**, 293-298
- 612.178 : 612.014.465 : 612.014.424 : 597.82
345 (1940) 桜田 持
 心臓神経に就いての研究 (Ⅴ) 神経の麻酔に於ける被刺激性と興奮伝搬性の分離に就いて **5**, 299-306
- 612.178
346 (1955) 横山正松
 人体に於ける Goltz 打腹実験 **17**, 428-429
- 612.178.5
347 (1956) 桑崎 修
 心臓に対する延髄の作用 (第1篇) 特に迷走及び交感神経との関係に就いて **18**, 103-107
- 612.178.5
348 (1956) 桑崎 修
 心臓に対する延髄の作用 (第2篇) 特にその作用の左右性による相違に就いて **18**, 108-112
- 612.178.5
349 (1956) 桑崎 修
 心臓に対する延髄の作用 (第3篇) 特に其の経路に就いて **18**, 113-122
- 612.178.5
350 (1956) 荒木 啓
 大黒鼠延髄の心臓に対する作用に就いて **18**, 752-766
- 612.18 血管運動神経**
- 612.18
351 (1940) 八田博英
 血管運動神経に就いての一考察 **5**, 365-366
- 612.181 : 612.818 : 612.014.469
352 (1958) 浜 道三
 家兔延髄血管運動中枢と γ -アミノ酪酸 **20**, 833-842
- 612.183 : 612.014.463
353 (1942) 百々芳雄・渡辺俊男
 血管収縮神経素と Ca との関係 **7**, 599-602
- 612.183
354 (1942) 百々芳雄
 血管収縮神経素の本態に関する研究 **7**, 608-630
- 612.183 : 611.98
355 (1955) 岸 良尚
 下肢の静脈収縮神経に就いて **17**, 39-42
- 612.183 : 611.97
356 (1955) 岸 良尚
 上肢の静脈収縮神経に就いて **17**, 43-45
- 612.183 : 612.215
357 (1943) 篠崎尚次
 肺臓に分布する血管収縮神経の本質に就いて **8**, 483-486
- 612.183 : 612.014.469
358 (1944) 篠崎尚次
 血管収縮神経に及ぼす nicotine, curare の作用に就いて **9**, 410-412
- 612.183/4 : 612.014.43
359 (1949) 飯田敏行
 寒冷血管反応に関する研究 (第1報) 寒冷血管反応の生理的意義に就いて **11**, 73-78
- 612.183/4 : 612.014.43
360 (1949) 飯田敏行
 寒冷血管反応に関する研究 (第2報) 寒冷血管反応に關与する血管に就いて **11**, 79-85
- 612.183/4 : 612.014.43
361 (1951) 飯田敏行
 寒冷血管反応に関する研究 (第3報) 寒冷血管反応に關する神経について **13**, 513-517
- 612.18/5 : 612.46 : 612.014.469
362 (1958) 中山 孝
 腎臓血管運動神経に関する研究 (1) ヒキガエル腎動脈-腎静脈灌流標本に及ぼすadrenaline, noradrenaline, acetylcholine の作用について **20**, 913-926
- 612.185 : 612.46 : 612.014.469
363 (1958) 中山 孝
 腎臓血管運動神経に関する研究 (2) ヒキガエル腎門脈-腎静脈灌流標本に及ぼすadrenaline, noradrenaline, acetylcholine の作用について **20**, 927-936
- 612.185 : 612.46 : 612.014.424
364 (1958) 中山 孝
 腎臓血管運動神経に関する研究 (3) ヒキガエル腎臓血管灌流標本に及ぼす神経刺激効果について **20**, 937-949

- 612.185 : 591.125
365 (1956) 加藤良二
 アドレナリン及びアセチルコリンの鯉血管運動作用について ウナギ鰓灌流標本を用いた研究 **18**, 26-33
- 612.185 : 612.215.8 : 597.82
366 (1956) 加藤良二
 アドレナリン及びアセチルコリンの肺血管運動作用について ヒキガエル肺灌流による研究 **18**, 15-25
- 612.187 : 612.351.5
367 (1958) 東 健彦
 肝臓血管の血管運動性に関する研究 **20**, 775-800
- 612.187.21
368 (1951) 飯塚恒治
 肺臓に至る血管運動神経に就いて **13**, 459-461
- 612.2 呼吸**
- 612.21 呼吸運動, 呼吸の力学**
- 612.2 : [612.79 : 612.014.47
369 (1954) 植木俊次
 体部皮膚圧迫の肺機能に及ぼす影響について 肺聴診音の変化 **16**, 115-123
- 612.2 + 612.17 + 612.741] : [612.79 : 612.014.47
370 (1954) 佐藤謙助
 カエルの呼吸, 心臓及び筋活動に対する皮膚圧迫効果について **16**, 597-604
- 612.2 + 612.14] : 612.014.469
371 (1954) 糸賀宜三
 静脈注射で与えられた Glatamin 酸 Na の呼吸並びに血圧に対する影響 **16**, 664-672
- 612.21
372 (1951) 長谷川 渙
 呼吸運動と呼吸気流に関する研究 **13**, 419-430
- 612.21 + 612.14] : 612.187 : 612.014.424
373 (1953) 中山 沃
 胸部大動脈神経刺激の呼吸, 血圧に及ぼす影響について **15**, 281-289
- 612.21 + 612.172] : 612.795
374 (1955) 佐藤謙助
 カエルの呼吸及び心臓運動に対する皮膚触刺激効果について **17**, 46-50
- 612.21 : 612.28 : 612.014.424
375 (1953) 福原 武・角 忠明・岡田博匡
 正常呼吸中枢の電気的刺激の呼吸運動に及ぼす影響 **15**, 334-337
- 612.21 : 612.284
376 (1953) 馬場三郎
 正常呼吸中枢の化学的刺激の呼吸運動に及ぼす影響 **15**, 609-618
- 612.21 : 612.312
377 (1952) 小田中 貞
 嚔下呼吸 **14**, 114-119
- 612.21 : 612.312
378 (1952) 小田中 貞
 嚔下呼吸の発生機序 **14**, 352-354
- 612.21 : 612.33 : 612.014.47
379 (1953) 角 忠明
 小腸伸展の呼吸運動に及ぼす影響 **15**, 316-323
- 612.21-063 : 612.766.1
380 (1950) 高木健太郎・長谷川 弘
 運動時の呼吸促進について (第3篇) 筋よりの反射性呼吸促進について **12**, 243-251
- 612.21-063 : 612.766.1
381 (1951) 高木健太郎・長谷川 弘
 運動時の呼吸促進について (第4篇) 人体に於ける枸橼酸ソーダの動脈注射による呼吸促進 **13**, 381-384
- 612.21-064 : 612.76
382 (1954) 長谷川 弘・島田久八郎
 運動時の呼吸促進について (5) 骨格筋に於ける化学受容器 **16**, 210-215
- 612.21 : 612.818 : 612.014.424
383 (1953) 馬場三郎
 延髄刺激の呼吸運動に及ぼす影響 **15**, 338-345
- 612.21-064 : [612.819.91 : 612.014.424
384 (1953) 畠山一平・景 鴻基
 迷走神経の電気的頻数刺激による呼吸抑制及び停止について **15**, 504-508
- 612.21 : 612.82-083
385 (1951) 福原 武・中山 沃・馬場三郎・小田中 貞
 脳幹切断の呼吸運動に及ぼす影響 **13**, 454-458
- 612.21 : 612.825 : 597.82
386 (1957) 山本喜昭
 蛙の呼吸運動に対する大脳(前脳)の役割について **19**, 1307-1310
- 612.21 : 612.826
387 (1955) 正木光児
 視床及び中隔部の呼吸運動に及ぼす影響 **17**, 691-699

- 612.21 : 612.826.4
388 (1955) 正木光児
 視牀下部の呼吸運動に及ぼす影響 **17**, 649-663
- 612.21 : 612.833.81
389 (1951) 長谷川 渙
 人に於ける呼吸条件反射の形成実験 **13**, 211-215
- 612.21 : [612.844 : 612.014.47
390 (1953) 福原 武・角 忠明・岡田博匡
 眼球圧迫の呼吸運動に及ぼす影響 **15**, 186-189
- 612.211 : 612.014.469
391 (1954) 中山 沃
 薬物動脈注入による過呼吸の発生機序について **16**, 388-391
- 612.211-08
392 (1950) 福原 武
 一新呼吸運動描記法 **12**, 206-207
- 612.213 : 612.135 : 597.82
393 (1952) 銭場武彦
 肺臓より蛙蹼膜血管への反射 **14**, 263-266
- 612.215.4 : 612.563] : [612.79 : 612.014.46
394 (1954) 河合 仁
 人の鼻甲介温度に対する皮膚圧迫の影響 **16**, 647-655
- 612.215.4 : 612.563
395 (1956) 河合 仁
 人の下甲介粘膜温度の生理 **18**, 147-161
- 612.215.1 : 612.215.8
396 (1955) 滝沢修三
 肺の血液循環と気管枝に及ぼす皮膚刺激の影響 **17**, 59-64
- 612.215.4 : 612.014.47
397 (1957) 北原実衛
 鼻粘膜温に対する体部圧迫の影響に関する補遺 **19**, 1162-1170
- 612.215.4 : 612.563
398 (1957) 北原実衛
 鼻粘膜の吸気加温作用に対する疑義に就いて (鼻粘膜温におよぼす温度刺激の影響) **19**, 1197-1216
- 612.216 : [599.325 + 599.742.1
399 (1939) 柄原六郎
 家兎及び犬の正常呼吸数に就いて **4**, 262-266
- 612.216
400 (1950) 田坂 巖
 周期性波動呼吸の出現動機に関する研究 **12**, 304-309
- 612.216 : 612.014.469
401 (1950) 田坂 巖
 Lumin 投与に因る周期性波動呼吸の出現状況 **12**, 310-314
- 612.216 : 612.014.469
402 (1950) 田坂 巖
 Lumin 性波動呼吸の諸性質 **12**, 315-320
- 612.216 : [612.819.91 : 612.014.424
403 (1953) 畠山一平・景 鴻基
 迷走神経単一刺激の呼吸効果と呼吸中枢の律動的興奮性 **15**, 509-519
- 612.216 : 612.819.73
404 (1955) 新島 旭
 皮膚圧迫のカエルの呼吸数に及ぼす効果について **17**, 72-76
- 612.216.3
405 (1949) 小林庄一・高木健太郎
 いきこらえの研究 (4) その理論的展開 (2) **11**, 142-144
- 612.216.3
406 (1950) 新島 旭
 いきこらえの研究 (6) 再呼吸との比較 **12**, 121-127
- 612.216.3 : 612.223.2
407 (1950) 新島 旭
 いきこらえの研究 (7) 加圧空気吸入の人体に及ぼす影響 **12**, 128-131
- 612.216.3-083 : 612.014.424
408 (1943) 佐藤謙助
 強刺激に於ける呼吸性呼吸停止の原因に就いて **8**, 185-190
- 612.216-083 : 612.133/4
409 (1948) 日笠頼則
 過度の鬱熱環境下に於ける呼吸及び循環の研究 **10**, 311-316
- 612.217.1 : 612.741.1 : 612.014.424
410 (1955) 堀内 洽・東田昭二・小笠原今男
 電気麻酔中の横隔膜筋電図 **17**, 528-534
- 612.217 : 612.222 : 597.82
411 (1951) 加藤初蔵
 カエルの呼吸の研究 I. 正常呼吸とCO₂-刺激について **13**, 319-322
- 612.217 : 597.82
412 (1951) 加藤初蔵
 カエルの呼吸の研究 II. 呼吸運動の機序について **13**, 323-327

- 612.217:612.28
413 (1951) 石井(中根)公正
 呼吸の交代性発現の原因について **13**, 399-407
- 612.217:612.741.1
414 (1954) 小口周男
 呼吸筋の筋電図学的研究(第I報) **16**, 771-776
- 612.217:612.741.1
415 (1955) 小口周男
 呼吸筋の筋電図学的研究(第II報) **17**, 517-523
- 612.217:612.741.1
416 (1955) 竹谷政男
 呼吸機構に関する研究(その3) 電撃痙攣前後の呼吸型と横隔膜筋電図との関係について **17**, 711-725
- 612.217:597.82
417 (1957) 岡 敬三
 カエルの正常呼吸運動 **19**, 613-620
- 612.22 呼吸の化学, ガス交換の機作**
- 612.221.1:612.221.31
418 (1948) 日笠頼則
 低酸素空気吸入時に於ける肺の酸素ガス交換に就いて(人体の特殊条件下に於ける肺胞空気の研究I) **10**, 247-252
- 612.221.1:[612.221.3+612.825.8
419 (1948) 日笠頼則
 低酸素空気吸入時に於ける精神作業能と肺胞空気の関連性に就いて(人体の特殊条件下に於ける肺胞空気の研究II) **10**, 253-257
- 612.221.3-083
420 (1948) 日笠頼則
 防毒面着用時に於ける肺胞空気の変化に就いて(人体の特殊条件下に於ける肺胞空気の研究III) **10**, 266-270
- 612.221.3:612.233.1
421 (1948) 日笠頼則
 高酸素空気吸入時に於ける肺胞空気に就いて(人体の特殊条件下に於ける肺胞空気の研究IV) **10**, 290-292
- 612.221.3-08
422 (1944) 吉村正太
 一新人体肺胞空気自動採取法(人体肺胞空気の研究I) **9**, 71-82
- 612.223.1:[612.221.1/3
423 (1944) 吉村正太
 低酸素空気吸入時に於ける人体肺胞空気並びに呼吸状態に就いて(人体肺胞空気の研究II) **9**, 312-317
- 612.221.1/3
424 (1944) 吉村正太
 通気抵抗に因る人体の呼吸状態の変化に就いて(人体肺胞空気の研究III) **9**, 319-327
- 612.222-063
425 (1956) 森川 昭
 Ethylurethane(麻酔下用量)のガス代謝促進作用に就いて **18**, 413-419
- 612.223.1:612.45
426 (1953) 児島三郎
 白鼠CO耐性獲得に於ける副腎の役割 **15**, 443-448
- 612.223.1:[612.452/3+612.13
427 (1955) 倉沢和秀
 家兎-酸化炭素吸入時のアドレナリン分泌並びに血管拡張反応について **17**, 798-806
- 612.223.1:612.766.1
428 (1957) 木附一人
 低酸素筋作用時の人体の肺換気量調節について(低酸素環境下の呼吸機能に関する研究3) **19**, 506-518
- 612.227.1:612.223.1
429 (1948) 長谷川 弘
 運動時の呼吸促進について(第1編) CO₂による呼吸の刺激生理学的研究 **10**, 206-215
- 612.227.1:612.216
430 (1948) 長谷川 弘
 運動時の呼吸促進について(第2編) 運動時の呼吸調節はCO₂によるか **10**, 216-223
- 612.23 血液のガス交換**
- 612.23:597.82
431 (1954) 長谷川 弘・小沢 孝
 蛙のガス代謝に関する研究 **16**, 397-403
- 612.26 組織呼吸**
- 612.26:612.353:612.357.15
432 (1942) 佐藤正文
 肝臓組織の酸素消費量と胆汁酸(肝臓機能に対する胆汁成分の影響 其1) **7**, 555-562
- 612.26:576.8.097.3
433 (1943) 佐藤正文
 組織呼吸とAnaphylaxie 反応 **8**, 699-705
- 612.261
434 (1948) 小林庄一
 人体のCO₂-容量について **10**, 201-205

612.27 生体に及ぼす気圧の影響

612.275

- 435 (1948) 稲垣克彦
幼若動物の高空耐性に関する研究 10, 178-182

612.275.1 : 612.221.3

- 436 (1942) 吉村玄三
高空に於ける肺胞内酸素分圧の正常値保持に就いて 7, 702-712

612.275.1 : 612.223.1 : 612.21

- 437 (1942) 吉村玄三
高空に於ける酸素吸入時の呼吸量に就いて 7, 713-720

612.275.1 : 612.112.1

- 438 (1942) 吉村玄三
航空の人体血糖に及ぼす影響に就いて 7, 721-731

612.275.1 : 612.223.1

- 439 (1942) 吉村玄三
低圧時に於ける炭酸瓦斯加酸素吸入の白鼠の死期に及ぼす影響に就いて 7, 732-738

612.275.1 : 612.13

- 440 (1942) 吉村玄三
低圧の血液循環速度に及ぼす影響に就いて 7, 739-741

612.275.1 : 612.13

- 441 (1942) 吉村玄三
低圧の血流量に及ぼす影響に就いて 7, 742-744

612.275.1-083 : 612.221

- 442 (1943) 杉本良一・原田久雄・和田恵洲男
航空生理学の研究 (2) 酸素吸入マスクの呼吸代謝学的研究 8, 313-318

612.275.1-083 : 612.22.04 : 612.766.1

- 443 (1943) 川上正義・和田恵洲男・安井敏夫
航空生理学の研究 (3) 低圧環境に於いて酸素吸入を行いつつある状態に於ける疲労度の研究 8, 319-322

612.275.1-083 : 612.16+ .216+ .612.3+ .884

- 444 (1943) 名取礼二・川上正義・土橋英夫
航空生理学の研究 (4) 低圧環境の脉搏数, 呼吸数, 肺胞気の O₂ 及び CO₂ 分圧並びに圧覚閾に及ぼす影響に就いて 8, 324-329

612.275.1-083 : 612.122

- 445 (1943) 大村正・原田久雄・堀口正史・高橋英雄
航空生理学の研究 (5) 低圧環境下に於ける血液乳酸の消長に就いて 8, 330-335

612.275.1-083 : 612.117/8

- 446 (1943) 松田実
航空生理学の研究 (6) 低圧環境の血液諸性状に及ぼす影響に就いて 8, 336-340

612.275.1-083

- 447 (1943) 安井敏夫・松田実
航空生理学の研究 (7) 耐高空能に就いての研究 8, 341-348

612.275.1 : 612.172.4

- 448 (1944) 古川誠
航空生理学の研究 (8) 低圧環境に於ける電気心働図 9, 540-545

612.275.1-087

- 449 (1944) 島崎賢
航空生理学の研究 (9) 上空耐性錬成と体重変化(1) 9, 546-550

612.275.1-087

- 450 (1944) 島崎賢
航空生理学の研究 (10) 上空耐性錬成と体重変化(2) 9, 551-555

612.275.1 : 612.014.47

- 451 (1944) 幕内精一・岩淵好二
航空生理学の研究 (11) 遠心力耐性に関する 1, 2 の実験(1) 9, 631-636

612.275.1 : 612.014.47

- 452 (1944) 幕内精一・岩淵好二
航空生理学の研究 (12) 遠心力耐性に関する 1, 2 の実験(2) 9, 637-641

612.275.1 : 612.39-083

- 453 (1944) 古川誠・島崎賢
航空生理学の研究 (13) 低栄養動物の上空耐性 9, 642-645

612.275.1 : 612.111

- 454 (1944) 島崎賢
航空生理学の研究 (14) 上空耐性と赤血球の関係 9, 646-648

612.28 呼吸に及ぼす神経系の作用

612.28 : 612.21-083 : 612.014.462.4 : 597.554.3

- 455 (1936) 富田理一郎
呼吸中枢に就いての研究 (1) 鯉の上半身灌流において呼吸運動を停止せしむる水素イオンの限界濃度について 1, 225-229

612.28-083 : 597.554.3

- 456 (1937) 高橋六弥
鯉の呼吸中枢に就いての研究 (2) 中枢神経系の截断法による呼吸中枢所在の探求 2, 178-183

- 612.28
457 (1950) 福原 武・馬場三郎・蒲原 沃
 呼吸運動の神経性調節の機序 **12**, 208-215
- 612.28
458 (1953) 福原 武・角 忠明・岡田博匡
 呼吸中枢の所在 **15**, 196-202
- 612.28 : [612.825 : 612.014.424
459 (1955) 堀内 冷・東田昭二・斎藤一郎
 電気痙攣後の呼吸中枢の興奮単位 **17**, 816-819
- 612.28-083 : 597.554.3
460 (1937) 名取礼二
 鯉の呼吸中枢に就いての研究 (3) 呼吸調節中枢の
 所在に就いて **2**, 227-232
- 612.281
461 (1958) 戸出一郎
 イヌの panting 中枢の所在部位について **20**, 1024-
 1031
- 612.282 : 597.82
462 (1958) 岡 敬三
 カエルの脳髄横断の呼吸運動に及ぼす影響 **20**,
 513-519
- 612.282 : 597.82
463 (1958) 岡 敬三
 カエルの呼吸中枢の所在 **20**, 520-524
- 612.287
464 (1942) 高木健太郎・池 留雄
 迷走神経の呼吸調節作用に就いて (第1報告) **7**, 303-
 313
- 612.287
465 (1956) 朝比奈一男・山中みよ子・北原藤子
 迷走神経中枢端刺激の呼吸への影響 (V) 呼吸中枢
 の Tonus について **18**, 387-389
- 612.287 : 612.014.43
466 (1942) 高木健太郎
 迷走神経の呼吸調節作用に就いて (第2報) 迷走神
 経冷却時の呼吸の変化に就いて **7**, 538-549
- 612.287 : 612.822
467 (1944) 高木健太郎
 迷走神経の呼吸調節作用の中樞性機序に就いて **9**,
 677-689
- 612.287 : 612.014.424
468 (1944) 佐藤謙助
 呼吸運動に及ぼす迷走神経肺枝刺激の強さと頻度
 との関係について **9**, 255-267
- 612.287 : 612.014.424 : [612.23 + 612.143
469 (1948) 福田邦三・加藤 保・石川 康・高島 巖
 迷走神経刺激による呼吸停止及び之に伴う血圧変
 動に就いて **10**, 258-265
- 612.287 : 612.014.424
470 (1950) 高木健太郎・長谷川 弘・石井公正
 迷走神経中枢端刺激の呼吸に及ぼす影響について
12, 216-223
- 612.287 : 612.014.424
471 (1955) 朝比奈一男・山中みよ子・北原藤子
 迷走神経中枢端刺激の呼吸への影響 (I) 初期効果
 について **17**, 593-597
- 612.287 : 612.014.424
472 (1955) 朝比奈一男・山中みよ子・北原藤子
 迷走神経中枢端刺激の呼吸への影響 (II) 継続的
 反応について **17**, 598-600
- 612.287 : 612.014.424
473 (1955) 朝比奈一男・山中みよ子・北原藤子
 迷走神経中枢端刺激の呼吸への影響 (III) 週期性呼
 吸について **17**, 601-602
- 612.287 : 612.014.412
474 (1955) 朝比奈一男・山中みよ子・北原藤子
 迷走神経中枢端刺激の呼吸への影響 (IV) 刺激中断
 後の反応について **17**, 603-606
- 612.287/8 : 597.82
475 (1951) 新島 旭
 ヒキガエルに於ける迷走神経性呼吸反射 **13**, 187-
 197
- 612.287 : 612.833.2 : 612.741.1
476 (1955) 小口周男
 筋電図法による迷走神経呼吸反射の研究 **17**, 726-
 732
- 612.287 : 612.014.424
477 (1953) 小田中 貞
 イヌの迷走神経の強刺激によって発生する過呼吸
 について **15**, 279-280
- 612.288 + 612.181] : 1612.844 : 612.828
478 (1953) 福原 武・角 忠明・岡田博匡
 眼球-呼吸反射並びに眼球-血管反射の延髄内経路
 について **15**, 193-195
- 612.288 : 612.819.3
479 (1952) 小田中 貞
 三叉神経-呼吸反射 **14**, 355-357
- 612.288 : 612.825.5
480 (1953) 小田中 貞
 知覚神経呼吸反射 (第1報) 脊髄後根刺激時に発現
 する呼吸過常 Hyperpnoea について **15**, 143-149

- 612.288 : 612.825.5
481 (1953) 小田中 貞
 知覚神経呼吸反射 (第2報) 過呼吸中枢と正常呼吸中枢との関係について **15**, 271-275
- 612.288 : 612.825.5
482 (1953) 小田中 貞
 知覚神経呼吸反射 (第3報) 坐骨神経あるいは脊髄後根刺激による過呼吸の発生機序 **15**, 276-278
- 612.288 + 612.833.14] : 612.133 : 612.014.424
483 (1953) 中山 沃
 右鎖骨下動脈起始部及び腕頭動脈からの呼吸並びに血圧反射 **15**, 290-293
- 612.288 : 612.819.9
484 (1953) 小田中 貞
 舌咽神経-呼吸反射に関する研究 **15**, 346-349
- 612.288 : 612.315
485 (1957) 齒田芳澄
 食道伸展の呼吸運動に及ぼす影響 **19**, 121-127
- 612.288 + 612.825] : 612.223.1
486 (1955) 堀内 洽・東田昭二・岡本智量
 アンモニア気管内吸入による呼吸反射と脳幹網様系 **17**, 820-824
- 612.288
487 (1956) 佐藤 浩
 上気道よりの調節呼吸反射 **18**, 484-494
- 612.3 消化, 栄養**
- 612.31 口, 歯, 唾液腺**
- 612.31 : 612.819.7
488 (1957) 船越正也
 唾液分泌機構の神経生理学的研究 (I) 鼓索神経の電気刺激と分泌特性 **19**, 553-561
- 612.31 : 612.82
489 (1958) 船越正也
 唾液分泌機構の神経生理学的研究 (II) 延髄唾液核の生理学的決定 **20**, 115-122
- 612.311.1 : 606-089.5-031.84
490 (1956) 中久喜 喬
 歯科局所麻酔の発現機序に関する生理学的考察 **18**, 204-213
- 612.312-064 : 612.819.9
491 (1953) 小田中 貞
 舌咽神経の嚥下抑制作用について **15**, 350-352
- 612.312 ; 612.21
492 (1959) 岡 敬三
 カエルの嚥下運動と呼吸運動との関係 **20**, 956-958
- 612.313 : 612.014.462.6
493 (1954) 吉村寿人
 消化腺の酸塩基分泌機転 (唾液の酸塩基平衡を中心として) **16**, 105-114
- 612.313.1
494 (1952) 藤城郁男
 唾液中の乳酸及び糖について **14**, 373-377
- 612.313.1 : 612.121.2/3
495 (1952) 高岡 涉
 唾液の酸塩基平衡に関する研究 (第1報) 唾液の酸塩基平衡と血液の酸塩基平衡 **14**, 504-513
- 612.313.1
496 (1953) 高岡 涉
 唾液の酸塩基平衡に関する研究 (第2報) 唾液酸塩基平衡の要因 **15**, 371-382
- 612.313.3 : 612.014.469
497 (1958) 吉村寿人・奥村 修・西川和夫
 唾液アルカリ分泌に及ぼす Diamox の影響 **20**, 997-1003
- 612.313.3-083
498 (1940) 有田宗太郎
 顎下腺の早期対側麻痺性分泌並びにその機制に就いて **5**, 219-230
- 612.313.3-083 : 612.313.5
499 (1940) 有田宗太郎・田口半四郎・青木清四郎
 犬顎下腺に於ける早期対側麻痺性分泌の組織細胞学的研究 **5**, 231-240
- 612.313.3 : 612.825 : 612.014.424
500 (1936) 三神 佑
 大脳皮質刺激による唾液分泌について **1**, 245-250
- 612.313
501 (1957) 森 隆之助
 唾液の分泌とその酸塩基平衡 (第1報) 唾液の種類と唾液の酸塩基平衡 **19**, 1-15
- 612.313.3 : 612.014.462.6
502 (1957) 森 隆之助
 唾液の分泌とその酸塩基平衡 (第2報) 刺激の種類と唾液の酸塩基平衡 **19**, 813-825
- 612.313.3 : 612.014.469
503 (1958) 岩崎隼太・吉村寿人
 人耳下腺唾液の分泌刺激の種類と Amylase 力価との関係 **20**, 163-169

- 612.313.3-083
504 (1958) 井上太郎
 唾液腺灌流による唾液分泌機転に関する研究 (第1報) 唾液腺の灌流法について **20**, 430-443
- 612.313.3:612.261:612.314.1
505 (1958) 井上太郎
 唾液腺灌流による唾液分泌機転に関する研究 (第2報) 唾液腺の酸素消費量について **20**, 444-452
- 612.313.3:083:612.314.1
506 (1936) 井上太郎
 唾液腺灌流による唾液分泌機転に関する研究 **20**, 734-743
- 612.313.4:599.742.1
507 (1936) 古川 明
 犬の耳下腺における一種の麻痺性分泌について **1**, 189-193
- 612.313.4:599.742.1
508 (1936) 古川 明
 犬の顎下腺における対側麻痺性分泌について **1**, 194-196
- 612.313.5
509 (1939) 富田勝郎
 犬顎下腺で発見した一種の麻痺性分泌並びにその機制 **4**, 54-66
- 612.313.3
510 (1954) 北村尚信
 人間耳下腺固有唾液量の生理学的意義について (第1編) 耳下腺固有唾液量に関する大数観察特に年令的な問題 **16**, 12-16
- 612.313.8
511 (1954) 北村尚信
 人間耳下腺固有唾液量の生理学的意義について (第2編) 耳下腺固有唾液量の神経生理学的研究 **16**, 17-26
- 612.313.3:612.014.47
512 (1954) 宮本清純
 圧反射の研究 **16**, 336-342
- 612.313.3:612.015.1
513 (1957) 岩崎隼太
 唾液腺のアルカリ分泌に対する炭酸脱水酵素の意義 (第1報) Carbonic Anhydrase抑制剤投与時の唾液酸塩基平衡 **19**, 143-151
- 612.314.1
514 (1957) 岩崎隼太
 唾液腺のアルカリ分泌に対する炭酸脱水酵素の意義 (第2報) 唾液腺の炭酸脱水酵素含量とそのアルカリ分泌 **19**, 1239-1256
- 612.313.5:612.766.1
515 (1953) 高岡 渉
 唾液の酸塩基平衡に関する研究 (第3報) 疲労と唾液の酸塩基平衡について **15**, 646-654
- 612.314.1:613.1
516 (1954) 高岡 渉・森 隆之助・川田輝夫
 唾液の酸塩基平衡に関する研究 (第4報) 唾液分泌の季節変化とその酸塩基平衡 **16**, 1-11
- 612.315:612.367
517 (1958) 藺田芳澄
 食道-大腸反射 **20**, 27-31
- 612.315+612.327:612.337
518 (1958) 藺田芳澄
 食道-胃・小腸反射 **20**, 20-26
- 612.32 胃, 胃液**
- 612.325
519 (1939) 木野勢新次郎
 胃に於ける食物の重積 **4**, 193-198
- 612.327:612.337
520 (1939) 川崎元一
 胃蠕動波は十二指腸へ移行するか **4**, 221-224
- 612.327-083
521 (1939) 川崎元一
 血液灌流による別出胃の運動及び内容排除に関する研究 **4**, 225-236
- 612.327-083
522 (1942) 中尾竜一
 胃運動に関する研究 (I) 腹窓法による正常家兎胃運動の観察 **7**, 22-39
- 612.327-083
523 (1942) 中尾竜一
 胃運動に関する研究 (II) 饑餓時の家兎胃運動に就いて **7**, 40-53
- 612.327:612.825:(612.014.43+612.014.47
524 (1943) 井田明輝
 家兎胃運動に及ぼす前庭迷路刺激の影響に就いて (I) 廻転刺激及び温熱的刺激 **8**, 583-597
- 612.327:612.858:612.014.47
525 (1943) 井田明輝
 家兎胃運動に及ぼす前庭迷路刺激の影響に就いて (II) 一側迷路の機械的刺激, 高張食塩水注入又は噴置による運動の変化 **8**, 598-610
- 612.327:612.858
526 (1943) 井田明輝
 家兎胃運動に及ぼす前庭迷路刺激の影響に就いて (III) 迷路刺激の結果が胃運動に影響を及ぼすに至る経路 **8**, 611-624

- 612.327:612.13:597.82
527 (1944) 市河三太
 蕪胃の収縮と血行に就いて **9**, 649-653
- 612.327:612.368:612.89.05:612.893
528 (1957) 銭場武彦・佐々木弘純・岡本満男
 大腸壁の急速伸展による胃運動の変化について **19**,
 438-443
- 612.327:612.898:612.014.47:597.82
529 (1958) 羽藤博鬼
 カエルの交感神経交通枝及び内臓神経切断末梢端
 刺激の胃運動に及ぼす影響 **20**, 388-396
- 612.327:612.819.913:612.014.424:597.82
530 (1958) 羽藤博鬼
 カエルの脊髄前根及び後根切断末梢端刺激の胃運
 動に及ぼす影響 **20**, 397-400
- 612.327:612.467.1:612.014.47:598.72
531 (1958) 羽藤博鬼
 カエルの膀胱伸展の胃運動に及ぼす影響 **20**, 407-
 412
- 612.327:[612.33+612.36]:612.014.47:598.72
532 (1958) 羽藤博鬼
 カエルの小腸及び直腸伸展の胃運動に及ぼす影響
20, 413-415
- 612.327-063:612.819.913:597.82
533 (1958) 羽藤博鬼
 カエルの後根を通る胃運動亢進線維について **20**,
 416-421
- 612.327-064:612.338
534 (1954) 銭場武彦・内藤善夫
 小腸から胃への抑制反射に就いて **16**, 207-209
- 612.327.2
535 (1955) 山上松義
 幽門括約部の迷走神経支配 **17**, 488-501
- 612.327.2:612.014.424:597.82
536 (1958) 羽藤博鬼
 カエルの迷走交感神経幹切断末梢端刺激の胃運動
 に及ぼす影響 **20**, 401-406
- 612.327/8:612.89.05:612.898
537 (1957) 銭場武彦・平岡 達・佐々木弘純
 知覚刺激による胃運動の促進に就いて **19**, 284-287
- 612.328
538 (1955) 山上松義
 幽門括約部の内臓神経支配 **17**, 505-516
- 612.33 腸, 中腸, 腸の腺**
- 612.33:612.386:612.833.81
539 (1956) 上田三郎
 腸吸収の条件反射 **18**, 447-453
- 612.33:612.014.463
540 (1957) 竹政健次郎
 剔出腸管保生液の無機組成分について **19**, 1217-
 1225
- 612.33-014:612.014.463/4
541 (1957) 竹政健次郎
 剔出腸管保生液の緩衝剤及び酸素供給について **19**,
 1226-1233
- 612.334
542 (1955) 角 忠明
 Anoxia の小腸運動に及ぼす作用 **17**, 65-71
- 612.336:616-021.6
543 (1956) 古 栄裕
 諸臓器の傷害が腸管に及ぼす影響に就いて **18**, 165
 -180
- 612.337:599.325
544 (1943) 崔 漢因
 家兎小腸運動の研究(第1編) 主として振子運動に
 就いて **8**, 148-159
- 612.337:599.325
545 (1943) 崔 漢因
 家兎小腸運動の研究(第2編) 振子運動と分節運動
 及び蠕動との関係に就いて **8**, 175-184
- 612.337-083:599.325
546 (1943) 崔 漢因
 家兎小腸運動の研究(第3編) 剔出腸管に於ける観
 察 **8**, 642-647
- 612.337
547 (1958) 西村荘介
 腸蠕動の方向性に関する研究 **20**, 143-162
- 612.337-08
548 (1939) 福原 武
 福原式腹窓手術法に就いて **4**, 30-32
- 612.337-08
549 (1940) 山本晃朝・中尾竜一・原 昊
 腹窓法の改良 **5**, 426-432
- 612.337-083
550 (1952) 東田 巖
 人工的に腸管を切断し各種吻合術を施した場合の
 腸管運動の観察 **14**, 272-281

- 612.337-083
551 (1956) 笠原竜喜
 室温 Tyrode液中に於ける家兔の別出小腸管運動に関する研究 **18**, 875-889
- 612.337-063/4 : [612.816 : 612.014.424
552 (1954) 銭場武彦・伊藤光彰・佐々木弘純
 知覚刺激と腸運動 **16**, 643-646
- 612.337-064 + 612.335.5] : 612.338 : 612.014.424
553 (1953) 銭場武彦・内藤美夫
 腸間膜神経の中枢端刺激による腸運動の抑制と腸血行 **15**, 520-523
- 612.337 : 612.31
554 (1953) 角 忠明
 口腔及び咽頭壁からの小腸反射 **15**, 601-608
- 612.337 : 612.819.91 : 612.014.424
555 (1954) 福原 武・高木鉄男・山上松義
 迷走神経刺激の腸管運動に及ぼす影響 **16**, 354-367
- 612.337 : 612.898
556 (1954) 福原 武・高木鉄男・山上松義
 大内臓神経刺激の腸管運動に及ぼす影響 **16**, 368-373
- 612.337 : 612.844 : 612.014.47
557 (1954) 角 忠明
 眼球-小腸反射 **16**, 379-383
- 612.337 : 612.825 : 612.014.47
558 (1954) 角 忠明
 脳膜-小腸反射 **16**, 384-387
- 612.337 : 615.784.2
559 (1954) 福原 武・高木鉄男・山上松義
 再び Atropine の小腸運動に及ぼす影響について **16**, 586-596
- 612.337 : 612.144
560 (1951) 銭場武彦・岸 良尚・福場友重
 腸の周期的収縮と静脈圧の変動に就いて **13**, 415-418
- 612.337 : [612.338 : 612.014.424
561 (1955) 銭場武彦・三島久人・佐々木弘純
 下腹神経刺激による下部大腸の収縮に就いて **17**, 777-780
- 612.337
562 (1955) 柳谷岩雄・大久保義夫
 蠕動の成因としての内圧の意義 **17**, 77-81
- 612.337
563 (1956) 柳谷岩雄・大久保義夫
 小腸逆蠕動の発現条件について **18**, 943-947
- 612.337/8
564 (1958) 柳谷岩雄・大久保義夫
 蠕動発現に対する内在神経叢の意義 **20**, 453-461
- 612.337 : 612.335
565 (1958) 柳谷岩雄・大久保義夫・島田正一
 蠕動発現に対する縦、輪両筋層の意義 **20**, 462-467
- 612.337
566 (1958) 柳谷岩雄・大久保義夫
 蠕動伝達速度に及ぼす腸内容粘稠度の影響 **20**, 468-475
- 612.337 : 615.784.2
567 (1957) 宮川鉄男
 回盲括約部の運動に及ぼす adrenaline の作用 **19**, 858-861
- 612.337 : 615.784.2
568 (1957) 宮川鉄男
 腸運動に対する亢進剤の奇異抑制作用 **19**, 862-866
- 612.337 : 615.784.2
569 (1957) 宮川鉄男
 回盲括約部の運動に対する薬物の作用 **19**, 867-870
- 612.338 : 612.898
570 (1957) 宮川鉄男
 回盲括約部における内臓神経刺激効果の逆転について **19**, 152-156
- 612.338 : 612.83 : 612.014.424
571 (1939) 川崎元一
 小腸に於ける所謂呉氏脊髄副交感神経支配に関する疑義 **4**, 18-22
- 612.3/4 : 612.014.423
572 (1954) 揖場民雄
 微細電極による臓器膜電位差の研究 **16**, 555-565
- 612.35 肝臓, 胆汁**
- 612.353 : 612.015.36
573 (1939) 金杉重信
 肝臓に於いて rH9 に近い酸化環元緩衝系に就いて **4**, 348-351
- 612.353 : 612.357.1
574 (1943) 佐藤正文
 肝臓解糖反応と胆汁酸(肝臓機能に及ぼす胆汁成分の影響 第2報) **8**, 160-166
- 612.353 : 612.357.1
575 (1944) 佐藤正文
 肝臓組織に因る 2, 3 呼吸基質の消費酸素分解並びに其胆汁酸による阻止 肝臓機能に対する胆汁成分の影響 (第3報) **9**, 341-344

612.353 : 612.26-063

- 576** (1944) 佐藤正文
胆汁中の組織呼吸促進物質 肝臓機能に対する胆汁成分の影響 (第4報) **9**, 345-350

612.353

- 577** (1951) 高中聡昭
Chorionic gonadotropin の肝臓に於ける破壊 **13**, 337-339

612.357.15

- 578** (1942) 長生卓治
人間の胆汁酸に就いて (第2報) 胆汁酸の単離成績 **7**, 171-177

612.359-083 : 612.461

- 579** (1952) 松村起男
実験的肝障害時のクレアチン尿出現機序 **14**, 378-385

612.36 大腸, 盲腸, 直腸

612.363

- 580** (1941) 味木福孫
家兎盲腸並びに虫様垂運動に関する研究 (その1) 正常家兎盲腸並びに虫様垂運動の観察 **6**, 464-477

612.363 : 612.819

- 581** (1941) 味木福孫
家兎盲腸並びに虫様垂運動に関する研究 (その2) 家兎盲腸運動に対する迷走神経及び大内臓神経の作用 **6**, 638-646

612.367

- 582** (1937) 榊田亀次郎
大腸の運動 **2**, 196-212

612.367

- 583** (1958) 齒田芳澄
大腸運動の神経支配 **20**, 32-40

612.367/8 : 612.014.424

- 584** (1955) 銭場武彦・三島久人・伊達辰之助
知覚刺激と大腸運動 **17**, 478-480

612.367/8

- 585** (1958) 三宅隆雄
大腸における腸内反射について **20**, 863-872

612.368

- 586** (1937) 榊田亀次郎
大腸の神経支配 **2**, 320-330

612.39 栄養**612.391 飢餓, 渴, 栄養不良**

612.391 : 612.745.1

- 587** (1944) 浦本政三郎・青葉 誠・岸本正義
限食と体力 (1) 限食度を異にする雛の發育 **9**, 833-839

612.391 : 612.745.1

- 588** (1944) 青葉 誠・岸本正義
限食と体力 (2) 各種限食飼育雛の恢復 **9**, 840-843

612.391 : 612.745.1

- 589** (1944) 矢作光美・井上隆利
限食と体力 (3) 食種を限定せる飼育条件下の發育と食物摂取量 **9**, 844-847

612.391 : 612.745.1

- 590** (1944) 井上隆利・矢作光美
限食と体力 (4) 限食飼育に於ける幼若期白鼠の体重と臓器重量の消長 **9**, 848-851

612.391 : 612.745.1

- 591** (1944) 矢作光美・井上隆利
限食と体力 (5) 種々の限食度飼育時の体重減却と恢復 **9**, 852-856

612.391 : 612.745.1

- 592** (1944) 朝井 清・景山博水
限食と体力 (6) 肝筋糖原質及び筋乳酸の研究 限食動物の糖原質代謝に就いて **9**, 857-861

612.392 栄養物質の動態 (一般)

612.392.015 : 612.461.82

- 593** (1955) 益子 博
ビタミンCの糖尿作用 **17**, 339-344

612.392.3-083 : 612.8

- 594** (1941) 大久保金藏
経口的水投与致死家兎に於ける血圧及び致死量並びに水分受容臓器に対する減圧神経, 頸動脈洞神経, 迷走神経の影響に就いて **6**, 281-290

612.392.3 + .6 : 597.82

- 595** (1948) 河村謙二
蛙の塩・水分代謝障碍に就いて **10**, 165-170

612.392.6 : 612.898 : 612.766.1

- 596** (1952) 大原重信
労働時の塩分代謝と自律神経機能 **14**, 468-474

612.397 脂肪の挙動

612.397.81

- 597** (1957) 中神義男
日本人の血清総コレステロール濃度について **19**, 453-464

- 612.398 蛋白その他含窒素栄養物質の挙動**
- 612.398:612.766.1
598 (1951) 山地廉平
 筋労作時の蛋白代謝に関する研究 (第1報) 労作訓練時の窒素代謝 **13**, 476-482
- 612.398:612.766.1:612.117/8
599 (1951) 山地廉平
 筋労作時の蛋白代謝に関する研究 (第2報) 労作訓練時の血液性状 **13**, 483-489
- 612.398:612.766.1
600 (1951) 山地廉平
 筋労作時の蛋白代謝に関する研究 (第3報) 労作訓練と労作時の蛋白代謝の時間的消長 **13**, 491-496
- 612.398:612.39
601 (1954) 井上五郎
 蛋白代謝と基礎代謝との関係 (第1報) 蛋白摂取量と基礎代謝量との関係に就いて **16**, 316-325
- 612.398:612.39:613.1
602 (1954) 井上五郎
 蛋白代謝と基礎代謝との関係 (第2報) 基礎代謝と蛋白代謝との季節相関 (体温調節機能と物質代謝の季節相関に関する研究) **16**, 326-335
- 612.398.12:612.015.349
603 (1952) 山本正道
 血液蛋白の栄養学的意義に関する研究 (第3編) 血液蛋白と成人の蛋白必需量 **14**, 444-451
- 612.398.12:612.392.64:612.015.31
604 (1954) 土井弘正
 食塩過剰摂取の家兔血清蛋白結合沃素に及ぼす影響 **16**, 535-537
- 612.398.12:612.455
605 (1954) 白井忠臣
 副腎剔除後の血清蛋白 A/G 比について **16**, 532-534
- 612.398.12:612.455
606 (1956) 白井忠臣
 副腎剔除後の家兔血清蛋白分層並びに寒冷ストレス時の血清 A/G 比 **18**, 69-73
- 612.398.12:612.354
607 (1956) 白井忠臣
 実験的肝障害時の血清蛋白分層と Cortison 投与の影響 **18**, 74-78
- 612.398.145
608 (1955) 山根彦二
 核酸磷の Turnover に就いて **17**, 540-543
- 612.398.145:[545.3:537.363+546.18
609 (1955) 山根彦二
 核酸の電気泳動的考察及び核酸と無機磷の結合 **17**, 544-548
- 612.398.146:612.124
610 (1955) 山根彦二
 Nucleic acid と Serum albumine の Interaction **17**, 549-554
- 612.398.145:612.124
611 (1955) 山根彦二
 Nucleic acid と Ovalbumine の Interaction **17**, 555-559
- 612.398.131:612.397.8
612 (1957) 井上康夫
 Lipo-protein Association 就中, レシチンと卵アルブミンとの相互作用 **19**, 67-71
- 612.398.31:612.397.8
613 (1957) 井上康夫
 Lipo-protein Association の熱力学的考察 **19**, 72-75
- 612.398.136:546.18.02.32
614 (1957) 井上康夫
 白鼠血清 Lipo-protein 分割への P³² の Incorporation と Contamination P³² の除去の問題 **19**, 76-80
- 612.398.2
615 (1957) 宇佐美駿一
 重労働の蛋白代謝と Stress 学説 筋労作時の蛋白代謝に関する研究 (第4報) **19**, 468-481
- 612.398.3:612.015.1:612.014.469
616 (1951) 岩木五郎
 アミノ酸々化複合酵素における SH-基の意義について I. p-chloromercuribenzoateによる阻害 **13**, 351-355
- 612.398.3:612.014.469
617 (1951) 岩木五郎
 アミノ酸々化複合酵素における SH-基の意義について II. amperometry によるSH-の定量 **13**, 356-359
- 612.4 腺の生理, 分泌**
- 612.42 リンパ系, リンパ, リンパ節**
- 612.42:612.014.46
618 (1952) 八田博英・飯塚恒治
 化学的物質のリンパ節への作用について **14**, 530-532

- 612.42 : 612.741.1
619 (1952) 八田博英・飯塚恒治
 リンパ節の収縮性について **14**, 525-529
- 612.422 : 612.35
620 (1954) 八田博英・岡田乾一
 リンパ生成に於ける肝臓の役割について **16**, 629-630
- 612.423 : 594.56
621 (1953) 安藤美夫
 章魚のリンパ管の検索 **15**, 16-19
- 612.424 : 612.819.91
922 (1953) 岡田博匡
 迷走神経のリンパ心臓運動の調節機序について **15**, 324-333
- 612.424 : 597.82
623 (1954) 稲田素臣
 墓リンパ嚢中隔にある筋性漏斗瓣の機能について **16**, 538-546
- 612.43 内分泌, 胸腺**
- 612.438 : 612.741.1
624 (1951) 八田博英
 胸管の収縮性について **13**, 294-297
- 612.438 : 612.741.1
625 (1951) 八田博英
 神経を介しての胸管の収縮性について **13**, 298-300
- 612.434.018
626 (1954) 鈴木董三
 メラノホーレンホルモン分泌機序に関する研究 **16**, 518-524
- 612.44 甲状腺及び副甲状腺**
- 612.444 : 612.453
627 (1954) 木村光博
 甲状腺ホルモンの副腎皮質機能に及ぼす影響について **16**, 169-173
- 612.448 : 612.455
628 (1957) 奈良輝樹
 甲状腺機能と副腎皮質 **19**, 621-628
- 612.45 副腎, その他の内分泌腺**
- 612.45 : 612.35-083
629 (1952) 西村敏彦
 肝臓圧碎ショックに於ける副腎の役割 **14**, 50-55
- 612.45 : 599.325
630 (1952) 小林 丘
 家兎の副腎に就いて **14**, 297-301
- 612.45 : 611.98 : 612.014.47
631 (1953) 中川 孝
 下肢緊迫のStressに対する耐性と副腎 **15**, 552-558
- 612.45-083
632 (1956) 永持和一
 犬副腎不全症の発現機序について **18**, 669-677
- 612.45 : 612.53
633 (1956) 向島 迪
 副腎と体温保持機能 **18**, 775-779
- 612.45
634 (1958) 丸山俊男
 副腎とInsulin感受性 **20**, 307-313
- 612.452/3 : (612.766.1 + 612.821.6
635 (1957) 田多井吉之介
 副腎機能を指標にした生理的負荷度の研究 **19**, 407-415
- 612.453 : 615.461.45
636 (1953) 長峯武彦
 アドレナリン作用に対する副腎皮質の意義 **15**, 383-388
- 612.459 : 612.018.2 : 612.453
637 (1950) 椎名房男
 利尿性内分泌物の比較研究(副腎皮質利尿因子の確立) **12**, 350-355
- 612.46 腎臓, 尿**
- 612.461 尿の化学的性質, 尿検査法**
- 612.461 : 612.015.31
638 (1955) 高木一男
 食塩大量摂取と尿中Vakat-O **17**, 333-338
- 612.461 : 612.014.31
639 (1955) 入江紀文
 食塩摂取と尿水Vakat-Oの排泄 **17**, 619-622
- 612.461.1
640 (1939) 島 寛一
 人尿の緩衝能について **4**, 239-251
- 612.461.1
641 (1951) 高木作治
 尿緩衝能に就いて **13**, 126-128
- 612.461.1
642 (1953) 下川末夫
 Donaggio 反応陽性物質について **15**, 636-645

- 612.461.1 : 612.766.1 : 612.463.5 : 612.465 : 612.121
- 643** (1955) 下川末夫・荻野 修・菓子井幸則
筋作業時に於ける Donaggio 反応陽性物質の排泄と腎機能, 血液 pH 及び蛋白尿との関係について **17**, 1-9
- 612.461.1 : 612.745.1
- 644** (1956) 中山達夫
Donaggio 反応陽性物質としての血漿 Mucoprotein について (其の2) 筋作業時における濃度 **18**, 537-540
- 612.461.1 : 612.124 : 612.398.145.3] .537.363
- 645** (1956) 菓子井幸則
Donaggio 反応陽性物質 (尿 mucoprotein) 及び血漿 mucoprotein の電気泳動像 **18**, 689-695
- 612.461.1 : 612.121.2
- 646** (1957) 桑原薫三
Acidosis 家兎の Donaggio 反応について **19**, 1123-1126
- 612.461.1 + 612.463.1] : [612.014.481 + 534.321.9
- 647** (1957) 桑原薫三
X線, 超短波分野照射の家兎尿 D値及び尿量に及ぼす影響 **19**, 1127-1129
- 612.461.1-08 : 612.766.1 : 612.014.423
- 648** (1952) 阿知波繁一
疲労尿の電気化学的研究 (第8報) 酸化還元電位に及ぼす影響 **14**, 106-109
- 612.461.1 : 612.766.1 : 612.014.423
- 649** (1952) 阿知波繁一
疲労尿の電気化学的研究 (第9報) 陽極過電圧に及ぼす影響 **14**, 110-113
- 612.461.1 : 612.766.1 : 612.014.423
- 650** (1952) 阿知波繁一
疲労の電気化学的研究 (第16報) 陽性反応物質よりみた小川膠質法, Donaggio-佐藤-吉川法並びに阿知波法間の相関性に就いて **14**, 388-389
- 612.461.1 : 612.766.1 : 612.014.423
- 651** (1952) 阿知波繁一
疲労の電気化学的研究 (第17報) 蛋白の分解過程より見た小川膠質法, Donaggio-佐藤-吉川法並びに阿知波法間の相関性に就いて (其の1) **14**, 514-516
- 612.461.1 : 612.766.1
- 652** (1953) 阿知波繁一
疲労の電気化学的研究 (第17報其の2) 蛋白質分解過程よりみた小川膠質法, Donaggio-佐藤-吉川法並びに阿知波法間の相関性に就いて **15**, 257-259
- 612.461.1 : 612.744.21
- 653** (1953) 阿知波繁一
疲労の電気化学的研究 (第17報) 蛋白質分解過程より見た小川膠質法, Donaggio-佐藤-吉川法並びに阿知波法間の相関性に就いて (其の3) **15**, 619-621
- 612.461.1 : 612.766.1
- 654** (1957) 阿知波繁一
疲労の電気化学的研究 (第17報) 蛋白質分解過程より見た小川膠質法, Donaggio-佐藤-吉川法並びに阿知波法間の相関性に就いて (其の4) **19**, 562-567
- 612.461.1 : 612.766.1
- 655** (1957) 阿知波繁一
疲労の電気化学的研究 (第17報) 蛋白質分解過程より見た小川膠質法, Donaggio-佐藤-吉川法並びに阿知波法間の相関性に就いて (其の5) **19**, 568-571
- 612.461.1 : 547.962.3 : 542.938
- 656** (1954) 阿知波繁一
蛋白質加水分解の研究 小川膠質法の電気化学的考察 (其の1) **16**, 84-86
- 612.461.1 : 547.962.3 : 542.938
- 657** (1954) 阿知波繁一
蛋白質加水分解の研究 小川膠質法の電気化学的考察 (其の2) **16**, 152-154
- 612.461.1 : 612.766.1] : 545.37
- 658** (1957) 阿知波繁一
電位差滴定に依る膠質の保護作用の研究 **19**, 482-490
- 612.461.1 : [542.943 + 542.941
- 659** (1957) 阿知波繁一・西田 力
尿の酸化還元滴定曲線に関する研究 **19**, 1301-1306
- 612.461.1-088
- 660** (1958) 阿知波繁一
小川膠質法, Donaggio-佐藤-吉川法並びに酸化還元滴定曲線法間の相関性の推計学的考察 **20**, 90-93
- 612.461.2
- 661** (1950) 福田篤郎
生理的クレアチン尿の出現条件 **12**, 87-90
- 612.461.2 : 612.392.013E
- 662** (1953) 板井忠生
Vitamin E 缺乏食時の Creatine 尿出現機序 **15**, 564-569
- 612.461.2
- 663** (1951) 古山 誠
生理的クレアチン尿の出現頻度並びにそれが意義 **13**, 367-374

612.461.2 : 612.014.31

- 664** (1958) 深沢義雄
クレアチニン代謝の体力学的意義 **20**, 225-234

612.461.25

- 665** (1951) 高木作治
尿酸の解離恒数に就いて **13**, 129-131

612.461.6

- 666** (1948) 福田篤郎
尿中カリウム排泄の周期的変動 **10**, 198-200

612.461.6

- 667** (1950) 小林 丘
尿中カリウム排泄の周期性成立について **12**, 343-349

612.463 尿分沁

612.463.8 : 612.311.1-083

- 668** (1954) 三輪久夫
歯牙処置時に於ける尿量変化の神経支配的観察 **16**, 708-719

612.465 腎臓の生理形態学及び生理的組織学

612.465

- 669** (1958) 吉村寿人・奥村 修・西川和夫・湯浅 実・
箭田正輝・杉本順一
腎臓のアンモニヤ排泄機転に就いて **20**, 988-996

612.465-083 : 597.82

- 670** (1937) 花岡虎男・渋谷善秀
腎臓機能に就いての研究 (1) 墓腎臓の灌流実験 **2**, 258-273

612.465 : 612.463.4 : 597.82

- 671** (1937) 花岡虎男・渋谷善秀
腎臓機能に就いての研究 (2) 墓の腎門静脈血行の
尿生成機転に及ぼす影響に就いての実験 **2**, 363-367

612.465 : 612.143/4

- 672** (1951) 銭場武彦・岸 良尚
腎臓の周期的収縮と動静脈圧の変動に就いて **13**, 471-475

612.465 : 612.463.2

- 673** (1953) 岡田忠雄
家兎の腎排泄能と利尿の関係 **15**, 559-563

612.466 腎臓の病態生理

612.466.23 : 616.12-008.331

- 674** (1954) 酒匂規夫
実験的腎性高血圧発生機序について **16**, 512-517

612.466.23 : 612.14

- 675** (1956) 岡田忠雄
偏腎性高血圧について **18**, 822-825

612.466.23 : 612.14 : 612.455

- 676** (1956) 岡田忠雄
腎性高血圧に於ける副腎の役割 **18**, 826-833

612.466.23 : 612.146.2

- 677** (1957) 津田安正
腎性高血圧と Renin 高血圧 **19**, 425-432

612.466.23 : 612.39

- 678** (1957) 津田安正
実験的腎性高血圧に対する食餌の影響 **19**, 433-437

612.466.86 : 612.115-064

- 679** (1954) 本田良行
尿Mucoproteinの血液凝固阻止作用 **16**, 766-770

612.466.68 : 612.124

- 680** (1956) 中山達夫
Donaggio 反応陽性物質としての血漿 Mucoprotein
について (其の1) 尿Mucoprotein との比較 **18**, 533-536

612.467 尿の排泄

612.467.1-083

- 681** (1942) 横山正松
豚の剔出輸尿管に就いての力学的研究 **7**, 407-417

612.467.1 : 612.014.462.1

- 682** (1942) 望月 清
色素に対する腎細尿管壁透過性と身体部位による
組織の透過性に就いて **7**, 635-638

612.467.1 : 612.741.1

- 683** (1944) 横山正松
犬膀胱の等長性収縮 **9**, 351-358

612.467.1 : 612.014.422

- 684** (1950) 市河三太
膀胱の電気生理学的研究 (第1報) 電導性及び分極
性に就いて **12**, 49-55

612.467.1 : 612.014.423.4

- 685** (1950) 市河三太
膀胱の電気生理学的研究 (第2報) 膜電位に就いて
12, 56-61

612.467.1 : 612.733

- 686** (1957) 高木孝敬
ヒキガエルの膀胱排尿筋の電気曲線 **19**, 51-60

612.467.1 : 612.816.1

- 687** (1957) 高木孝敬
ヒキガエルの膀胱を支配する運動神経の恢復曲線
と電圧期間曲線 **19**, 61-63

- 612.467.1 : 612.738 : 612.014.465
688 (1957) 高木孝敬
 膀胱の運動性神経支配に対する Ephedrine 及び Cocaine の作用 **19**, 64-66
- 612.467.2
689 (1942) 矢野正武
 輸尿管の微小収縮に就いて **7**, 182-193
- 612.467.2 : 612.014.424
690 (1942) 大谷卓造・高木作治
 輸尿管に対する平流電気の刺戟並びに抑制作用に就いて **7**, 272-280
- 612.467.2 : 612.741.6
691 (1942) 大谷卓造・高木作治
 輸尿管の絶対不応期に及ぼす電気緊張の影響 **7**, 281-285
- 612.467.2 : 612.014.469
692 (1942) 魚住俊平
 葡萄糖に対する腎細尿管壁透過性について **7**, 550-554
- 612.5 動物体温, 発熱**
- 612.53 体温調節, Thermotaxis**
- 612.53-083 : 612.014.48
693 (1953) 長谷川 弘・小沢 孝
 動物を固定することによる体温変化の原因について **15**, 253-256
- 612.53-055.1 : 613.1
694 (1953) 福田正弘
 人体々温調節機能の季節変動に関する研究 (第1報) 日本人 (成人男子) の体温調節機能の季節変動 **15**, 68-80
- 612.53-055.1/2 : 613.1
695 (1953) 福田正弘
 人体々温調節機能の季節変動に関する研究 (第2報) 体温調節機能の季節変動の性的差異 **15**, 150-157
- 612.53-053 : 613.1
696 (1953) 福田正弘
 人体々温調節機能の季節変動に関する研究 (第3報) 体温調節機能の季節変化の年令的推移 **15**, 417-427
- 612.53-053.4
697 (1953) 緒方維弘
 幼小児の体温調節 **15**, 175-185
- 612.53-055.1/2 : 612.014.43
698 (1958) 益子研三
 女子の体温調節機能の特徴に関する研究 (第I報) 高温及び低温環境に於ける体温調節反射の性的差異 **20**, 192-203
- 612.53-055.1/2 : 613.1
699 (1958) 益子研三
 女子の体温調節機能の特徴に関する研究 (第II報) 安静生活時の体温調節機能と季節変動の性的差異 **20**, 204-213
- 126.56 体温**
- 612.563 : 612.59
700 (1944) 堀 三造
 人体皮膚温変動の部位的差異に関する研究 **9**, 1-16
- 612.563 : 612.592
701 (1944) 新田初雄
 人体耳翼皮膚温の冷却に対する反応に就いて **9**, 427-432
- 612.563 : 612.79
702 (1952) 吉村寿人・福田正弘・大島公明・井上太郎
 人体皮膚温分布測定に就いて **14**, 517-524
- 612.56 : [612.79 : 612.014.47
703 (1954) 植木俊次
 体部皮膚圧迫と体温に就いての再検討 **16**, 97-103
- 612.563 : 612.014.47
704 (1950) 桜井達男
 軀幹体側部圧迫の皮温変動について **12**, 44-48
- 612.563 : 612.215.3
705 (1951) 松永千秋
 肺温の研究 **13**, 313-318
- 612.57 熱病, 異常発熱**
- 612.57 : 576.851.49] : 612.45
706 (1956) 向島 迪
 チフスワクテン発熱と副腎 **18**, 780-783
- 612.59 暑熱及び寒冷が生体に及ぼす作用**
- 612.59 : 612.55
707 (1958) 吉村寿人・大柴 進・宇佐美駿一・益子研三・山田敏男
 環境気温と体熱産生 **20**, 1015-1023
- 612.592 : [612.2 + .221
708 (1941) 藤本富太郎
 寒冷の生体に及ぼす影響に就いて (1) 家兎の身体冷却によって起る呼吸並びに瓦斯代謝の変化に就いて **6**, 396-409
- 612.592 : [612.14 + .172
709 (1941) 藤本富太郎
 寒冷の生体に及ぼす影響に就いて (2) 家兎並びに猫の身体冷却によって起る心搏数, 血圧及び心臓分時容量の変化に就いて **6**, 410-422

- 612.592:612.11
710 (1942) 藤本富太郎
 寒冷の生体に及ぼす影響に就いて (3) 家兎の身体冷却によって起る血液性状の変化に就いて **7**, 117-126
- 612.592:612.116.2:612.51
711 (1942) 藤本富太郎
 寒冷の生体に及ぼす影響に就いて (4) 急性に大量出血せし家兎を冷却する時の体熱産生に就いて **7**, 127-136
- 612.592:[612.563+612.79-086
712 (1942) 奥田 宣
 凍傷に関する研究 (第1報) 指趾の冷却に依る其容積, 皮膚温並びに皮膚顕微鏡の所見の変化 **7**, 505-516
- 612.592:[612.79:612.014.46
713 (1954) 長谷川 弘・坂西昭夫
 高温環境における 兎の体温に対する皮膚圧迫の影響 **16**, 640-642
- 612.6 生殖, 發育, 年令, 老衰**
- 612.61 男性生殖器**
- 612.616:612.744.11
714 (1936) 賀川竜夫
 睪丸の乳酸静止価及び乳酸生成について **1**, 42-51
- 612.62 女性生殖器**
- 612.62-083:612.621.9
715 (1941) 原 昊
 腹窓法による家兎性器の研究 (第1編) 家兎に於ける排卵の状況並びにその前後の卵巢所見 **6**, 599-609
- 612.62-083:612.627
716 (1941) 原 昊
 腹窓法による家兎性器の研究 (第2編) 正常時及び排卵前後の卵管運動 **6**, 610-620
- 612.62-083:612.621.31
717 (1943) 原 昊
 腹窓法による家兎性器の研究 (第3編) 去勢家兎の卵管及び子宮運動並びに之に対する Ovahormon の影響 **8**, 92-102
- 612.621:[612.63.01:612.46]:599.325
718 (1941) 山本晃朝
 妊婦尿注射時の家兎卵巢の観察 **6**, 621-637
- 612.621.9-083:599.325
719 (1942) 山本晃朝
 家兎の人工的排卵に関する小実験 **7**, 680-685
- 612.627-083:599.324
720 (1939) 木野勢新次郎
 兎卵管の正常運動 **4**, 199-211
- 612.627-08:599.325
721 (1942) 倉品克一郎
 子宮の運動に関する研究 (腹窓法並びに活動写真による) **7**, 263-271
- 612.627-083:612.63.01/2:599.325
722 (1942) 倉品克一郎
 子宮の運動に関する研究 (第2報) 妊娠, 分娩, 並びに産褥期に於ける子宮の運動 (腹窓法並びに活動写真による) **7**, 745-755
- 612.627:[612.63.01:612.46]:599.325
723 (1942) 山本晃朝
 妊婦尿注射時の家兎卵管運動の観察 **7**, 667-674
- 612.63 受精, 妊娠, 出産**
- 612.63:612.461:[612.616:597.82
724 (1950) 高中聡昭
 雄蛙排精現象による妊娠尿 Gonadotropin の定量 **12**, 162-167
- 612.63.01:612.129
725 (1951) 高中聡昭
 妊婦血清中 Chorionic gonadotropin 濃度に就いて **13**, 332-336
- 612.65 生後の發育**
- 612.65:612.741.9
726 (1950) 近藤寿郎
 發育時に於ける筋纖維構造の変化 **12**, 1-4
- 612.66 各種生理現象に対する年令の影響**
- 612.66-053.5
727 (1939) 江田得一
 Rohrer 指数と身長との間の関係 **4**, 379-389
- 612.67 更年期, 老衰, 死**
- 612.67:612.014.461:[612.111.1/.2
728 (1941) 鈴木 勝
 家兎に経口的に水を投与した場合の死因に就いて (経口的な水投与家兎に於ける赤血球数, 血色素量並びに経口的な空気投与実験) **6**, 686-700

612.7 運動, 声, 皮膚

612.73 平滑筋

- 612.73:612.743:612.014.462.4
729 (1953) 正井章一
 平滑筋の負傷電位に及ぼすアルカリ金属イオン並びにアルカリ土金属イオンの影響 **15**, 129-132
- 612.731.6:594
730 (1942) 新井祐太郎
 二枚貝閉殻筋の研究 **7**, 145-166
- 612.731.6
731 (1942) 大谷卓造・高木作治
 平滑筋に於ける陽極性抑制作用と不応期との関係 **7**, 286-292
- 612.467.1:612.731.6
732 (1944) 大谷卓造
 輸尿管に於ける忍込現象の研究 **9**, 755-765
- 612.731.6:612.014.462.4
733 (1953) 正井章一
 平滑筋の被刺激性に及ぼす諸種イオンの影響 **15**, 120-128

612.74 横紋筋

612.741 筋の収縮

- 612.741.1
734 (1941) 片山正紀・佐藤正彦
 週期的興奮に関する研究 (1) Ringer液成分の組成を変えた場合に起る自発的週期興奮に就いて **6**, 478-492
- 612.741.1
735 (1941) 佐藤正彦
 週期的興奮に関する研究 (第2報) 諸種薬品に基づく週期的興奮の比較 **6**, 493-509
- 612.741.1
736 (1941) 片山正紀
 週期的興奮発現に関する研究 (第3報) 週期的興奮発現の分析的研究 **6**, 510-525
- 612.741.1
737 (1953) 中島 猛
 筋の伝導性及び非伝導性収縮について **15**, 203-213
- 612.741.1
738 (1953) 後藤鹿島・斎藤定雄
 伝播性短縮と非伝播性短縮について **15**, 585-598
- 612.741.1
739 (1958) 清原迪夫
 振顫と硬直の筋電図学的研究 (Parkinson症候群を中心とした考察) **20**, 262-279

612.741.1-08

- 740** (1954) 山田芳夫
 ロッシェル塩を用いての筋収縮における張力発生経過の研究 **16**, 343-353
- 612.741.1-083
741 (1943) 佐竹結夫
 単一骨格筋線維に於ける攀縮の加重並びに持続性短縮に関する研究 **8**, 103-120
- 612.741.1-083
742 (1953) 平岩一也・竹谷政雄
 筋電図による屈筋反射曲線の分析補遺 **15**, 389-391
- 612.741.1:612.014.469
743 (1940) 手塚 玄
 筋短縮機構に就いての研究 (6) 諸種の実験液中に於ける単一筋線維の興奮性の消長に就いて **5**, 335-339
- 612.741.1:612.014.469
744 (1940) 町田憲二
 筋短縮機構に就いての研究 (7) 類Ringer液及び2, 3 薬液中の横紋筋の伸びに於ける等質部及び不等質部の巾の変化 **5**, 340-347
- 612.741.1:612.172
745 (1940) 青木哲四郎
 筋短縮機構に就いての研究 (8) 心房筋の短縮時の等質部及び不等質部の変化 **5**, 348-355
- 612.741.1:612.741.4/5
746 (1940) 名取礼二
 筋短縮機構に就いての研究 (9) 単一筋線維の粘弾機構に就いて **5**, 356-364
- 612.741.1:612.172.6
747 (1941) 青木哲四郎
 筋短縮機構に就いての研究 (10) 心房筋の粘弾機構に就いて **6**, 342-344
- 612.741.1:612.741.9:612.014.43
748 (1941) 森下完一
 筋短縮機構に就いての研究 (11) 等質部及び不等質部の温度による変化 **6**, 345-347
- 612.741.1:612.741.9
749 (1941) 町田憲二
 筋短縮機構に就いての研究 (13) Hensensche Scheibeの研究 (1) **6**, 363-368
- 612.741.1:612.746
750 (1941) 森下完一
 筋短縮機構に就いての研究 (14) 破傷風短縮筋に就いての研究 (1) **6**, 369-374

- 612.741.1 : 612.746
751 (1941) 森下完一
筋短縮機構に就いての研究 (15) 破傷風強縮筋に就いての研究 (2) **6**, 375-377
- 612.741.1 : 612.745.1
752 (1941) 樫井道仁
筋短縮機構に就いての研究 (16) 骨格筋短縮後に観られる所謂 Potentiation に就いての研究 (1) **6**, 378-384
- 612.741.1 : 612.741.4/5
753 (1941) 土橋英夫
筋短縮機構に就いての研究 (17) 後伸展に就いての研究 (1) **6**, 566-569
- 612.741.1 : 612.741.4/5
754 (1941) 手塚 玄
筋短縮機構に就いての研究 (18) 後伸展に就いての研究 (2) **6**, 570-574
- 612.741.1
755 (1941) 美甘 守
筋短縮機構に就いての研究 (19) 骨格筋短縮度に就いて (1) **6**, 575-578
- 612.741.1 : 612.014.43
756 (1941) 町田憲二
筋短縮機構に就いての研究 (20) 横紋筋の温縮縮に関する研究 (1) **6**, 579-585
- 612.741.1 : 612.745.1
757 (1941) 樫井道仁
筋短縮機構に就いての研究 (21) 骨格筋強縮後に観られる所謂 Potentiation に就いての研究 (2) **6**, 592-598
- 612.741.1 : 612.741.4/5
758 (1942) 樫井道仁
筋短縮機構に就いての研究 (22) 収縮残遺に就いての研究 (1) **6**, 586-591
- 612.741.1 : 612.741.4/5
759 (1941) 樫井道仁
筋短縮機構に就いての研究 (22) 伸展残遺の研究 (1) **7**, 418-423
- 612.741.1 : 612.741.4/5
760 (1942) 美甘 守
筋短縮機構に就いての研究 (23) 骨格筋の短縮率に関する研究 (2) **7**, 424-426
- 612.741.1
761 (1942) 高橋忠幸
筋短縮機構に就いての研究 (25) 単一筋線維に於ける局所収縮の研究 (1) **7**, 655-658
- 612.741.1 : 612.014.469
762 (1942) 高橋忠幸
筋短縮機構に就いての研究 (26) 塩酸Chinin作用下に観られる筋実質の収縮様運動の高速度顕微鏡撮影による研究 **7**, 659-662
- 612.741.1 : 612.741.4/5
763 (1942) 仁木庸次郎
筋短縮機構に就いての研究 (27) 骨格筋伸展残遺の研究 (2) **7**, 663-666
- 612.741.1 : 612.741.9
764 (1943) 名取礼二・川上正義
筋短縮機構に就いての研究 (28) 骨格筋の線膨脹係数に就いて **8**, 67-75
- 612.741.1 : 612.741.9
765 (1943) 秋元新平
筋短縮機構に就いての研究 (29) 骨格筋の複屈折性に就いての研究 (1) **8**, 76-87
- 612.741.1
766 (1943) 湯田勝年
筋短縮機構に就いての研究 (30) 単一筋線維に於ける局所収縮に就いての研究 (2) **8**, 88-91
- 612.741.1
767 (1943) 大野真一
筋短縮機構に就いての研究 (31) 骨格筋線維の二色性に関する研究 (其の1) **8**, 389-393
- 612.741.1 : 612.741.4
768 (1943) 仁木庸次郎
筋短縮機構に就いての研究 (32) 骨格筋伸展残遺の研究 (3) **8**, 394-413
- 612.741.1 : 612.741.4
769 (1943) 仁木庸次郎
筋短縮機構に就いての研究 (33) 骨格筋伸展残遺の研究 (33) 骨格筋伸展残遺の研究 (4) **8**, 414-419
- 612.741.1 : 612.741.4
770 (1943) 仁木庸次郎
筋短縮機構に就いての研究 (34) 骨格筋伸展残遺の研究 (5) **8**, 420-426
- 612.741.1 : 612.741.9
771 (1943) 美甘 守
筋短縮機構に就いての研究 (35) 骨格筋の短縮に於ける等質部不等質部短縮配分の研究 **8**, 427-439
- 612.741.1 : 612.748.5
772 (1943) 保田止郎
筋短縮機構に就いての研究 (36) 饑餓時の筋の緊張に就いて (1) **8**, 440-445

- 612.741.1 : 612.741.4
773 (1943) 名取礼二・川上正義
筋短縮機構に就いての研究 (37) 骨格筋の線膨脹係
数に就いて (2) **8**, 453-460
- 612.741.1 : 612.741.4/.5
774 (1944) 土橋義雄
筋短縮機構に就いての研究 (39) 筋線維の剛性率に
就いて (1) **9**, 42-47
- 612.741.1 : 612.741.4/.5
775 (1944) 秋元新平
筋短縮機構に就いての研究 (40) 等張性及び等尺性
強縮に於ける複屈折度の異同に就いて **9**, 48-54
- 612.741.1 : 612.741.4
776 (1944) 大野真一
筋短縮機構に就いての研究 (41) 振りによる骨格筋
粘弾機構の研究 **9**, 113-116
- 612.741.1 : 612.741.9
777 (1944) 大野真一
筋短縮機構に就いての研究 (42) 振りによる筋線維
複屈折度の変化 **9**, 117-120
- 612.741.1 : 612.741.4/.5
778 (1944) 保田止郎
筋短縮機構に就いての研究 (43) 骨格筋伸展残遺の
研究 (6) **9**, 121-127
- 612.741.1 : 612.741.9
779 (1944) 伊藤正徳
筋短縮機構に就いての研究 (44) 筋線維の太さと横
紋構造に就いて **9**, 128-133
- 612.741.1 : 612.172] : 612.741.9
780 (1944) 秋元新平
筋短縮機構に就いての研究 (45) 心房筋活動時の複
屈折度の変化に就いて **9**, 134-138
- 612.741.1 : 612.172] : 612.014.469
781 (1944) 古川 誠
筋短縮機構に就いての研究 (46) 心筋に対する塩酸
Chinin の作用に就いて **9**, 139-143
- 612.741.1 : 612.741.4/.5
782 (1944) 島崎 賢
筋短縮機構に就いての研究 (47) 等尺性強縮を前行
せしめるか 否かによる後行する等張性強縮時の粘
弾機構の異同 (1) **9**, 237-243
- 612.741.1 : 612.014.424
783 (1943) 佐竹結実
等圧又は等流に依る骨格筋の電氣的刺激 **8**, 168-
173
- 612.741.1
784 (1944) 古賀彦次郎
光力学的作用に関する研究 (第3報) 骨格筋に就い
ての研究 **9**, 826-832
- 612.741.1 : [612.12 + 612.014.462.5
785 (1944) 古賀彦次郎
光力学的作用に関する研究 (第4報) 血清及び膠質
の影響 **9**, 879-885
- 612.741.1-083 : 612.014.469
786 (1944) 清原寛一・橋田菽綱
光力学的作用に関する研究 (第5報) 剔出単一筋線
維に就いての実験 特に Rose bengale の種々の濃
度及び興奮性の変化に就いて **9**, 83-90
- 612.741.1-08 : 612.335
787 (1944) 清原寛一・橋田菽綱
光力学的作用に関する研究 (第6報) 剔出単一骨格
筋線維に就いて 血清の抑制作用並びに組織学的及
び光学的研究 **9**, 335-340
- 612.741.1-083 : [612.117/8 + 612.12
788 (1944) 清原寛一・橋田菽綱
光力学的作用に関する研究 (第7報) 平滑筋 (小腸)
に就いての実験 **9**, 511-517
- 612.741.1 : 591.134 : 391.34 : 612.118
789 (1944) 浦部小次郎・橋田菽綱
光力学的作用に関する研究 (第8報) 蝌蚪に就いて
の成長, 致死時間並びに血清に就いて **9**, 518-523
- 612.741.1 : 612.124
790 (1944) 芦塚 陽・古賀彦次郎
光力学的作用に関する研究 (第9報) 蛙心の反応に
対する血清 Globulin 及び血清 Albumin の作用 **9**,
886-888
- 612.741.1 : 612.744.15
791 (1948) 野間全治
光力学的作用に関する研究 補遺 (第14報) 分離骨
格筋線維に於ける 光力学的作用と疲労乳酸及び磷
酸 Acetylcholin 及び Adrenalin との関係 **10**, 41
-46
- 612.741.1 : 612.744.15
792 (1948) 野間全治
光力学的作用に関する研究 補遺 (第15報) 分離骨
格筋線維に於ける 光力学的作用と物理化学的条件
との関係 **10**, 133-139
- 612.741.1 : 612.014.424
793 (1948) 吉川俊夫
電氣刺激強まり要素と電氣診断的攣縮法則 **10**, 23
-31

- 612.741.1:612.014.469
794 (1951) 山形寿郎
 骨筋に対する Veratrin の作用に就いて **13**, 132-139
- 612.741.1:612.743
795 (1952) 高橋 恵
 細孔電極(坂本)により単一筋線維の興奮発生部位から誘導した活動電位について **14**, 41-49
- 612.741.1:612.825:612.014.424
796 (1952) 林 譚・小田 満・林 雅男
 大脳皮質刺激電流の強さと強縮運動の波及との関係 **14**, 56-59
- 612.741.1:612.014.424
797 (1952) 根本喜久夫
 漸増電流刺激に依る単一骨筋線維の短縮に就いて **14**, 92-97
- 612.741.1:612.79:612.014.47
798 (1953) 長谷川 渙・倉島昭示
 皮膚圧迫の筋緊張に及ぼす影響(第3報) 人の上肢筋及び頸筋に及ぼす影響 **15**, 25-30
- 612.741.1:612.79:612.014.47
799 (1953) 長谷川 渙・山崎恒雄・岡井一雄
 皮膚圧迫の筋緊張に及ぼす影響(第4報) 人の下肢筋に及ぼす影響 **15**, 397-401
- 612.741.1:612.795
800 (1953) 長谷川 渙・倉島昭示・佐藤素一
 皮膚刺激の筋活動及び“ふるえ”に及ぼす影響 **15**, 31-37
- 612.741.1:612.014.424:612.743
801 (1954) 橋野昇一
 家兎電撃痙攣の筋電図学的研究(第1編) 全身痙攣の発現様式について **16**, 437-444
- 612.741.1:612.014.424:612.743
802 (1954) 橋野昇一
 家兎電撃痙攣の筋電図学的研究(第2編) 痙攣前期筋電図との比較 **16**, 445-449
- 612.741.1:612.014.424:612.743
803 (1954) 橋野昇一
 家兎電撃痙攣の筋電図学的研究(第3編) 間代性痙攣 **16**, 450-453
- 612.741.1:612.014.469
804 (1954) 谷 道也
 Glutamin 酸 Na 及び Asparagin 酸 Na の頸動脈注射による痙攣について **16**, 685-687
- 612.741.1:612.014.424:612.014.462
805 (1954) 浜中健夫
 筋攣縮に対する直流通流第3作用と各種環境条件変化のそれに及ぼす影響 **16**, 688-696
- 612.741.1:612.766.1
806 (1955) 巷岡 務
 いわゆる筋疲労に際して現われる諸種の収縮の観察 **17**, 700-710
- 612.741.1:612.282/3
807 (1956) 堀内 冷
 骨筋活動に対する呼吸中枢の影響 **18**, 454-458
- 612.741.1:612.014.465]:576.8.097.3
808 (1956) 本田定一・高雄幸一郎・岡本歌子・岡本彰祐
 ウサギのカルデアゾール痙攣に伴う血液補体作用の一過性の低下 **18**, 845-848
- 612.741.1:612.834:615.778.56
809 (1957) 東田昭二
 前角ノイロンの同期性放電に関する研究(1) 筋同期放電の筋電図学的研究(電気麻酔及びクレゾール痙攣) **19**, 582-588
- 612.741.1:612.838.8:612.833.941:615.778.86
810 (1957) 東田昭二
 前角ノイロンの同期性放電に関する研究(2) 筋同期放電出現時の脊髄反射機能(電気麻酔及びカテコール, クレゾール痙攣) **19**, 589-597
- 612.741.1:612.014.469
811 (1957) 三田昭太郎
 クレゾール痙攣の機制 **19**, 918-925
- 612.741.1:612.833.9:612.827
812 (1957) 清水 孝
 反射性交代性痙攣に対する小脳の働きについて **19**, 986-993
- 612.741.1:615.361.37
813 (1958) 天野一忠
 Insulin 痙攣の神経生理学的研究 **20**, 41-49
- 612.741.1:615.361.37]:612.822-83
814 (1958) 末広力雄・加太呷一郎
 中枢神経系縦断による Insulin 痙攣の変化に就いて **20**, 50-51
- 612.741.1:612.014.469
815 (1958) 長島雄三郎
 実験的糖痙攣について **20**, 52-62

- 612.741.1:612.014.469:612.825.2
816 (1958) 長島雄三郎・横山泰和・天野 恵
 頸動脈注射による糖痙攣と大脳皮質との関係 **20**,
 63-65
- 612.741.1:612.014.469
817 (1948) 永井甲子四郎・小島吉治
 各種糖溶液の髄液内注入に依る痙攣に就いて **20**,
 66-69
- 612.741.1:615.361.37
818 (1958) 小島吉治・永井一夫
 Insulin の髄液内注入に依る痙攣に就いて **20**, 70-
 72
- 612.741.1-083:612.014.424.2
819 (1950) 木村一雄
 通電による 筋線維の短縮性の持続及び回復並びに
 短縮の大きさの変化に関する研究 **12**, 91-102
- 612.741.1-083:612.014.469
820 (1951) 足立千鶴子
 筋注法及び神経注法による骨格筋の収縮について
13, 123-125
- 612.741.1-083:612.014.47
821 (1951) 川田深太郎・山形寿郎
 骨格筋繊維の伸展による短縮性の変化に就いて **13**,
 143-145
- 612.741.1-083:612.014.424
822 (1952) 川田深太郎
 通電による骨格筋線維の短縮性の回復について **14**,
 24-32
- 612.741.14:612.744.2
823 (1937) 菅原頼悌
 特異性筋隆起に就いての研究 (1) 特異性筋隆起の
 生起及び勢力消費に就いて **2**, 127-133
- 612.741.14:612.743
824 (1937) 菅原頼悌
 特異性筋隆起に就いての研究 (2) 静止電圧の発生
 に就いて **2**, 156-157
- 612.741.14:612.014.465:612.745.1
825 (1938) 西谷喜助・高橋達弥
 特異性筋隆起に就いての研究 (3) 麻酔筋に於ける
 特異性筋隆起の生起と其勢力消費に就いて **3**, 293
 -296
- 612.741.14:612.014.465:612.745.1
826 (1939) 高橋忠幸
 特異性筋隆起に就いての研究 (4) 麻酔せる縫工
 筋に於ける 特異性筋隆起の生起及び其勢力消費に
 ついて **4**, 183-188
- 612.741.14:[612.741.3+.9
827 (1941) 名取礼二
 特異性筋隆起に就いての研究 (5) 筋隆起部の興奮
 伝導性並びに筋隆起の組織像に就いて **6**, 16-24
- 612.741.14:612.741.15
828 (1941) 広瀬甚五
 特異性筋隆起に就いての研究 (7) 特異性筋隆起の
 発生機構に及ぼす諸薬液の影響に就いて **6**, 25-31
- 612.741.14
829 (1941) 大村 正
 特異性筋隆起に就いての研究 (8) 諸種条件下に於
 ける特異性筋隆起の起り方に就いて **6**, 32-41
- 612.741.14
830 (1941) 大村 正
 特異性筋隆起に就いての研究 (9) 諸種の条件下に
 於ける特異性筋隆起の起り方に就いて **6**, 42-48
- 612.741.14:612.014.43
831 (1941) 手塚 玄
 特異性筋隆起に就いての研究 (10) 特異性筋隆起に
 及ぼす温度の影響に就いて (1) **6**, 353-357
- 612.741.14:612.014.43
832 (1941) 手塚 玄
 特異性筋隆起に就いての研究 (11) 特異性筋隆起に
 及ぼす温度の影響に就いて (2) **6**, 348-352
- 612.741.14:612.744.21
833 (1941) 土橋英夫
 特異性筋隆起の研究 (12) 原位筋及び疲労筋に於け
 る特異性筋隆起に就いて **6**, 358-362
- 612.741.14
834 (1943) 和田恵州男
 特異性筋隆起に就いての研究 (13) 特異性筋隆起の
 生起条件に就いて **8**, 446-452
- 612.741.14:612.813.3
835 (1944) 和田恵州男
 特異性筋隆起に就いての研究 (14) 特異性筋隆起の
 電気緊張に就いて **9**, 17-20
- 612.741.14
836 (1944) 和田恵州男
 特異性筋隆起に就いての研究 (15) 種々の骨格筋に
 於ける特異性筋隆起に就いての研究 **9**, 21-30
- 612.741.14
837 (1944) 和田恵州男
 特異性筋隆起に就いての研究 (16) 強縮時の特異性
 筋隆起に就いて **9**, 31-35

- 612.741.14 : 612.744.2
838 (1944) 阿部祐吉
 特異性筋隆起に就いての研究 (17) 特異性筋隆起時の化学過程に就いて **9**, 36-41
- 612.741.15
839 (1941) 河村虎太郎
 骨格筋のAcetylcholin痙縮に関する研究 (その1) **6**, 316-323
- 612.741.15
840 (1941) 河村虎太郎
 骨格筋のAcetylcholin痙縮に関する研究 (その2) **6**, 324-333
- 612.741.15
841 (1954) 斎藤定雄・正田豊作
 NaSCN 溶液中に於ける骨格筋線維の短縮に就いて **16**, 490-492
- 612.741.15
842 (1956) 後藤鹿島
 骨格筋線維の短縮状態と各種イオンの関係 **18**, 123-130
- 612.741.15
843 (1956) 牟田信大
 諸種無機 Na 塩溶液に於ける塩縮に就いて **18**, 459-462
- 612.741.15
844 (1957) 高木 喬
 骨格筋のアセチルコリン痙縮に対する NH_4 イオンの作用 **19**, 81-92
- 612.741.15-083
845 (1955) 林 浩平
 筋原線維の ATP 短縮の抑制因子の研究 **17**, 790-797
- 612.741.15 : 612.392.62
846 (1948) 福田篤郎・小林 丘
 人体筋活動時に於けるカリウムの動き **10**, 190-194
- 612.741.15 : 612.014.424
847 (1952) 後藤鹿島・佐藤進一
 電気的刺激による 骨格筋線維に対する麻酔薬の作用機序に関する研究 **14**, 427-431
- 612.741.15 : 612.833.95
848 (1957) 石田絢子・渡辺紋郎
 ストリキニン痙攣のリズムについて **19**, 113-120
- 612.741.15-083
849 (1958) 古江生子
 グリセロール処理筋の アデノシン三磷酸短縮とアンモニア生成 **20**, 287-295
- 612.741.4/.5
850 (1949) 酒井敏夫
 筋鞘の粘弾性について (1) **11**, 246-248
- 612.741.4/.5
851 (1949) 篠原 進・石若大三
 筋鞘の粘弾性について (2) **11**, 266-269
- 612.741.6
852 (1944) 鈴木正夫・佐藤寛之
 隔絶電極に於ける刺激に就いて **9**, 798-808
- 612.741.6-083 : 612.014.424 : 612.766.1
853 (1940) 巨田泰信
 筋線維内に於ける 興奮の伝導と所謂疲労に就いて (単一筋線維及び全筋による実験) **5**, 14-20
- 612.741.6-083
854 (1940) 巨田泰信
 極性興奮に就いて (単一筋線維及び全筋による実験) **5**, 260-265
- 612.741.62/3 : 612.014.462.4
855 (1942) 石井恒夫
 蛙縫匠筋の電流刺激に於ける 強まり要素に対するイオンの影響 **7**, 1-21
- 612.741.62
856 (1943) 野村志郎
 緊張筋及び非緊張筋に於ける 強まり要素に就いて **8**, 121-147
- 612.741.6 : 612.014.462.4
857 (1949) 猪俣 広
 蛙筋の強まり要素に対する イオン作用の知見補遺及び通流電極作用とイオン作用との拮抗 **11**, 169-175
- 612.741.6 : 612.014.424
858 (1950) 杉浦正輝
 骨格筋の“直接刺戟”に於ける電流方向の影響 (第1報) 蛙縫匠筋の電気的興奮性について **12**, 34-37
- 612.741.6 : 612.014.424
859 (1950) 杉浦正輝
 骨格筋の“直接刺戟”に於ける電流方向の影響 (第2報) 真の直接刺戟の効果について **12**, 38-43
- 612.741.6 : 612.818.9
860 (1957) 正宗幹夫
 ウサギの 経皮筋刺激における傾き要素 および時間要素の研究 神経切除によるその変化について **19**, 519-526
- 612.741.6 + 612.816] : 612.014.424
861 (1958) 山川晋吾
 人体神経, 筋の反復刺激閾値と通流作用 **20**, 181-191

- 612.741.62
862 (1944) 鈴木正夫・石井恒夫
 蛙筋隔絶刺激に於ける強さ要素及び強まり要素のイオンによる変化に就いて **9**, 573-583
- 612.741.63
863 (1944) 佐藤寛之
 隔絶刺激に於ける強まり要素に就いて **9**, 862-872
- 612.741.7
864 (1936) 林 水源
 筋攣縮潜伏期測定について **1**, 251-257
- 612.741.7
865 (1937) 佐々木四郎
 筋の潜刺激時(第2報) **2**, 187-195
- 612.741.7
866 (1938) 竹内 剛
 筋の潜刺激時(第3報) **3**, 412-418
- 612.741.7:612.816.3:612.014.465
867 (1944) 竹内 剛
 筋の潜刺激時に就いて(第4報) 果して麻醉薬により神経の伝導速度は減ずるか? **9**, 175-180
- 612.741.9:612.746
868 (1940) 木沢 和
 横紋筋の短縮に於ける等質部及び不等質部の機構に就いて(1) 痙縮時の等質部及び不等質部の数量的変化 **5**, 55-62
- 612.741.9:612.741+.746
869 (1940) 山口重方・高橋忠幸
 横紋筋の短縮に於ける等質部及び不等質部の機構に就いて(2) 高速度顕微鏡活動写真に依る単一筋線維の攣縮, 強縮及び痙縮の研究 **5**, 63-69
- 612.741.9:612.746
870 (1940) 木沢 和
 横紋筋の短縮に於ける等質部及び不等質部の機構に就いて(3) 痙縮時に於ける等質部及び不等質部の形態的变化 **5**, 70-75
- 612.741.9:612.741.4/.5
871 (1940) 山口重方
 横紋筋の短縮に於ける等質部及び不等質部の機構に就いて(4) 単一筋線維の粘弾性に就いての研究 **5**, 266-273
- 612.741.9:612.014.469
872 (1940) 山口重方
 横紋筋の短縮に於ける等質部及び不等質部の機構の研究(4) 塩酸 Chinin 作用下に於ける等質部及び不等質部の変化 **5**, 326-329
- 612.741.9-088.7
873 (1956) 菅原 努
 筋肉のX線回折的研究(第1報) 方法論及び乾燥過程に於ける回折図の変化に就いて **18**, 353-357
- 612.741.9-088.7
874 (1956) 菅原 努
 筋肉のX線回折的研究(第2報) 種々の状態に於ける筋の回折図 **18**, 358-362
- 612.741.9-088.7
875 (1956) 菅原 努
 筋肉のX線回折的研究(第3報) Actomyosin ゲルのX線回折図 **18**, 363-365
- 612.741.9-088.7
876 (1956) 菅原 努
 筋肉のX線回折的研究(第4報) 凍結筋の回折図 **18**, 366-369
- 612.741.9-083
877 (1950) 大武八郎
 遠心分離法による単一筋線維の微細構造の研究(I) **12**, 26-29
- 612.741.9-083
878 (1950) 大武八郎
 遠心分離法による単一筋線維の微細構造の研究(II) **12**, 30-33
- 612.741.9:612.014.43
879 (1950) 大武八郎
 等張性持続収縮の複屈折度に及ぼす温度の影響 **12**, 23-25
- 612.741.9
880 (1950) 大武八郎
 横紋筋の持続性収縮時に於ける横紋像並びに複屈折度の変化 **12**, 19-22
- 612.741.9:612.014.469
881 (1949) 杉山盛枝・鈴木正夫
 骨格筋の緊張繊維, 非緊張繊維に関する研究(第1編) 薬理学的分析による両種筋線維の収縮 **11**, 145-150
- 612.741.9
882 (1949) 杉山盛枝
 骨格筋の緊張繊維, 非緊張繊維に関する研究(第2編) 筋の収縮機能と支え機能との筋力学的解析の一方法 **11**, 151-158
- 612.743 筋の電氣的現象**
- 612.743
883 (1940) 名取礼二
 骨格筋の活動電圧に就いての研究 **5**, 330-334

- 612.743
884 (1940) 山中俊雄
 電気緊張に就いて **5**, 433-443
- 612.743
885 (1950) 江藤 喬
 骨格筋の変形電位に就いて **12**, 140-149
- 612.743
886 (1955) 斎藤一郎
 筋の同調放電に就いて (1) 同調放電の特徴 **17**, 810-815
- 612.743
887 (1957) 斎藤一郎
 筋の同調放電に就いて (2) 同調放電の発生機構 **19**, 500-505
- 612.743-083
888 (1953) 佐藤進一
 骨格筋の種々の状態に於ける Impedance の変化に就いて **15**, 577-584
- 612.743-083 : 612.014.424
889 (1940) 山極一三
 刺激としての働作電流 **5**, 1-13
- 612.743 : 612.627
890 (1952) 川田深太郎・町田都乎
 子宮筋の変形電位に就いて **14**, 33-34
- 612.743 : 612.014.462
891 (1954) 久保田 效
 骨格筋膜電位差の塩類効果と濃度効果 **16**, 752-765
- 612.743 : 612.014.424
892 (1958) 吉田良一
 ヒキガエルの頤舌筋の 2 種の骨格筋線維の電気生理学的研究 **20**, 129-142
- 612.743-08
893 (1958) 加藤 守
 線維性収縮に於ける活動単位インプルの分析 (立体視的隔壁内電位法) について **20**, 331-340
- 612.743 + 612.813
894 (1958) 村上元彦
 同心ペンシル型微小電極法による筋線維及び巨大神経線維の細胞内外活動電位波形の比較 **20**, 764-774
- 612.744 筋の化学**
- 612.744 : 612.741.6
895 (1953) 高木健太郎・太田三郎
 筋の化学受容器 **15**, 226-229
- 612.744-083
896 (1957) 岡本彰祐・岡本歌子・升沢郁二・古江生子・石田俊雄
 グリセリン抽出筋による ATP 分解とイノシン酸の生成 **19**, 892-896
- 612.744-083 : 612.014.469-963
897 (1958) 川嶋昭司
 心筋無核均等液による コハク酸 α 化のウレタン促進とその本態について **20**, 477-485
- 612.744.11 : [612.17 + .215.3 + .33 + .35 + .41 + .616 + .82
898 (1936) 賀川竜夫
 諸種の臓器及び組織の乳酸含有量について **1**, 73-78
- 612.744.11 + 612.822.2] : 612.816.1
899 (1936) 毛塚好忠
 神経及び筋の乳酸量についての研究 (9) 筋に対する神経よりの強直刺激の頻度と筋乳酸含有量との関係 **1**, 22-32
- 612.744.11 + 612.822.2] : 612.744.11-083
900 (1936) 毛塚好忠
 神経及び筋の乳酸量についての研究 (10) 骨格筋の窒素気中静止状態に於ける乳酸生成速度について **1**, 33-41
- 612.744.11 + 612.822.2] : 612.014.469
901 (1939) 飯野富雄
 神経及び筋に於ける乳酸量に就いての研究 (11) Veratrin 中毒筋に就いての研究 **4**, 321-327
- 612.744.13
902 (1958) 内田倅喜・高橋 宏・村中光治郎
 無機ピロリン酸による ATPase の賦活と阻害 **20**, 950-955
- 612.744.14 : 612.014.463
903 (1950) 近藤寿郎
 筋蛋白繊維の筋抽出液及び塩類溶液による影響 **12**, 5-9
- 612.744.14-083 : 612.741.4/.5
904 (1950) 近藤寿郎
 筋蛋白繊維の粘弾性について **12**, 10-13
- 612.744.14-083 : 612.014.43
905 (1950) 近藤寿郎
 筋蛋白繊維の熱短縮 **12**, 14-18
- 612.744.15
906 (1941) 広瀬甚吾
 Ringer 液に浸漬した骨格筋よりの乳酸の拡散に就いて **6**, 560-565

- 612.744.16
907 (1951) 本庄 保
 筋肉に於ける細胞内液と細胞外液 (第1報) Ringer
 液中に於ける筋の水腫 **13**, 273-282
- 612.744.16
908 (1951) 本庄 保
 筋肉に於ける細胞内液と細胞外液 (第2報) Ringer
 液浸漬筋のシボリ実験 **13**, 283-290
- 612.744.16
909 (1936) 小島信一
 骨格筋における磷原質についての研究 (1) 藁腓腹
 筋の磷原質含有量について **1**, 148-157
- 612.744.16 : 612.014.43
910 (1939) 黒田林三郎
 骨格筋に於ける磷原質に就いての研究 (2) 剔出藁
 骨格筋の磷原質に及ぼす温度の影響に就いて **3**,
 23-32
- 612.744.16 : 612.76
911 (1938) 黒田林三郎
 骨格筋に於ける磷原質に就いての研究 (3) 筋活動
 時に於ける磷原質に就いて **3**, 33-46
- 612.744.16 : 612.014.469
912 (1938) 石川 勲
 骨格筋に於ける磷原質の研究 (4) 負荷により機械
 的張力を受けつつある一沃度醋酸中毒筋の活動時
 の磷原質消費に就いて **3**, 363-368
- 612.744.16 : 612.014.469
913 (1940) 石川 勲
 骨格筋に於ける磷原質の研究 (5) 負荷により機械
 的張力を受けつつある一沃度醋酸中毒筋の活動時
 の磷原質消費に就いて (2) **5**, 21-31
- 612.744.16-083 : 612.274
914 (1941) 石川 勲
 骨格筋に於ける磷原質の研究 (6) 一沃度醋酸中毒
 骨格筋の高気圧下の活動時の磷原質の消費に就い
 て **6**, 229-232
- 612.744.16 : 612.741.1
915 (1944) 阿部祐吉
 骨格筋に於ける磷原質の研究 (7) 筋攣縮頻度と磷
 原質消費との関係 **9**, 300-304
- 612.744.16
916 (1944) 阿部祐吉
 骨格筋に於ける磷原質の研究 (8) 藁烏橈筋の磷原
 質に就いて **9**, 305-311
- 612.744.16 : 612.014.462.4
917 (1949) 若栗 清
 骨格筋の陰イオン透過性と体液量測定に就いて **11**,
 159-163
- 612.744.2
918 (1944) 朝井 清
 筋糖原質に就いての研究 (1) 原位筋疲労後に於け
 る糖原質の恢復過程 **9**, 524-530
- 612.744.2
919 (1944) 朝井 清
 筋糖原質に就いての研究 (2) 烏喙橈筋に於ける糖
 原質量の消長 **9**, 531-535
- 612.744.2 : 612.748-083
920 (1944) 朝井 清
 筋糖原質に就いての研究 (3) 支配神経切断後の骨
 格筋糖原質量の消長 **9**, 536-539
- 612.744.2
921 (1951) 林 謙・須田 勇・宮木高明・足立千鶴
 子・鬼頭京子
 骨格筋より抽出した筋収縮催起物質と抑制物質に
 就いて **13**, 434-437
- 612.744.2
922 (1951) 須田 勇・鬼頭京子・宮木高明・佐竹一夫
 骨格筋より抽出した筋収縮催起物質の化学的同一
13, 510-512
- 612.744.2
923 (1952) 川口国臣
 塩縮外液に筋より塩縮抑制物質に出る機制に関す
 る研究 **14**, 35-40
- 612.744.2
924 (1952) 須田 勇・足立千鶴子・牛山順司・鬼頭京
 子
 骨格筋より抽出した筋収縮催起物質 (抽出カルノシ
 ン) の作用部位について **14**, 386-387
- 612.744.2 : 612.015.3
925 (1949) 榑方早苗
 人体筋活動時に於けるクレアチン体代謝 **11**, 259-
 265
- 612.744.2-064
926 (1950) 西山信雄
 骨格筋の塩縮抑制物質に就いて **12**, 356-358
- 612.744.2-064
927 (1950) 菊地録二
 塩縮外液の塩縮抑制物質に就いて **12**, 359-361
- 612.744.2 : 541.24.08
928 (1954) 川島悦子
 塩縮抑制物質の透析及び Columnchromatogram に
 依る分子量の推定 **16**, 177-184

- 612.744.2 : 612.015.347
929 (1954) 川島悦子
 塩縮外液の全蛋白質量及び全 Amino 酸窒素量について **16**, 185-188
- 612.744.2 : 612.015.347 : 612.014.43
930 (1954) 川島悦子
 温度に依る 塩縮の有無と外液の全蛋白質量及び Amino 酸窒素量について **16**, 189-192
- 612.744.2/.21 : 612.014.424
931 (1956) 千葉正子
 間接刺戟による 蛙筋の疲労と其の塩縮との 関係に 就いて **18**, 481-483
- 612.744.2/.21 : 612.014.424.4
932 (1957) 千葉正子
 間接刺戟による 蛙筋の収縮と其外液の 塩縮抑制作用との 関係に就いて **19**, 498-499
- 612.744.2 : 612.014.463
933 (1957) 牟田信大
 塩縮外液の塩縮抑制作用と Ca 量との 関係に就いて **19**, 977-985
- 612.744.21 : 612.014.469
934 (1941) 上小鶴克巳
 極大疲労時に於ける乳酸量と其恢復に及ぼす CO₂ の影響 **6**, 535-543
- 612.744.21
935 (1941) 上小鶴克巳
 原位筋疲労時の蓄積乳酸の消却過程に 就いて **6**, 544-554
- 612.744.21 + 612.822.53
936 (1944) 吉井直三郎
 時間錯誤より見たる疲労の研究 (第1報) 筋作業及び精神作業後の脳疲労に就いて **9**, 793-797
- 612.744.21 : 612.014.424 : 612.014.43
937 (1951) 矢作善一郎
 Scheminzy 転換効果並びに直流通流及び温度の之に及ぼす影響 **13**, 163-174
- 612.744.21-08
938 (1952) 石河利寛
 筋作業の研究 I. 新作した腕エルゴメーター **14**, 487-489
- 612.744.21
939 (1952) 石河利寛
 筋作業の研究 II. 負荷と作業耐久時間との 関係 **14**, 490-493
- 612.744.21 : 612.015.3
940 (1952) 石河利寛
 筋作業の研究 III. 前腕屈曲運動の際のエネルギー代謝 **14**, 494-497
- 612.744.21 : 612.014.424
941 (1953) 信藤羊一
 疲労における電気刺激要素の変化 **15**, 464-475
- 612.744.21 : 612.816.6 : 612.014.421
942 (1956) 和合卯太郎
 直接刺激による 人体骨格筋の軽度の不随意疲労について人体の筋・神経の興奮性の研究 (第11報) **18**, 965-977
- 612.744.21-083
943 (1957) 高橋重丈
 血行のあるガマ骨格筋の伝達疲労 **19**, 304-313
- 612.744.21-083
944 (1957) 高橋重丈
 血行のあるガマ骨格筋の収縮疲労 **19**, 314-319
- 612.744.21 : 612.014.424
945 (1957) 清水貞男
 灌流囊骨格筋の疲労について (第1報) 各種刺激頻度並びに刺激時間の疲労曲線への影響について **19**, 355-363
- 612.744.21 : 612.014.469
946 (1957) 清水貞男
 灌流囊骨格筋の疲労について (第2報)
 1. 疲労に対する acetylcholine の効果
 2. 疲労に対する prostigmine の効果
 3. 疲労に対する KCl の影響
19, 364-375
- 612.744.24 : 612.014.424
947 (1944) 堀口正史
 筋乳酸に就いての研究 (17) 筋活動時に於ける乳酸生成と刺激頻度との 関係に就いて **9**, 291-295
- 612.744.24 : 612.741.1
948 (1944) 堀口正史
 筋乳酸に就いての研究 (18) 緊張筋の乳酸生成過程に就いて **9**, 296-299
- 612.745** 筋収縮が生体に及ぼす力学的・熱的作用
- 612.745.1 : 612.821.1
949 (1943) 土橋義雄
 体力に関する研究 (4) 単純反応時測定の基礎的条件に就いて **7**, 432-437

- 612.745.1 : 616.28-008.15-053.5
950 (1943) 鈴木泰助
 体力に関する研究 (5) 嚙唾児童の体位に就いて **8**, 204-226
- 612.745.1 : 612.763
951 (1943) 鈴木泰助
 体力に関する研究 (6) 女子武道家と勤労者の体力に関する比較研究 **8**, 227-240
- 612.745.1-053.5
952 (1942) 鈴木泰助・土橋義雄
 体力に就いての研究 (7) 入学考査法改正後の2カ年に於ける中等学校志願児童の体力の変化に就いて **7**, 639-646
- 612.745.1-053.5
953 (1942) 本土 晃
 体力に就いての研究 (8) 入学考査法改正後の3カ年に於ける中等学校志願児童の体力の変化に就いて **7**, 647-654
- 612.745.1 : 612.766.1 : 612.883
954 (1943) 神部勝之助
 体力に関する研究 (9) 疲労と重量知覚に就いて (1) **8**, 275-280
- 612.745.1 : 612.766.1 : 612.883
955 (1943) 名取礼二・土橋義雄・和田恵洲男・古川誠・阿部祐吉・日比敏行
 体力に関する研究 (10) 疲労と重量知覚に就いて (2) **8**, 281-287
- 612.745.1 : 612.833.7
956 (1943) 上岡文雄
 体力に関する研究 (11) 疲労度測定示標としての膝蓋腱反射刺激閾値に就いて **8**, 288-298
- 612.745.1 : 612.833.7
957 (1943) 仁木庸次郎・朝井 清・秋元新平・池上鋺十郎・佐々木謙三
 体力に関する研究 (12) 疲労計としての膝蓋腱反射閾値法に関する批判実験 **8**, 299-302
- 612.745.1 : 612.766.1 : 612.22
958 (1944) 蓮村省三・田中 稔
 体力に関する研究 (13) Radio 体操のガス代謝測定 **9**, 144-150
- 612.745.1 : 612.766.1 : 612.118.221.1
959 (1944) 蓮村省三・田中 稔
 体力に関する研究 (14) 作業前後に於ける赤血球沈降速度の変化に就いて **9**, 151-156
- 612.745.1 : 612.766.1 : 331.215
960 (1944) 蓮村省三・田中 稔
 体力に関する研究 (15) 賃金形態と作業強度とに関する産業生理学的研究 **9**, 157-162
- 612.745.1 : 612.766.1
961 (1944) 名取礼二・大村 正・川上正義・大野真一・堀口正史・関沢外史
 体力に関する研究 (16) 盛大疲労測定法の実用化に就いての研究 (2) **9**, 223-233
- 612.745.1 : 612.212
962 (1944) 古川 誠
 体力に関する研究 (17) 最大呼気圧と最大止息時に就いて (1) **9**, 244-248
- 612.745.1 : 612.833.7 : 613.1
963 (1944) 上岡文雄
 体力に関する研究 (18) 膝蓋腱反射の季節的変動 **9**, 596-604
- 612.745.1 : 612.833.7
964 (1944) 上岡文雄
 体力に関する研究 (19) 日常生活時並びに運動による膝蓋腱刺激閾の変動 **9**, 605-609
- 612.745.1 : 612.833.7
965 (1944) 上岡文雄
 体力に関する研究 (20) 災害頻発者と無災害者の作業時の膝蓋腱刺激閾の差異 **9**, 610-613
- 612.745.1 : 612.833.7 : 612.392.014B₁
966 (1944) 田中 稔
 体力に関する研究 (21) 作業時の膝蓋腱反射閾に及ぼす VitaminB₁ の影響 **9**, 614-618
- 612.745.1 : 612.763
967 (1944) 保田止郎
 体力に関する研究 (22) 游泳訓練の筋諸機構に及ぼす影響 **9**, 619-624
- 612.745.1 : 612.39-083
968 (1944) 保田止郎
 体力に関する研究 (23) 低栄養の筋諸機構に及ぼす影響 **9**, 625-630
- 612.745.1 : 612.833.7
969 (1944) 鈴木一雄
 体力に関する研究 (24) 疲労指標としての膝蓋腱反射時 (1) **9**, 813-817
- 612.745.1 : 612.833.7
970 (1944) 長村不二男・水野一雄
 体力に関する研究 (25) 疲労指標としての膝蓋腱反射時 (2) **9**, 818-820
- 612.745.1 : 612.883
971 (1944) 鈴木一雄
 体力に関する研究 (26) 触覚に依る同時空間覚の研究 (1) **9**, 821-825

- 612.745.1 : 612.881
972 (1948) 鈴木一雄
 体力に関する研究 (31) 触覚に依る同時空間覚の研究 (2) **10**, 50-52
- 612.745.1 : 612.881
973 (1948) 鈴木一雄
 体力に関する研究 (32) 触覚に依る同時空間覚の研究 (3) **10**, 53-56
- 612.745.1 : 612.821.1
974 (1948) 鈴木一雄
 体力に関する研究 (33) 反応時型の分類及びそれと性格, 気質との関係 **10**, 57-59
- 612.745.1 : 612.014.462.6
975 (1948) 井上 章
 筋的作業の持久力に関する研究 (其の1) 重筋的作業に伴う体の酸, 塩基平衡の崩壊と作業持続可能時間との関係 **10**, 76-81
- 612.745.1 : 612.014.464
976 (1948) 井上 章
 筋的作業の持久力に関する研究 (其の2) 重筋的作業に於ける酸素摂取状況と作業持続能力 **10**, 82-87
- 612.745.1
977 (1948) 井上 章
 筋的作業の持久力に関する研究 (其の3) 重筋的作業の持続限界時間と作業強度の関係 **10**, 117-122
- 612.745.1
978 (1949) 井上 章・今井章之
 筋的作業の持久力に関する研究 (其の4) 作業持続に必要な 休憩時間と作業時間との 配分に就いて **11**, 27-30
- 612.745.1-083
979 (1949) 井上 章・日笠頼則
 筋的作業の持久力に関する研究 (其の5) 防毒面装着の作業持続能力に及ぼす影響 **12**, 31-35
- 612.745.1 : 612-087
980 (1957) 桑原薫三
 ソ連引揚者の体力に就いて **19**, 1117-1118
- 612.745.1-083
981 (1951) 木村一雄・山形寿郎
 骨格筋繊維のなし得る 機械的仕事の大きさに就いて **13**, 140-142
- 612.746** 筋機能の病的異変; 痙縮, 戦慄
- 612.746 : 612.744.15/6
982 (1941) 上小鶴克巳
 破傷風痙縮に於ける 筋内乳酸量及び磷原質量の変化に就いての研究 **6**, 555-559
- 612.746-083 : 612.825-83
983 (1953) 河村洋二郎・岸 欣一・本田光徳
 除脳硬直に関する研究 II 顎硬直の分析及び除脳動物の硬直に関する 2, 3 の因子に就いて **15**, 428-433
- 612.746-083 : 612.014.465 : 612.741.1
984 (1955) 岸 欣一
 震顛機構の生理学的研究 I 麻酔により生じた震顛とその筋電図 **17**, 352-359
- 612.746-083
985 (1956) 岸 欣一
 震顛機構の生理学的研究 (II) 震顛に影響を与える諸因子とその意義 **18**, 131-139
- 612.748** 筋の神経支配
- 612.748
986 (1953) 中西政局
 骨格筋の交感神経司配に関する Orbeli 学派の研究 **15**, 477-492
- 612.75** 骨, 関節, 結合組織, 腱膜, 滑液囊の生理
- 612.75 : 612.311 : 612.822
987 (1957) 藤本順三
 顎運動機構の神経生理学的研究 開口反射について **19**, 1263-1271
- 612.75 : 612.311 : 612.822
988 (1958) 藤本順三
 顎運動機構の神経生理学的研究 顎反射中枢について **20**, 214-220
- 612.76** 移動運動; 動物体の運動の原理
- 612.76 : 612.825-083
989 (1954) 河村洋二郎・岸 欣一・藤本順三
 自発性異常運動機構の実験的研究 (第1報) 半脳動物に就いての実験 **16**, 656-663
- 612.763 : 612.766.1 : [612.22.02+.2+.16+.14+.46+.5
990 (1936) 知久源次郎・毛塚好忠・飯野富雄・佐々木 進・松山竜一
 スポーツ医学の研究 (9) 本邦一流拳闘選手の練習試合に於ける酸素負債量並びに脉搏, 呼吸, 体温, 血圧及び尿の変化について **1**, 79-89
- 612.763 : [612.22+.14+.16+.2
991 (1936) 飯野富雄・北条和雄・湯田勝年
 スポーツ医学の研究 (10) スキーによる登坂時, 滑降時及び其恢復時の瓦斯代謝, 脉搏, 血圧, 呼吸の変化について **1**, 90-93

- 612.763 : 612.275.1 : [612.1 + 612.221
992 (1936) 杉本良一・飯野富雄・高橋六弥・知久源次郎・毛塚好忠・小島信一・北条和雄・湯田勝年
 スポーツ医学の研究 (11) 山岳地帯に滞在中の安静時及び運動時瓦斯代謝の変化について **1**, 165-169
- 612.763 : 612.22.02
993 (1936) 知久源次郎・佐々木 進・松山竜一
 スポーツ医学の研究 (12) 本邦一流短中距離runnerの極大酸素負債量について **1**, 211-218
- 612.763 : 612.766.1
994 (1937) 佐々木 進
 スポーツ医学の研究 (13) 滑走漕艇練習台に依る持続練習の身体諸機能に及ぼす影響並びに其鍛練効果に就いて **2**, 342-362
- 612.763 : 612.122.1
995 (1938) 村上 昇
 スポーツ医学の研究 (14) 運動による血糖の消長に就いて (1) **3**, 259-265
- 612.763 : 612.122.1
996 (1938) 村上 昇
 スポーツ医学の研究 (15) 運動による血糖の消長に就いて (2) **3**, 266-276
- 612.763 : 612.172
997 (1941) 大村 正
 運動医学の研究 (17) 静常時, 運動時並びに運動恢復時に於ける心搏数の変化に就いて **6**, 527-534
- 612.766.1 : 615.361 : 612.133/4
998 (1950) 白石信尚・山本理平・長田泰公・小川庄吉・浦田章子・森 悠子・服部美代子
 thmenine の疲労防止効果について (第1報) 負荷による循環機能の変化 **12**, 168-174
- 612.766.1 : 612.822.3
999 (1951) 堀内 冷
 疲労と脳波 (強制水泳による鼠脳波の変化) **13**, 505-509
- 612.766 : 612.858.8
1000 (1951) 時実利彦・近藤達子・時実 博
 四肢筋に現われる上下・左右・前後運動による迷路性反射に就いて—Neuromuscular unit の活動様式に関する研究 (7) **13**, 518-523
- 612.766.1-083 : 616.891
1001 (1955) 朝比奈一男・松井良友・鮎松 洋
 過度の運動による白鼠実験神経症 **17**, 587-592
- 612.766.1 + 612.822.53] : 612.741.1
1002 (1956) 堀内 冷
 疲労と筋電図 **18**, 420-426
- 612.766.1 : 612.121
1003 (1957) 本田良行・養口 真
 受動運動に伴う Alkalosis について **19**, 465-467
- 612.766.1 : 613.6
1004 (1957) 桑原薫三
 農繁期の疲労に就いての研究 **19**, 1130-1135
- 612.767 : 612.825 : 612.014.424
1005 (1952) 小田 満
 皮質性歩行運動に対する 錐体路系及び 錐体外路系の関係 **14**, 64-69
- 612.77 動物の発電及び発光**
- 612.772
1006 (1938) 赤羽武夫
 発光 Bacteriaの光の性質に関する知見補遺 **3**, 310-317
- 612.772
1007 (1938) 羽根田弥太
 深海魚 *Malacocephalus laevis* (Lowe) の発光に就いて **3**, 318-326
- 612.772
1008 (1939) 羽根田弥太・熊谷信行
 ウミミズ *Pontodrilus matsushimensis* IZUKAの発光物質に就いて **4**, 328-333
- 612.772 : 535.243
1009 (1940) 羽根田弥太・高瀬光一郎・熊谷信行
 生物発光の分光学的研究 **5**, 307-317
- 612.78 声, 発音**
- 612.78 : 598.826 : 612.014.44
1010 (1943) 中島 誠
 野雀の朝鳴きと光との関係に就いて **8**, 60-66
- 612.789.4-083
1011 (1942) 三浦俊夫
 母音アの合成及びその声唇周期の変化に就いて 母音の合成的研究 (其の1) **7**, 563-584
- 612.789.4-083
1012 (1942) 三浦俊夫
 母音アの合成及び音響スペクトル上裾の短い Formant に就いて 母音の合成的研究 (其の2) **7**, 585-590
- 612.789.4-083
1013 (1942) 三浦俊夫
 母音エ, ウ, オの合成及び合成イと合成エとの區別に就いて 母音の合成的研究 (其の3) **7**, 591-597

612.79 皮膚

- 612.79 : 612.288 : [612.826.014.465
1014 (1957) 山本喜昭
 蛙の前脳麻酔時の皮膚-呼吸反射について **19**, 1311-1314
- 612.791 : 612.014.461
1015 (1949) 山本 清
 動物膜の水透過に関する研究 (1) 生きているガマ皮膚を透過する液量の一測定法 **11**, 243-245
- 612.791.1 : [612.792.5 : 612.392.62
1016 (1948) 福田篤郎
 汗のカリウム濃度及び発汗時のカリウム代謝 **10**, 186-189
- 612.792 : 612.766.1 : 612.392.3
1017 (1941) 仙石敏夫
 人体の運動時の汗量並びに発汗と飲水との関係 **6**, 68-83
- 612.792-083 : 612.766
1018 (1942) 伊藤真次・増井市郎・服部知己・奥田宣・鈴木利三
 夏日無飲食長途歩行実験 (第1回報告) **7**, 101-107
- 612.792 : 612.766-083
1019 (1942) 伊藤真次・増井市郎・松本栄吉
 夏日無飲食長途歩行実験 (第2回報告) **7**, 517-528
- 612.792 : 612.591
1020 (1943) 川畑愛浩・伊藤真次
 人体発汗器官の熱帯風土馴化に関する研究補遺 **8**, 648-662
- 612.792
1021 (1948) 伊藤真次
 汗排出の周期性と流出速度 **10**, 126-127
- 612.792 : 612.014.47] : 612.825
1022 (1955) 松本良二
 汗-発汗反射の中樞性径路について **17**, 263-270
- 612.792
1023 (1955) 中山昭雄・有村 章
 発汗に発する 2, 3 のノート **17**, 774-776
- 612.792.1
1024 (1942) 松本栄吉
 汗の塩化物含量の発汗速度, 鍛錬並びに汗腺機能変化に因る変動 **7**, 58-79
- 612.792.1
1025 (1942) 伊藤真次
 局所汗量測定法の再吟味 **7**, 108-113
- 612.792.1
1026 (1942) 新田初雄
 汗の乳酸 **7**, 529-537
- 612.792.1
1027 (1948) 伊藤真次・大原孝吉
 汗の Histamin (A) Histamin 様物質の生理学的検定 **10**, 287-289
- 612.792.1
1028 (1949) 伊藤真次・須知泰山
 汗の糖及び焦性葡萄糖 **11**, 12-15
- 612.792.1
1029 (1949) 井上 章・日笠頼則・村上喜久子
 汗中の微量有効成分に就いて (其の2) 汗の Vago-mimeticな作用に就いて **11**, 46-52
- 612.792.1
1030 (1949) 井上 章・村上喜久子
 汗中の微量有効成分に就いて (其の3) 汗中の Histamine の化学的証明 **11**, 53-56
- 612.792.1
1031 (1953) 川田輝夫
 汗の酸塩基平衡 (第1報) 汗に於ける Henderson-Hasselbalch 式の検証 **15**, 59-63
- 612.792.1
1032 (1953) 川田輝夫
 汗の酸塩基平衡 (第2報) 汗の pH を左右する生理的要因 **15**, 214-225
- 612.792.1-08
1033 (1940) 久徳知行・松本栄吉
 汗の塩化物含量測定を目的とする 皮膚の洗滌法に就いて **5**, 390-393
- 612.792.1-08
1034 (1954) 千早卓郎
 皮膚組織液 Cl 濃度に関する研究 (第1報) 組織 Cl 電極の一新考案 **16**, 566-577
- 612.792.1-08
1035 (1954) 千早卓郎
 皮膚組織液 Cl 濃度に関する研究 (第2報) 皮膚組織 Cl 濃度の生理的変動, 特に発汗時の消長について **16**, 631-639
- 612.792.1 : 612.792.5
1036 (1940) 川畑愛浩
 汗の Cl 量と汗腺機能との関係に関する実験 **5**, 76-84
- 612.792.1 : 612.792.5
1037 (1940) 久徳知行
 人体汗腺の塩化物分泌, 殊に之と発汗器官との関係 **5**, 394-410

- 612.792.1 (=1.96)
1038 (1942) 川畑愛浩
 ミクロネシア人の汗の塩化物含量 **7**, 54-57
- 612.792.1 (=1.529.1)
1039 (1942) 松本栄吉
 台湾本島人の汗の塩化物含量 **7**, 80-83
- 612.792.1 : [612.89-083 : 612.79
1040 (1942) 松本栄吉
 交感神経節切除皮膚面に於ける 発汗 並びに汗の塩化物含量 **7**, 84-88
- 612.792.1 : [612.563 : 612.79
1041 (1942) 増井市郎
 汗のCl量と皮膚温との関係 **7**, 89-94
- 612.792.1 : 612.392.01 B₁B₂
1042 (1949) 伊藤真次
 ビタミン B₁, B₂ 注射後における汗の焦性葡萄糖濃度 **11**, 16-17
- 612.792.1 : 612.015.3
1043 (1949) 井上 章・日笠頼則・村上喜久子
 汗中の微量有効成分に就いて (其のI) 汗の基礎代謝に対する作用 **11**, 37-45
- 612.792.1 : 612.795
1044 (1954) 松本良二
 皮膚電気抵抗による人体発汗の研究 **16**, 470-483
- 612.792.4-064 : 612.014.43
1045 (1942) 伊藤真次
 冷刺激に因る発汗制止現象は Pilocarpin 発汗に於いても見られるか **7**, 114-116
- 612.792.5
1046 (1939) 小菅武夫・川畑愛浩
 南洋土人及び移住者の発汗機能検査 **4**, 212-220
- 612.792.5-053.2
1047 (1939) 小菅武夫
 小児の発汗機能 **4**, 370-377
- 612.792.5 : [612.014.43 : 612.79
1048 (1939) 川畑愛浩
 皮膚の反復冷却に因る発汗機能の減退 **4**, 434-437
- 612.792.5-053
1049 (1939) 川畑愛浩
 人体能働汗腺の計数的研究 (前篇) 汗腺数の年齢による差異 **4**, 438-443
- 612.792.5-054 (=1-6)
1050 (1939) 川畑愛浩
 人体能働汗腺の計数的研究 (後篇) 汗腺数の風土による差異 **4**, 444-448
- 612.792.4 : 612.014.463
1051 (1941) 仙石敏夫
 食塩の長期禁断実験, 殊に其発汗に対する影響 **6**, 49-67
- 612.792.5
1052 (1949) 高木健太郎
 半側発汗の動機について **11**, 137-141
- 612.792.5 : 599.742.7
1053 (1941) 高木俊蔵・堀 三造
 汗腺の組織生理学的研究 (1) 猫足蹠汗腺の官能上の種別に就いて **6**, 662-666
- 612.792.5 : 599.742.7
1054 (1941) 高木俊蔵・堀 三造
 汗腺の組織生理学的研究 (2) 猫足蹠汗腺の微細構造 **6**, 667-673
- 612.792.5 : 599.742.7
1055 (1941) 高木俊蔵・堀 三造
 汗腺の組織生理学的研究 (3) 猫足蹠汗腺及び皮膚に於ける塩化物の組織化学的研究 **6**, 674-682
- 612.792.5
1056 (1942) 高木俊蔵・原田文雄
 汗腺の組織生理学的研究 (4) 猫足蹠汗腺の各個形態特に貯蔵管の存在に就いて **7**, 137-144
- 612.792.5
1057 (1942) 高木俊蔵・御供 武
 汗腺の組織生理学的研究 (5) 人体汗腺及び皮膚に於ける塩化物の組織化学的研究 **7**, 473-480
- 612.792.5 : 612.795
1058 (1943) 高木俊蔵・原田文雄
 汗腺の組織生理学的研究 (6) Formalin 電流輸送による発汗制止原因の細胞組織学的検索 **8**, 668-683
- 612.792.5 : 599.742.7
1059 (1944) 高木俊蔵・高橋キヨ
 汗腺の組織生理学的研究 (7) 猫足蹠汗腺の脂肪分泌の問題 **9**, 500-503
- 612.792.5
1060 (1944) 高木俊蔵・新田初雄
 汗腺の組織生理学的研究 (8) 人体汗腺脂肪分泌 **9**, 504-510
- 612.792.5
1061 (1948) 伊藤真次
 手指汗腺の形態 **10**, 123-125
- 612.792.5-053
1062 (1956) 田中正巳
 発汗性に影響を及ぼす生物学的要因の研究 (第1報) 発汗性の年齢的差異 **18**, 390-394

- 612.792.5 : 612.06
1063 (1956) 田中正巳
 発汗性に影響を及ぼす生物学的要因の研究 (第2報)
 発汗性の性的差異 **18**, 395-397
- 612.792.5 : [612.616.31 + 612.621.31
1064 (1956) 田中正巳
 発汗性に影響を及ぼす生物学的要因の研究 (第3報)
 性ホルモンの発汗性に及ぼす影響 **18**, 398-401
- 612.792.5 : 612.662
1065 (1956) 田中正巳
 発汗性に影響を及ぼす生物学的要因の研究 (第4報)
 月経期の発汗について **18**, 402-404
- 612.792.5 : 599.723
1066 (1957) 中山昭雄・高木良雄・有村 章・上野 喬
 発汗器官進化学説より見たる馬の発汗について **19**,
 26-30
- 612.792.6
1067 (1944) 伊藤真次
 温熱性全身無汗症患者に於ける観察 **9**, 493-499
- 612.792.8-083
1068 (1950) 山田達男
 上下発汗反射の動機 **12**, 252-256
- 612.792.8 : 612.014.47
1069 (1954) 長谷川 弘
 庄-発汗反射に関する研究補遺 **16**, 578-585
- 612.794 : 612.813
1070 (1956) 倉島昭示
 蛙の背皮神経活動電流による皮膚触角の研究 (第1
 編) **18**, 520-526
- 612.794 : 612.813
1071 (1956) 倉島昭示
 蛙の背皮神経活動電流による皮膚触覚の研究 (第2
 編) **18**, 527-532
- 612.795
1072 (1944) 江上義之
 直流通電に依る蛙皮の分極に就いて **9**, 726-731
- 612.795
1073 (1948) 伊藤真次
 色素の汗腺内電流輸送 **10**, 128-129
- 612.795
1074 (1948) 伊藤真次
 電流輸送による Safranin の組織内侵入-汗腺排出
 管の機能に関する考察 **10**, 130-132
- 612.795 : 612.014.423 : 612.014.469
1075 (1941) 成田敏男
 蛙皮静止電位に対する 青酸加里の作用機転に 就い
 て **6**, 334-341
- 612.795 : [612.014.423 + 612.793
1076 (1943) 遠藤尚義
 蛙皮の動電力並びに 呼吸に対する 諸種要因の選択
 的影響に就いて **8**, 303-311
- 612.795 : 612.014.424.2
1077 (1941) 久米幸夫
 微小直流に対する蛙皮の電導性に就いて (第1報)
6, 423-438
- 612.795 : 612.014.462.4
1078 (1941) 久米幸夫
 微小直流に対する蛙皮の電導性に就いて (第2報)
 蛙皮外側液中のKationの種類と電導性との関係 **6**,
 439-458
- 612.795 : 612.014.463
1079 (1941) 久米幸夫
 微小直流に対する蛙皮の電導性に就いて (第3報)
 外側液灌流による影響の有無 **6**, 459-463
- 612.795 : 612.014.462.4
1080 (1941) 久米幸夫
 蛙皮の静止電位に及ぼす灌流効果に就いて **6**, 647
 -658
- 612.795 : 612.014.422
1081 (1942) 増井市郎
 人体発汗時の皮膚電流抵抗変化 **7**, 448-471
- 612.795 : 612.592
1082 (1943) 高橋史郎
 指趾皮膚血管に於ける 寒冷反応の 習慣による増進
8, 461-482
- 612.795 : 612.014.462.4 : 597.82
1083 (1944) 小嶋利顕
 蛙皮電気発生に対する陰イオンの影響 **9**, 91-100
- 612.795 : 612.014.469 : 597.82
1084 (1944) 杉下孝人
 蛙皮電位の リチウム周期に及ぼす 各種薬物の影響
 に就いて **9**, 417-425
- 612.795 : 612.014.423
1085 (1950) 本間三郎
 人体皮膚の電氣的分極について **12**, 261-268
- 612.795 : 612.014.422
1086 (1954) 堀口慶次
 人体皮膚電気抵抗の変化に関する研究 **16**, 720-731

- 612.795 : 612.014.423
1087 (1955) 奥田八雄
 家兔皮膚電気分極と通流電極第3作用 **17**, 753-760
- 612.799 : 612.798
1088 (1957) 奥山文雄
 毛の発育に及ぼす神経性の影響 特に、実験的半側発毛について **19**, 292-303
- 612.8 神経系, 感覚器**
- 612.8.01 一般理論, 神経支配の理論**
- 612.8.01
1089 (1955) 中西政周
 “器官2種神経支配説”の提唱 **17**, 629-636
- 612.8.012 : 612.015.3 : 546.18.02.32
1090 (1958) 平野修助
 脳組織の磷酸代謝 特に P³² を用いての磷蛋白質の代謝回転に関する研究 **20**, 73-83
- 612.81 末梢神経系**
- 612.813 神経興奮の電気現象**
- 612.813.3
1091 (1941) 三浦隆蔵
 中等度速度を以つてせる電気緊張電流の測定 **6**, 239-251
- 612.813
1092 (1948) 藤田周平
 脊髓前根を通る求心性神経線維に就いて **10**, 91-94
- 612.813
1093 (1950) 江藤 喬
 神経の変形電位に就いて **12**, 150-153
- 612.813
1094 (1938) 室川正彦
 神経の活動電圧に就いての研究 (1) 活動電圧描写に於ける 諸種の基礎的条件の電圧曲線に及ぼす影響 **3**, 1-11
- 612.813 : 612.816.5
1095 (1938) 名取礼二
 神経の活動電圧に就いての研究 (2) 異種神経線維の陰性波の伝播速度及び閾値の異同に就いてのOssillogrammによる研究 **3**, 237-332
- 612.813 : [612.014.465 + 612.014.463
1096 (1939) 名取礼二
 神経の活動電圧に就いての研究 (3) 麻酔薬及び塩類溶液作用下の神経活動電圧並びに電気緊張と活動電圧との関係 **4**, 175-182
- 612.813
1097 (1941) 小溝協三
 電導性媒質の“場”に於ける神経活動電位の波形 **6**, 92-102
- 612.813-08
1098 (1941) 小溝協三
 液体電極函による神経活動電位の誘導並びに其の分析 **6**, 103-112
- 612.813 : 612.833
1099 (1944) 豊永吉次郎・小溝協三
 脊髓反射に際しての神経活動電流の研究 **9**, 809-812
- 612.813 : 599.742.7
1100 (1943) 竹内大二・森井一碩・加納豊哉
 温血動物有髓神経線維の働作流 **8**, 200-203
- 612.813-083
1101 (1938) 川上政雄
 神経負傷流並びに分極原流の陽性及び陰性動揺に就いて **3**, 199-224
- 612.813 + 612.743
1102 (1950) 唐川正典
 神経, 筋働作流の発現機構に関する実験的研究 (主として其等に於ける「層対電説」(前川)の検証) (第1報) 容積導体内に於ける神経働作流 **12**, 103-106
- 612.813 + 612.743
1103 (1950) 唐川正典
 神経, 筋働作流の発現機構に関する実験的研究 (主として其等に於ける「層対電説」(前川)の検証) (第2報) 容積導体内に於ける神経働作流と空气中に於ける其れとの関連性 **12**, 107-110
- 612.813 + 612.743
1104 (1950) 唐川正典
 神経, 筋働作流の発現機構に関する実験的研究 (主として其等に於ける「層対電説」(前川)の検証) (第3報) 容積導体内に於ける葛縫工筋働作流 **12**, 111-115
- 612.813 + 612.743
1105 (1950) 唐川正典
 神経, 筋働作流の発現機構に関する実験的研究 (主として其等に於ける「層対電説」(前川)の検証) (第4報) 容積導体内に於ける葛縫工筋働作流 **12**, 116-120
- 612.813 + 612.743
1106 (1950) 唐川正典
 神経, 筋働作流の発現機構に関する実験的研究 (主として其等に於ける「層対電説」(前川)の検証) (第5報) 骨格筋傷害働作流と収縮機械曲線の関係 **12**, 269-271

- 612.813+612.743
1107 (1950) 唐川正典
 神経、筋働作流の発現機構に関する実験的研究 (主として其等に於ける「層対電説」(前川)の検証) (第6報) 空气中に於ける骨格筋働作流の吟味 **12**, 272-273
- 612.813+612.743
1108 (1950) 唐川正典
 神経、筋働作流の発現機構に関する実験的研究 (主として其等に於ける「層対電説」(前川)の検証) (第7報) 組織の分極性と働作流の変形 **12**, 274-279
- 612.813+612.743
1109 (1950) 唐川正典
 神経、筋働作流の発現機構に関する実験的研究 (主として其等に於ける「層対電説」(前川)の検証) (第8報「層対電説」に関する2, 3の計算) **12**, 280-283
- 612.815 末梢神経の生理形態学**
- 612.815:599.742.7
1110 (1944) 塚越三好
 温血動物の筋に出入する神経線維の分析的研究 **9**, 584-591
- 612.815-083:612.79
1111 (1948) 田崎一二・大島恭一・藤田周平
 猫の皮膚に発足する求心性神経線維の分離別出 **10**, 95-99
- 612.815.1/.2
1112 (1949) 飯塚恒治
 Neuro-muscular-junctions に就いて **11**, 126-127
- 612.816 神経(並びに筋)の被刺激性(興奮性)**
- 612.816
1113 (1948) 伊藤秀三郎
 比較神経筋生理学 (第1報) **10**, 88-90
- 612.816
1114 (1954) 近藤 勉
 自然刺激による筋紡錘求心性神経線維における、単一Spikeの発出 **16**, 193-198
- 612.816
1115 (1957) 山中 和
 人体神経及び筋の電気刺激閾値に関する研究 V-t 曲線について **19**, 444-452
- 612.816:612.813.3
1116 (1936) 瓦田只二
 末梢神経の不应期の電気緊張に依る変化について (2) **1**, 1-5
- 612.816:621.813.3
1117 (1936) 湯田勝平
 末梢神経の不应期の電気緊張による変化について (3) **1**, 61-66
- 612.816:612.813.3
1118 (1936) 知久源次郎
 末梢神経の不应期の電気緊張による変化について (4) **1**, 67-72
- 612.816+612.741.6]:612.014.424
1119 (1954) 井上正士
 人体神経並びに筋の電気刺激閾値及び通流第3作用に関する研究 **16**, 503-511
- 612.816:612.014.43
1120 (1939) 矢野真琴
 末梢神経線維に於ける刺戟閾と温度との関係 **4**, 339-343
- 612.816:[612.743+612.813
1121 (1942) 奥 義弘
 神経及び筋に於ける活動電流による反復興奮の研究 **7**, 481-498
- 612.816:612.014.462.4
1122 (1944) 小嶋利頭
 電気刺激強まり要素に対するイオンの作用 **9**, 101-112
- 612.816:612.014.463
1123 (1955) 大野喜市
 Ca⁺⁺除去に依る神経線維の自発性反復興奮に就いて **17**, 567-575
- 612.816:612.014.424
1124 (1958) 藤岡玄治
 人体神経、筋の反復刺激閾値に関する研究 **20**, 170-180
- 612.816:595.7
1125 (1950) 額綱教三
 松カレハ幼虫の神経細胞の興奮について **12**, 175-178
- 612.816-083:612.014.469
1126 (1951) 岩瀬善彦
 油-食塩水層による神経模型の研究 (第1報) アセチルコリンの滴下によるSpike and dome potential について **13**, 431-433

- 612.816-083 : [612.014.43 + 612.014.462.4
1127 (1952) 神山貞二
 神経の3刺激要素に関する研究(第2編) 神経上膜除去による各要素の変化 **14**, 345-351
- 612.816-083 : 612.014.43
1128 (1954) 三輪英武
 温度効果における髄鞘の意義について **16**, 392-396
- 612.816-083 : 612.014.469
1129 (1955) 越智 勲
 単一有髄神経線維に対する Acetylcholine, Acetylcholinesterase 阻害剤及び Curare の作用に就いて **17**, 781-789
- 612.816-083
1130 (1940) 木沢 和
 被刺激性・興奮性の並行と分離(7) 家兔坐骨神経切断部再生時に於ける Chloreton 奇現象類似の所見に就いて **5**, 51-54
- 612.816-083 : 612.014.424
1131 (1944) 小池 昇
 単一神経線維筋標本に於ける平流開放時興奮 **9**, 721-725
- 612.816-083 + 612.741.9-083] : 612.741.9
1132 (1936) 星野時一郎
 単一神経線維及び筋線維標本についての研究(3)
 1. 偏光顕微鏡に依る単一筋線維の生理学的研究 **1**, 6-15
- 612.816-083 + 612.741.9-083] : [612.743 + 612.813
1133 (1936) 富田理一郎
 単一神経線維並びに単一筋線維標本についての研究(4) 動作電圧についての実験 **1**, 203-210
- 612.816-083 + 612.741.1
1134 (1937) 小島信一
 単一神経線維並びに単一筋線維に就いての研究(5) 高速度顕微鏡活動写真による単一筋線維の攣縮の研究 **2**, 147-155
- 612.816-083 + 612.741.9-083
1135 (1937) 高橋六弥
 単一神経線維並びに単一筋線維に就いての研究(6) 時値に就いて **2**, 184-185
- 612.816-083 + 612.741.9-083] : 612.014.465
1136 (1938) 大川徳重
 単一神経線維及び単一筋線維に就いての研究(7) 単一神経線維の麻酔に就いて **3**, 351-359
- 612.816-083 + 612.741.9-083] : 612.014.462
1137 (1938) 大川徳重
 単一神経線維及び単一筋線維に就いての研究(8) 非正常滲透圧を有する Ringer 液中に於ける筋及び神経線維の膨化及び萎縮に就いて **3**, 346-350
- 612.816-083
1138 (1939) 大川徳重
 単一神経線維並びに単一筋線維に就いての研究(9) 高速度顕微鏡活動写真に依る筋収縮機構の研究 **4**, 23-29
- 612.816-083 : 612.014.424
1139 (1943) 石丸能照
 単一神経線維筋標本の麻酔時に於ける平流電気の効果に就いて(第1報) 神経線維別出部に於ける実験 **8**, 369-377
- 612.816-083 : 612.014.465 : 612.014.424
1140 (1943) 石丸能照
 単一神経線維筋標本の麻酔時に於ける平流電気の効果に就いて(第2報) 神経幹を含めての実験 **8**, 378-383
- 612.816-083 : 612.014.463
1141 (1952) 有本和男
 単一神経線維に於ける動作流と KCl 濃度との関係に就いて(第1報) KCl を作用させた部位に就いて **14**, 70-76
- 612.816-083 : 612.014.463
1142 (1952) 有本和男
 単一神経線維に於ける動作流と KCl 濃度との関係に就いて(第2報) KCl を隣接絞輪部に作用させた場合に正常絞輪部に及ぼす効果に就いて **14**, 77-80
- 612.816-083 : 612.014.463 : 612.014.423
1143 (1952) 有本和男
 単一神経線維に於ける動作流と KCl 濃度との関係に就いて(第3報) KCl 濃度と濃淡電位差との関係に就いて **14**, 81-85
- 612.816-083 : 612.014.463 : 612.014.465
1144 (1952) 有本和男
 単一神経線維に於ける動作流と KCl 濃度との関係に就いて(第4報) KCl と麻酔薬との関係に就いて **14**, 86-91
- 612.816.1
1145 (1937) 田崎一三
 有髄神経線維に対する刺戟電流の効果 **2**, 315-319
- 612.816.1
1146 (1938) 本林富士郎
 筋の強さ-期間-曲線 **3**, 379-393
- 612.816.1
1147 (1938) 本林富士郎
 神経の強さ-期間-曲線 **3**, 394-411
- 612.816.1
1148 (1940) 青木哲四郎
 神経筋の不応期に就いての研究(6) **5**, 319-325

- 612.816.1
1149 (1943) 二階堂保彦
 神経に於ける2段直角電流刺激に就いて(第1報)
8, 32-40
- 612.816.1
1150 (1943) 二階堂保彦
 神経に於ける2段直角電流刺激に就いて(第2報)
8, 41-53
- 612.816.1
1151 (1948) 二階堂保彦
 主刺激電流の前後に弱い電流を附加した二段電流
 刺激の実験(第3報) 神経に於ける弱い直線の上昇
 電流刺激の影響に就いて **10**, 183-185
- 612.816.1
1152 (1944) 大谷卓造
 神経の充電曲線に就いて **9**, 368-377
- 612.816.1
1153 (1944) 小池 昇
 短時間持続電流による閾下電撃効果に就いて **9**,
 732-741
- 612.816.1
1154 (1944) 江上義之
 電流刺激に於ける“強度-持続時間関係”に就いて
 の吟味(1) **9**, 566-572
- 612.816.1
1155 (1944) 江上義之
 刺激効果に及ぼす神経線維の長さ及び刺激電極の
 大きさの影響に就いて **9**, 470-477
- 612.816.1
1156 (1956) 北村 昭
 同一骨格筋繊維に於ける各種電気刺激に依る強さ、
 期間曲線に就いて(第1報) **18**, 380-386
- 612.816.1 : 615.781-089 : 583.29
1157 (1956) 山田潤一
 神経線維の冷却麻痺について **18**, 140-146
- 612.816.1
1158 (1942) 鈴木 均
 神経の直流刺激に対する2, 3の物理化学的環境の
 影響に就いて **7**, 212-232
- 612.816.1
1159 (1941) 松本茂彦
 被刺激形体と刺激電極との大きさの関係が電気刺
 激要素に及ぼす影響に就いて **6**, 252-267
- 612.816.1
1160 (1943) 小沢 弘
 被刺激形体と刺激電極との大きさの関係が電気刺
 激要素に及ぼす影響に就いて(第2報) 神経幹全体
 を1個の被刺激形体と見ての実験 **8**, 349-368
- 612.816.1
1161 (1943) 紅林 康
 漸増電流刺激による興奮について **8**, 1-31
- 612.816.1
1162 (1944) 坂本健次郎
 電気刺激強まり要素測定の一新法及び夫による直
 流通流の神経に於ける該要素に対する影響の観察
9, 433-452
- 612.816.1
1163 (1948) 宇野 幸
 開放刺激の強さ期間曲線に就いて **10**, 1-8
- 612.816.1
1164 (1952) 安藤 毅
 神経並びに筋に於ける直流通流電極作用の研究 **14**,
 1-9
- 612.816.1
1165 (1953) 福田 忠
 直流通流第3作用の神経絶対不応期に及ぼす影響
15, 434-442
- 612.816.1
1166 (1955) 上山 巖
 陽性開放刺激に対する閉鎖時間の影響(刺激電流自
 身の第3作用) **17**, 241-252
- 612.816.1
1167 (1955) 西村文夫
 神経における直流通流第3作用の強さ-期間-曲線
 に及ぼす影響について **17**, 462-471
- 612.816.1
1168 (1956) 熊坂年成
 人体神経筋の陽極開放閾値に関する研究 **18**, 79-
 89
- 612.816.1
1196 (1957) 斎藤次郎
 低周直角脈波通流の神経閾値及び活動電位に及ぼ
 す影響について **19**, 1291-1300
- 612.816.1
1170 (1958) 佐藤晴美
 攀縮法則と通流電極第3作用 **20**, 105-114
- 612.816.1
1171 (1958) 荻野正之
 通流電極第3作用と麻酔に就いて **20**, 296-306
- 612.816.1 : 612.014.1
1172 (1957) 桑原薫三
 生活条件の変化による最小間程の変化 **19**, 941-971

- 612.816.1
1173 (1936) 三神 佑
 閉鎖感応電流による least intervalの測定 **1**, 269-272
- 612.816.1
1174 (1936) 三神 佑
 電極間の距離と least interval との関係 **1**, 273-277
- 612.816.1
1175 (1936) 三神 佑
 least interval 測定における刺戟電流の方向と電極間の距離との関係 **1**, 278-283
- 612.816.1:612.743
1176 (1936) 三神 佑
 神経刺戟における least interval と筋働作電流の間隔との関係 **1**, 284-289
- 612.816.1:612.813
1177 (1958) 大浜博利
 神経活動電位発生に対する通流第 3 作用について **20**, 713-722
- 612.816.1:612.741.63
1178 (1958) 渡部士郎
 人体神経筋の漸増直角脈波刺激について **20**, 723-733
- 612.816.1-083
1179 (1938) 田崎一二
 髓鞘乾燥絶縁法を用いた時の神経線維の電圧時間曲線 **3**, 61-64
- 612.816.1-08
1180 (1948) 山田 守
 陰極線オツシログラフに因る働作電圧の測定 (第 1 報) 構造, 装置に就いて **10**, 293-297
- 612.816.1-08
1181 (1948) 山田 守
 陰極線オツシログラフに因る働作電圧の測定 (第 2 報) 出現時間に就いて **10**, 298-302
- 612.816.1-08
1182 (1953) 船坂 豊
 単一神経纖維働作流の新誘導法について **15**, 409-411
- 612.816.1-083
1183 (1956) 宮田 誠
 神経上膜除去神経における通流電極第 3 作用 **18**, 437-446
- 612.816.1:612.014.462.4
1184 (1938) 杉崎行三
 直流刺激に対するイオンの作用に就いて **3**, 236-252
- 612.816.1:612.014.465
1185 (1938) 田崎一二
 基電圧と時値との麻酔による変化 **3**, 65-67
- 612.816.1:599.9
1186 (1938) 和合卯太郎
 健康成人の筋, 神経に於ける電圧容量曲線について (第 1 報) **3**, 225-235
- 612.816.1:612.813.3
1187 (1942) 江上義之
 定常及び過渡的状态に於ける 神経線維上の電位分布に関する解折的研究 (電気緊張に就いての考察並びに電流刺激理論への補遺) **7**, 686-695
- 612.816.1:612.014.423
1188 (1951) 藤本克巳
 筋および神経の電流性分極並びにオーム抵抗に関する研究 **13**, 563-570
- 612.816.1:[612.014.462.1+612.014.462.6
1189 (1949) 岩瀬 昇
 蛙神経の電気刺激強まり要素に対する環境溶液の pH 及び滲透圧の影響 **11**, 1-7
- 612.816.1:612.014.422
1190 (1952) 小溝協三
 導電性媒質の場に於ける 働作電位分布の理論的考察 **14**, 452-457
- 612.816.1:612.014.424
1191 (1953) 服部鎮男・綾井治一郎・堀口 隆
 クロナキシーより観たる電気麻酔 **15**, 81-86
- 612.816.1-083:612.014.43
1192 (1953) 増田 実
 神経纖維の正常絞輪部に生ずる働作流の温度効果について **15**, 265-270
- 612.816.1:612.014.423
1193 (1954) 稲田素臣・荒木辰之助
 神経切断端近傍の興奮性と負傷電位との関係 **16**, 552-554
- 612.816.1:612.014.424
1194 (1954) 正田豊作・斎藤定雄
 3つの電撃による単一運動神経線維の刺激 **16**, 499-502
- 612.816.1-083:612.014.424
1195 (1954) 正田豊作
 毛細管電極による単一運動神経線維の反復刺激 **16**, 484-489

- 612.816.1:612.014.424
1196 (1956) 刑部 宏
 超極大刺激による棘間距離について **18**, 906-918
- 612.816.2
1197 (1952) 鈴木正夫
 通流電極の作用について **17**, 223-234
- 612.816.2
1198 (1958) 平岡 馨
 否正型の不等興奮系の批判 **20**, 94-104
- 612.816.2:612.014.423
1199 (1953) 戸塚武彦
 興奮伝導の数学的考察(第1報) **15**, 498-503
- 612.816.2+612.816.7]:612.814
1200 (1958) 渡辺恭二
 有髓神経線維ラ氏絞輪形質膜と界面活性剤 **20**, 843-852
- 612.816.3
1201 (1943) 石井猷一・湯浅国三郎・加納豊哉
 遅運動線維が 脊髄前根を経て 筋に達する事を示す実験 **8**, 694-698
- 612.816.3
1202 (1944) 江上義之
 神経線維に於ける 興奮波伝搬に関する 解析的研究(第2報) 刺激としての局部電流 **9**, 478-491
- 612.816.3
1203 (1955) 篠原健一
 神経線維興奮伝導に於ける 髓鞘被覆部の役割 **17**, 310-317
- 612.816.3
1204 (1956) 田崎 敬
 単一神経線維に於ける電流滑走距離に就いて **18**, 605-613
- 612.816.3-083
1205 (1944) 江上義之
 神経線維に於ける 興奮波伝搬に就いての 模型的考察(1) **9**, 556-565
- 612.816.3-083
1206 (1952) 内村俊雄・宮原長知・菅谷享三
 麻痺した 1 絞輪を越えての跳躍伝導に関する研究(第1報) 剔出単一神経線維について **14**, 10-14
- 612.816.3-083
1207 (1952) 内村俊雄
 麻痺した 1 絞輪を越えての跳躍伝導に関する研究(第2報) 生体内単一神経線維について **14**, 15-20
- 612.816.3-083:612.014.465
1208 (1952) 内村俊雄
 麻痺した 1 絞輪を越えての跳躍伝導に関する研究(第3報) 麻酔薬による興奮伝導順序の逆転現象について **14**, 21-23
- 612.816.3:612.014.424
1209 (1954) 野間実利
 神経筋接合部に於て繰返し刺激後に生ずる 伝導強化現象 **16**, 704-707
- 612.816.3-083
1210 (1956) 島 種邦
 有髓神経線維の 髓鞘の電氣的諸性質と 伝導速度との関係 **18**, 317-324
- 612.816.3:612.816.1
1211 (1957) 大倉淳男
 興奮伝導に対する通流電極第3作用(第1報) 興奮伝導遮断に関する研究 **19**, 383-387
- 612.816.3:612.816.1
1212 (1957) 大倉淳男
 興奮伝導に対する通流電極第3作用(第2報) 興奮伝導速度に関する研究 **19**, 388-392
- 612.816.3-083
1213 (1957) 斎藤義夫
 単一神経線維に於ける 上向及び下向流電気刺激時の電流滑走に就いて **19**, 636-651
- 612.816.3:612.014.461
1214 (1957) 戸谷真澄
 末梢神経の興奮並びに 興奮性に対する 水の生理的意義 **19**, 1011-1030
- 612.816.5
1215 (1951) 市岡正道
 いわゆる irresponsive period に就いて **13**, 224-229
- 612.816.5
1216 (1951) 真島英信
 蟻の神経伝導速度に関する研究(第1報) 部位による伝導速度の変化及び波形分離 **13**, 547-551
- 612.816.5
1217 (1951) 真島英信
 蟻の神経伝導速度に関する研究(第2報) 脊髄後索に於ける伝導速度 **13**, 552-554
- 612.816.5:612.014.465
1218 (1937) 林 水源
 麻酔時に於ける神経の伝導速度 **2**, 274-295

- 612.816.5:612.813.3
1219 (1937) 邱 徳金
 電気緊張と神経伝導速度 **2**, 303-314
- 612.816.5:612.813.2
1220 (1943) 清谷長源
 神経興奮伝播速度に関する研究 (I) 神経線維に於ける電氣的陰性波の分離に就いて **8**, 625-633
- 612.816.5:612.813.2:[612.819.91+612.89]:598.13
1221 (1943) 清谷長源
 神経興奮伝導速度に関する研究 (II) イシガメの迷走神経及び交感神経に於ける 電氣的陰性波に就いて **8**, 634-641
- 612.816.5-083:597.82
1222 (1951) 円谷 豊
 冬眠中の蟄から作った 後索-後根標本における神経線維の活動流および伝導速度に関する研究 **13**, 375-380
- 612.816.6
1223 (1938) 神崎 昂
 Wedensky 制止現象の研究 (1) **3**, 277-283
- 612.816.6
1224 (1938) 神崎 昂
 Wedensky 制止現象の研究 (2) **3**, 284-288
- 612.816.6
1225 (1938) 神崎 昂
 Wedensky 制止現象の研究 (3) **3**, 289-292
- 612.816.7
1226 (1944) 網歳平三郎
 色素に依るラ氏絞輪の生理的研究 **9**, 406-409
- 612.816.7
1227 (1944) 塚越三好
 神経幹の麻酔に於ける消滅時間の研究補遺 **9**, 592-595
- 612.816.7
1228 (1948) 呉 寿典
 神経の電気刺激強まり要素に対するイオンの作用 (第1報) アルカリ金属イオンに就いて **10**, 61-67
- 612.816.7
1229 (1948) 呉 寿典・鈴木正夫
 神経の電気刺激強まり要素に対するイオンの作用 (第2報) アルカリ土金属イオンに就いて **10**, 68-75
- 612.816.7
1230 (1954) 中浜 博
 表皮層よりの神経及びその末端に於ける 周期的興奮とNaイオンによる自発的興奮 **16**, 72-78
- 612.816.7
1231 (1955) 引場昭男
 ストリクニンの有髄神経線維に対する作用と濃度との関係 **17**, 235-240
- 612.816.7
1232 (1955) 秋山欣勇
 Strychnine による 単一神経線維の反復興奮について **17**, 283-291
- 612.816.7
1233 (1956) 島田久八郎
 クエン酸ソーダ及びその他の刺激を筋に与えた場合の神経衝撃について (骨格筋の化学容器について) **18**, 627-640
- 612.816.7-083:612.014.462.6
1234 (1943) 石丸能照
 単一神経線維に於ける塩酸コカインの麻酔作用とpHとの関係に就いて **8**, 384-387
- 612.816.7-084
1235 (1952) 神山貞二
 神経の3刺激要素に関する研究 (第1編) "Semi-in-vivo" 状態における各要素の測定 **14**, 338-344
- 612.816.7-083
1236 (1953) 宮原長和
 髄鞘に対する KCl の効果に就いて (第1報) 髄鞘被覆部に KCl を作用させた時の髄鞘の変化に就いて **15**, 38-42
- 612.816.7-083:612.816.3
1237 (1953) 宮原長和
 髄鞘に対する KCl の効果に就いて (第2報) 髄鞘被覆部に KCl を作用させた場合に於ける其両側二絞輪間の伝導時間に就いて **15**, 64-67
- 612.816.7-083
1238 (1954) 船坂 豊
 髄鞘に対する種々化学物質の効果 **16**, 697-703
- 612.816.7:615.781:597.82
1239 (1956) 板倉一民
 生体内神経に 麻酔薬を与えた場合の作用機転に就いての研究 (第1報) 冷血動物を用いて **18**, 571-581
- 612.816.7:615.781:599.325
1240 (1956) 板倉一民
 生体内神経に 麻酔薬を与えた場合の作用機転に就いての研究 (第2報) 温血動物を用いて **18**, 582-584
- 612.816.7-083
1241 (1956) 元吉滋直
 神経上膜除去神経の傾き要素に対するイオンの影響 **18**, 696-709

- 612.816.7-083
1242 (1956) 山崎 衛
 通常及び 神経上膜除去神経の強さ 期間曲線に対するイオンの作用 **18**, 809-821
- 612.816.7:546.41.02.45
1243 (1957) 赤畑正光
 神経, 筋の興奮性に対する放射性同位元素 Ca^{45} の作用 **19**, 843-851
- 612.816.7:615.785.1
1244 (1957) 大谷達雄
 有髄神経線維に対する Strychnine 効果の分析並びに神経線維に 反復興奮を生ずる為の 条件に就いて **19**, 1136-1147
- 612.816.7:612.014.462.4
1245 (1957) 坂田三弥
 神経線維に対する諸種イオンの影響 **19**, 1280-1290

612.819 末梢神経系の各論

- 612.819.913
1246 (1956) 宮川鉄男
 迷走及び骨盤両神経刺激の 回盲括約部の 運動に及ぼす影響 **18**, 181-192
- 612.819.913-063
1247 (1957) 山上松義
 胸神経後根を通る 幽門括約部の 運動促進線維について **19**, 128-131
- 612.819.913:612.014.1
1248 (1952) 飯塚恒治
 胃腸に至る迷走神経終末より遊離する物質に就いて **14**, 498-500
- 612.819.913:612.327
1249 (1958) 岡部義数
 胃噴門部の迷走神経支配 **20**, 752-763
- 612.819.916:612.041.1
1250 (1952) 飯塚恒治
 腎臓に至る 迷走神経終末より遊離する物質に就いて **14**, 501-503

612.82 脳, 神経中枢一般

612.821 心理学的生理学, 精神機能

- 612.821.1:612.014.465
1251 (1949) 志水 敏
 人クロールエチル麻酔中の反応時間 **11**, 133-134

612.822 神経細胞一般, 神経中枢

- 612.822:612.014
1252 (1953) 本川弘一
 生理学的調節とサイバネチックス **15**, 1-7

- 612.822:612.014.46
1253 (1956) 千葉正子
 諸種痙攣物質の頸動脈並びに椎骨動脈注射による中枢神経運動系の研究 **18**, 585-593
- 612.822:612.014.1
1254 (1957) 石田俊雄
 テンジクネズミの 大脳 Acetylcholine の動的平衡に関する実験生理学的研究 **19**, 272-283
- 612.822:612.015.3:612.014.424
1255 (1957) 平岡敬造
 In Vitroに於ける電気刺激時の脳代謝 **19**, 604-612
- 612.822:612.014:469
1256 (1957) 前野時弘
 イソニコチン酸 ヒドラチッドの中枢神経運動系に対する作用及び其の機序の実験生理学的研究 **19**, 994-1001
- 612.822.2/.3:612.015.3
1257 (1958) 山下 祐
 剔出鼻嗅球神経細胞の機能と代謝 **20**, 823-832
- 612.822.3
1258 (1944) 辻口清孝
 正常人 α 波の周期に就いて **9**, 249-254
- 612.822.3:612.822.53
1259 (1944) 本川弘一・三田俊定・辻口清孝
 脳波と精神疲労 **9**, 690-700
- 612.822.3:597.82
1260 (1950) 田中英彦
 ガマの脳波の局所的相違に関する研究 **12**, 201-205
- 612.822.3:612.833.9
1261 (1951) 築山一夫
 条件行動と脳波 **13**, 499-504
- 612.822.3:[612.821.3:612.766.1
1262 (1953) 吉井直三郎・築山一夫・堀内 洽
 時間再生法と脳波 **15**, 392-396
- 612.822.3:[612.821.4:612.134
1263 (1955) 中嶋彥郎
 静脈麻酔と脳波(第1篇) 成熟猫の皮質並びに視床脳波に就いて **17**, 607-610
- 612.822.3:[612.821.4:612.134
1264 (1955) 中嶋彥郎
 静脈麻酔と脳波(第2篇) 各種麻酔剤単独使用時に於ける脳波の変化に就いて **17**, 611-618
- 612.822.3:[612.821.4:612.134
1265 (1955) 中嶋彥郎
 静脈麻酔と脳波(第3篇) 各種麻酔剤併用時に於ける脳波の変化に就いて **17**, 637-648

- 612.822.3+535.417
1266 (1956) Norbert Wiener
 Brain waves and the interferometer **18**, 499-507
- 612.822.6
1267 (1956) 小山生子
 犬の両側レンズ状核切截手術による中枢運動系の変化について **18**, 594-604
- 612.824 神経中枢における循環**
- 612.824.1:612.014.1
1268 (1944) 堀口正史・高橋英雄
 測圧式定量法による脳脊髄液乳酸静止価に就いて **9**, 163-165
- 612.824.6
1269 (1955) 井上 敏
 脳温度に関する研究 (第3篇) 脳血流と脳温度に就いて **17**, 451-454
- 612.824.6:[612.741.1+612.014.465
1270 (1955) 井上 敏
 脳温度に関する研究 (第4篇) 脳温の補正並に痙攣, 麻酔等の脳温変化について **17**, 455-461
- 612.824-083
1271 (1955) 宮川 清
 兎の脳循環の人為的制御の一方法 **17**, 299-309
- 612.824:612.13:612.216
1272 (1955) 宮川 清
 脳の血流制御により引き起こされる血圧第三級動揺並びに呼吸様式の周期性変動について (第1報) **17**, 383-391
- 612.824:612.13:612.216
1273 (1955) 宮川 清
 脳の血流制御により引き起こされる血圧第三級動揺並びに呼吸様式の周期性変動について (第2報) **17**, 392-401
- 612.824-083:[612.14+612.216
1274 (1955) 宮川 清
 兎の脳血行遮断中及びその前後の血圧並びに呼吸運動について **17**, 481-487
- 612.824.5:612.146:612.211
1275 (1955) 佐川喜一
 頭蓋腔内圧の実験的上昇による呼吸水準及び血圧の周期的動揺に就いて **17**, 402-415
- 612.824.5:612.146:612.211
1276 (1955) 佐川喜一
 2, 3 の操作によつて呼吸水準並びに血圧に催起される周期性波状動揺の異同について **17**, 576-586
- 612.824.5:612.146:612.211
1277 (1956) 佐川喜一
 頭蓋腔内圧の実験的上昇による呼吸水準及び血圧の周期的動揺について (続報) 犬に於ける実験 **18**, 508-519
- 612.824.1:612.81/2
1278 (1956) 飯田精一
 家兎脳脊髄液圧の神経性変動に就いて **18**, 734-751
- 612.825 脳の回転, 大脳皮質**
- 612.825:612.014.469
1279 (1952) 伊藤秀三郎
 中枢神経運動系に対する Acetylcholine の作用 **14**, 60-63
- 612.825:612.014.424
1280 (1952) 堀口 隆
 電気麻酔に関する研究 (1) 特にその電気学的性質について **14**, 458-463
- 612.825:612.014.424]:612.741.1
1281 (1952) 堀口 隆
 電気麻酔に関する研究 (2) 特に其の筋電図について **14**, 464-467
- 612.825:612.014.424]:612.833
1282 (1955) 橋野昇一・小笠原今男・斎藤一郎
 電気痙攣と脊髄機能 **17**, 271-274
- 612.825:612.014.424:612.821.7
1283 (1955) 岩瀬善彦
 交流及び直流電流による睡眠反応の電気的特性 (電気睡眠の研究 第6報) **17**, 761-765
- 612.825:612.819.912
1284 (1956) 堀 佐喜子
 犬の大脳皮質帯回に於ける呼吸抑制並びに促進領域について **18**, 948-957
- 612.825:612.819.912
1285 (1956) 堀 佐喜子
 犬の大脳皮質海馬回に於ける呼吸抑制並びに促進領域について **18**, 958-964
- 612.825:612.014.424
1286 (1957) 伊藤文雄
 人間の頭部通電による運動現象の生理学分析 **19**, 826-836
- 612.825:612.015.1
1287 (1957) 堀田利夫
 実験的痙攣に伴う大脳皮質のグルタミン酸量の変動 **19**, 288-291

- 612.825 : 612.014.469
1288 (1958) 藤森 明
 中枢神経運動系に対する β -ハイドロオキシ-グルタミン酸の作用 **20**, 853-862
- 612.825 : 612.014.469-064
1289 (1958) 永井一夫
 中枢神経運動系に対する ディフェニール 並びにその誘導体の制止作用 **20**, 905-912
- 612.825.1
1290 (1954) 中浜 博
 焦点痙攣の実験生理学的研究 **16**, 61-71
- 612.825.1 : 612.014.469
1291 (1951) 岡本彰祐
 中枢神経系の化学的発働物質としての glutamin 酸 Na に対する蛋白体及び組織乳剤の抑制現象及び脱制止現象について **13**, 555-562
- 612.825.1 : 612.014.469
1292 (1952) 伊藤秀三郎・谷 道也・佐藤佐与・小田 満
 Glutamin 酸 Na 及び Asparagin 酸 Na の皮質並びに皮質下運動系に対する作用 **14**, 392-394
- 612.825.1 : 612.014.424.4
1293 (1954) 加藤綱蔵
 大脳皮質より起る 強縮痙攣の電気的刺戟の強さによる全身への波及現象について **16**, 155-161
- 612.825.1 : [612.35 + 612.357.15
1294 (1954) 竹田達男
 胆汁及び胆汁酸塩による テンジクネズミの脳髄性痙攣について **16**, 626-628
- 612.825.1 : 612.357.15
1295 (1954) 竹田達男
 胆汁及び 諸種胆汁酸塩による 皮質性並びに脳髄性痙攣に就いて **16**, 747-751
- 612.825.1 : [612.014.424 + 612.014.469
1296 (1956) 西願幹雄
 大脳半球内面に於ける 皮質性間代性痙攣の最終共通領野の法則について **18**, 890-898
- 612.825.1 : 612.821.7 : 612.014.423 : 612.014.45
1297 (1956) 朝比奈一男・藤本辰一
 睡眠中の音刺戟による 大脳皮質誘発電位 について **18**, 899-905
- 612.825.1 : [612.746 : 612.744
1298 (1957) 桜井 栄
 ペンタゾール痙攣に伴う 中枢神経系 グルタミン酸量の変動 **19**, 376-382
- 612.825.1 : 612.014.469
1299 (1957) 村松清江
 犬大脳皮質運動領にL(+)グルタミン酸, D(-)グルタミン酸, DL グルタミン酸及びグルタチオン等の Na 塩を与えた場合の運動現象に就いて **19**, 972-976
- 612.825.1 : 612.014.469
1300 (1958) 海老坂 衷
 クレゾール痙攣とインシュリン痙攣に就いて **20**, 495-503
- 612.825.1-083 : 612.014.424
1301 (1952) 林 譲・小田 満・長田良平
 離体切断犬の 大脳皮質刺戟電流の強さによる 離運動の波及について **14**, 323-326
- 612.825.25 : 612.014.469
1302 (1952) 伊藤秀三郎
 中枢神経運動系に対する 諸種化学物質の作用について **14**, 120-125
- 612.825.25
1303 (1952) 小田 満
 皮質性離運動とその神経経路に就いて **14**, 315-322
- 612.825.25 : 612.357 : 612.76 : 597.82
1304 (1954) 竹田達男
 ガマ及びカエルの 中枢神経系に対する 胆汁の姿勢変化及び運動性の作用 **16**, 743-746
- 612.825.3 : [612.014.424 + 612.766.1] : 612.117
1305 (1952) 小田 満・林 雅男
 犬の頭部通電癲癇時と 筋運動時との血液濾過速度について **14**, 390-391
- 612.825.3 : [612.35 + 612.357.15
1306 (1954) 竹田達男・西山信雄・林 雅男
 胆汁及び胆汁酸による 皮質性間代性痙攣 **16**, 623-625
- 612.825.3 : 612.014.469-064
1307 (1957) 本田定一
 グルタミン酸ナトリウムの 皮質性癲癇痙攣作用に 対する共存蛋白質の抑制効果の分析 **19**, 598-603
- 612.825.5 + 612.826.4] : 612.282/2
1308 (1956) 正木光児・成田 稔・岩本清美
 大脳皮質及び 間脳に於ける 呼吸制止領野の独立性 **18**, 463-471
- 612.825.57 : 612.014.1
1309 (1957) 清水増子
 味覚の細胞生理学的研究 (第1報) 味上皮に於ける 各種酵素の分布 **19**, 254-259

- 612.825.57 : 612.014.1
1310 (1957) 清水増子
 味覚の細胞生理学的研究 (第2報) 舌上皮の溶在性 SH 基と苦味の感覚との関係について **19**, 491-497
- 612.825.57 : 612.014.1
1311 (1958) 清水増子
 味覚の細胞生理学的研究 (第3報) 舌上皮の phosphate と呈味物質との関係特に甘味と苦味について **20**, 422-424
- 612.825.57 : 612.014.1
1312 (1958) 清水増子
 味覚の細胞生理学的研究 (第4報) 味上皮に於ける SH 基の相対的濃度について **20**, 425-429
- 612.825/8 : 612.014.469 : 612.21
1313 (1956) 成田 稔
 中枢神経系内クエン酸 Na 微小刺戟による呼吸運動変化に関する基礎的研究 呼吸制止領野, 脳室及び血管内注射の呼吸抑制閾値について **18**, 935-942
- 612.826.3 : 612.21
1314 (1956) 成田 稔
 中脳と呼吸運動 **18**, 919-934
- 612.826.3-83
1315 (1951) 谷 道也・名和 精・伊藤秀三郎
 中脳短縦断による去脳硬直 **13**, 533-537
- 612.826.3-083
1316 (1951) 工藤達之・佐藤佐与
 去脳硬直に於ける陽性硬直核 **13**, 538-541
- 612.826.4 : 612.822.3 : 612.63
1317 (1955) 杉田長久
 自律中枢脳波と性機能 (第1編) 自律中枢脳波と発情, 妊娠 **17**, 834-847
- 612.826.4 : 612.822.3 : 612.63.031.1
1318 (1955) 杉田長久
 自律中枢脳波と性機能 (第2編) 自律中枢脳波に及ぼす卵胞ホルモンの影響 **17**, 848-852
- 612.821.4 : 612.822.3 : 612.662
1319 (1955) 杉田長久
 自律中枢脳波と性機能 (第3編) 自律中枢脳波に及ぼす黄体ホルモンの影響 **17**, 853-857
- 612.826.4 : 612.014.424 : 612.143
1320 (1957) 林 彰東
 第Ⅲ脳室壁刺戟に依る血圧変動に就いて **19**, 260-271
- 612.826.5 : 612.014.469
1321 (1951) 工藤達之・佐藤佐与
 赤核の化学的刺戟によつて起る運動現象とその神経経路 **13**, 542-546
- 612.83 脊髓**
- 612.83 : 612.014.424
1322 (1953) 堀口 隆・橋野昇一・小笠原今男
 電気麻酔と脊髓機能 **15**, 368-370
- 612.83 : 612.014.423
1323 (1954) 稲田素臣
 脊髓並びに根の定常電位について **16**, 547-551
- 612.83-083 : 612.183/4
1324 (1942) 銭場武彦
 脊髓前根及び後根の切断と下肢の血管口径 **7**, 444-447
- 612.83+612.819] : 612.014.423.3
1325 (1956) 和佐野 忠
 脊髓根 および末梢神経にみられる電気的極性について **18**, 193-203
- 612.832 : 612.014.423
1326 (1956) 下村弥彦
 脊髓電位の分析 **18**, 728-733
- 612.833
1327 (1944) 猪銅道夫
 頸反射の研究 **9**, 654-663
- 612.833.13 : [612.133/4-083+612.014.43
1328 (1958) 宮内和博
 局所の血行遮断及び寒冷曝露に依る血管反射相互間の比較, 並びに 此等血管反射の個人差に就いて **20**, 504-512
- 612.833.13/4 : [612.79 : 612.014.43
1329 (1956) 大原孝吉
 皮膚温度刺激時の鼻腔粘膜血管反射に就いて **18**, 337-346
- 612.833.135
1330 (1949) 銭場武彦
 毛細血管反射に関する実験 **11**, 8-11
- 612.833.367 : 612.33-083
1331 (1959) 三宅隆雄
 小腸-大腸反射について **20**, 744-751
- 612.833.46 : 612.461.6
1332 (1955) 中根公正・新田貴一・村田和子
 頸動脈腺-腎反射 高張食塩水注入による尿量及び尿中 Cl 濃度の変化 **17**, 416-419
- 612.833.467.1 : 612.833.33
1333 (1955) 入沢優氏
 膀胱よりの圧反射 膀胱小腸反射 **17**, 420-427

- 612.833.7
1334 (1955) 猪飼道夫
 健康人における体肢の交叉性反射 17, 253-262
- 612.833.7
1335 (1955) 山崎恒雄
 圧反射の研究 自動的呼吸運動と他動的運動の四肢筋緊張及び膝蓋腱反射閾値に対する影響 17, 32-38
- 612.833.7
1336 (1955) 山崎恒雄
 圧反射の研究 頸動脈洞加圧及びつまみ刺激の四肢筋緊張に対する影響について 17, 445-450
- 612.833.7
1337 (1955) 山崎恒雄
 圧反射の研究 皮膚圧迫の正常動物(兎, 猫, 犬)の四肢筋緊張に及ぼす影響について 17, 472-477
- 612.833.79 : 612.014.47 : 612.844
1338 (1955) 磯野 弘
 皮膚圧反射の研究(第1編) 眼球への皮膚圧反射について 17, 318-326
- 612.833.79 : 612.014.47 : 612.844
1339 (1955) 磯野 弘
 皮膚圧反射の研究(第2編) 眼球への皮膚圧反射と眼球への頸反射 17, 360-373
- 612.833.79 : 612.014.47 : 612.844
1340 (1955) 磯野 弘
 皮膚圧反射の研究(第3編) 眼球への皮膚圧反射と迷路 17, 374-382
- 612.833.79
1341 (1956) 山本喜昭
 皮膚反射に関する研究(第2報) カエルの皮膚-呼吸反射における前脳の役割について 18, 641-645
- 612.833.8 : 612.834
1342 (1956) 下村弥彦
 伸筋, 屈筋ノイロンの電圧-容量曲線とこれに及ぼす脳髄切断の影響 18, 723-727
- 612.833.81
1343 (1937) 八十島外衛
 条件反射の研究(1) 条件刺激の単独作用時と刺激効果との関係及び後退共与条件反射の持続訓練に於ける反応効果の消長 2, 158-166
- 612.833.81
1344 (1937) 八十島外衛
 条件反射の研究(2) 条件反射機構に於ける陽性感応現象に就いての実験 2, 167-177
- 612.833.81
1345 (1938) 黒羽根忠雄
 条件反射の研究(3) 陽性感応現象の研究(2) 3, 333-339
- 612.833.81
1346 (1939) 黒羽根忠雄
 条件反射の研究(4) 陽性感応現象の研究(3) 4, 267-274
- 612.833.81
1347 (1939) 黒羽根忠雄
 条件反射の研究(5) 陽性感応現象の研究(4) 4, 275-281
- 612.833.81
1348 (1939) 野沢市作
 条件反射の研究(6) 特殊な条件反射の形成過程に於ける条件反射性効果の現われ方に就いて 4, 282-285
- 612.833.81
1349 (1939) 野沢市作
 条件反射の研究(7) 条件反射形成の過程に於ける条件反射効果の消長 4, 286-292
- 612.833.81
1350 (1939) 野沢市作
 条件反射の研究(8) 挿時条件反射及び逃避条件反射の特性及び夫等の条件反射の接時複合による諸現象に就いて 4, 293-306
- 612.833.81 : 612.313.3
1351 (1942) 西井 了
 条件反射の研究(9) 条件及び無条件反射性唾液に就いての2, 3の観察 7, 233-238
- 612.833.81
1352 (1942) 西井 了
 条件反射の研究(10) 条件反射の合成と分析に就いての実験 7, 239-249
- 612.833.81
1353 (1942) 西井 了
 条件反射の研究(11) 感応現象主として陰性感応現象に就いて 7, 250-259
- 612.833.81
1354 (1944) 川上正義
 条件反射の研究(12) 陰性感応現象に就いての2, 3の観察 9, 166-174
- 612.833.81
1355 (1939) 青木清四郎
 同種並びに異種条件刺激の汎化と誘導 4, 33-43

- 612.833.81 : 612.014.465
1356 (1939) 青木清四郎
 諸種麻酔薬の条件反射に対する影響 **4**, 44-48
- 612.833.81
1357 (1939) 青木清四郎
 条件反射の加重現象に就いて **4**, 49-53
- 612.833.81
1358 (1948) 吉井直三郎
 犬の条件行動の反復による変化と覚醒アミンの影響 **10**, 225-233
- 612.833.81
1359 (1948) 吉井直三郎・志水 敏
 無報酬による連鎖条件行動の変化に就いて **10**, 234-237
- 612.833.81
1360 (1948) 志水 敏
 白鼠の行動潜時について **10**, 238-241
- 612.833.81
1361 (1948) 吉井直三郎・志水 敏
 「行動の分離」の一条件 **10**, 303-304
- 612.833.81
1362 (1948) 志水 敏
 条件制止実験中に現れた白鼠の異常行動 **10**, 305-307
- 612.833.81 : 612.014.424
1363 (1948) 志水 敏
 電撃による行動の退行 **10**, 308-310
- 612.833.81 : 612.313.3
1364 (1956) 高橋日出彦
 人間に於ける唾液条件反射形成に就いて **18**, 557-563
- 612.833.81 : 615.96
1365 (1958) 千葉康則・田中守也・巫 水綿・田里健二
 自律神経遮断剤の条件反射に及ぼす影響 **20**, 84-89
- 612.833.8/9
1366 (1949) 志水 敏
 条件防禦反射の潜時と反射中枢の興奮性 **11**, 92-96
- 612.833.9
1367 (1949) 志水 敏・大賀泰郎
 白鼠の明暗弁別跳躍潜時の度数曲線 **11**, 130-132
- 612.833.9
1368 (1955) 猪飼道夫
 動作に先行する抑制機構 **17**, 292-298
- 612.833.94 : 615.778.1
1369 (1957) 東田昭二・丸山治朗・小倉博人
 フェノール系物質の複シナプス反射に及ぼす影響 **19**, 852-857
- 612.833.95-083
1370 (1939) 戸塚武彦
 刺激と興奮との間の関係に於ける種々相、並びにそれらの横型的考察 **4**, 406-420
- 612.833.97-084 : 612.79 : 612.014.47 : 597.82
1371 (1953) 渡辺千春
 皮膚圧迫に依つて脊髄蛙にみられた 2, 3 の現象について **15**, 655-658
- 612.834
1372 (1956) 下村弥彦
 脊髄運動ノイロンの恢復過程(殊に伸筋及び屈筋支配神経の比較) **18**, 718-722
- 612.84 視角, 生理光学**
- 612.842 眼の血管膜, 虹彩, 脈絡膜**
- 612.842.2 : 612.819.3
1373 (1956) 岡本歌子・香内信一
 小脳性散瞳の末梢神経機構 **18**, 347-352
- 612.842.2 : 612.842.4
1374 (1956) 岡本歌子
 小脳性散瞳の局在と化学刺激との関連性 **18**, 405-412
- 612.843 視束(視神経), 網膜**
- 612.843.14
1375 (1942) 細谷雄二
 視紅再生の促進に関する新知見 **7**, 499-504
- 612.843.14
1376 (1957) 細谷雄二
 視質に関する最近の問題 **19**, 227-235
- 612.843.14
1377 (1957) 李 廷霖
 視紅並びに視紫の再生に対するピロカルピン及びアレコリンの作用について **19**, 837-842
- 612.843.21 : 598.617
1378 (1950) 後藤昌義
 鶏のエンブリオならびにヒナの網膜活動電圧について **12**, 67-71
- 612.843.21 : 597.82
1379 (1950) 瀧澤教三
 蛙の網膜働作電圧に於ける周期的振動について **12**, 179-184

- 612.843.21 : 612.843.36
1380 (1950) 花岡利昌
 単純な網膜の単一光受容器の働作流と明順応の効果 **12**, 197-200
- 612.843.21
1381 (1950) 後藤昌義
 カエルの網膜の活動電圧における次ぎ次ぎの2つの刺激の効果 **12**, 257-260
- 612.843.21
1382 (1952) 附田 恵
 光感覚の漸増及び漸減の経過に就いて **14**, 432-443
- 612.843.21 : 597.82
1383 (1953) 吉田 穰
 ヒキガエルの網膜における静電位の本態及び静電位による順応の研究 **15**, 133-142
- 612.843.31
1384 (1951) 福田邦三・大川真澄
 日本人の感覚する色調の名と波長との関係に就いて **13**, 179-186
- 612.843.58 ; 535.245
1385 (1950) 坂部弘之
 電気閃光に関する研究(第1報) 電気閃光閾値と照度との関係 **12**, 72-75
- 612.843.6
1386 (1948) 石川 康
 両眼の対応性の研究(所謂分界線に就いて) **10**, 171-177
- 612.845 色覚の障害**
- 612.845.5-08
1387 (1953) 福田邦三・大川真澄
 Anomaloscope 第1型の原理に対する考察 **15**, 301-315
- 612.845.5 : 612.843.32
1388 (1951) 大川真澄
 色覚異常者の主観的スペクトルに就いて(第1報) 第二色盲と判定された色盲の主観的スペクトルに就いて **13**, 385-398
- 612.85 聴覚**
- 612.85.012.4-06
1389 (1957) 斎藤貞男
 騒音の生体に及ぼす影響に就いて(第I編) 身体諸反応に及ぼす影響 **19**, 1069-1079
- 612.85.012.4-06 : 612.122
1390 (1957) 斎藤貞男
 騒音の生体に及ぼす影響に就いて(第II編) 血糖値の変動 **19**, 1080-1090
- 612.85.012.4-06 : 612.122 : 612.822.6
1391 (1957) 斎藤貞男
 騒音の生体に及ぼす影響に就いて(第III編) 脳各部位破壊後に於ける血糖値の変動様相 **19**, 1091-1099
- 612.858.5 : 612.014.423
1392 (1940) 佐藤信也
 聴器に於ける働作電流の研究 **6**, 415-425
- 612.858.8
1393 (1950) 佐々木寛昌
 聴原発作を誘発する刺激と所謂順応現象 **12**, 284-289
- 612.858.8 : 612.76
1394 (1950) 佐々木寛昌・山中太郎
 聴原発作と行動の退行 **12**, 291-294
- 612.858.8 : 612.563
1395 (1950) 佐々木寛昌
 聴原発作と脳及び末梢の温度変化について **12**, 295-303
- 612.858.8 : 612.171.1
1396 (1951) 佐々木寛昌
 聴原発作とE.K.G **13**, 151-158
- 612.858.8
1397 (1954) 樋渡志良
 聴原発作と迷路反射 **16**, 87-90
- 612.858.8 : [612.822.8 + 612.741.1
1398 (1954) 樋渡志良
 聴原発作時の脳波と筋電図 **16**, 91-93
- 612.858.8 : 612.014.45
1399 (1953) 樋渡志良
 断続刺激による聴原発作の研究(第1報) 発作の型について **15**, 87-92
- 612.858.8 : 612.014.45
1400 (1954) 樋渡志良
 断続刺激による聴原発作の研究(第2報) 中枢興奮状態の加重及び消滅について **16**, 94-96
- 612.86 嗅覚**
- 612.867.1
1401 (1957) 女川 清
 嗅刺激感受性に対する嗅粘膜の特性について(第1報) 嗅刺激感受性と嗅粘膜色度との関係 **19**, 189-193
- 612.867.1
1402 (1957) 女川 清
 嗅刺激感受性に対する嗅粘膜の特性について(第2報) 嗅粘膜活動電位と嗅粘膜色度との関係 **19**, 194-197

- 612.867.1
1403 (1957) 女川 清
 嗅刺戟感受性に対する嗅粘膜の特性について (第3報) 嗅球のスパイク放電頻度と嗅腺分泌物及び嗅粘膜色度との関連性 **19**, 198-205
- 612.87 味覚**
- 612.87 : 612.744.21
1404 (1950) 三村信之
 疲労に基く甘味閾値の変動に就いて **12**, 76-78
- 612.87 : 612.766.1
1405 (1951) 近内康夫
 労働作業の味覚に及ぼす影響に就いて (第1報) **13**, 243-246
- 612.87 : 612.766.1
1406 (1953) 近内康夫
 労働作業の味覚に及ぼす影響に就いて (第2報) **15**, 493-497
- 612.88 一般感覚, 触覚, 平衡感覚**
- 612.881-053.4
1407 (1936) 福田邦三
 幼な児における空間知覚と裏返し文字について **1**, 197-202
- 612.883 : 612.813-083 : 597.82
1408 (1943) 加納豊哉
 単一神経線維の働作流を目標とした触覚の研究 (第1報) 藁の皮膚に発足する求心性神経線維 **8**, 191-195
- 612.883 : 612.813-083 : [599.742 + .81
1409 (1943) 加納豊哉
 単一神経線維の働作流を目標とした触覚の研究 (第2報) 温血動物の触線維に就いて **8**, 196-199
- 612.883
1410 (1943) 神部勝之助
 重量感覚に就いての研究 (1) 重量感覚の識別閾に就いて **8**, 241-249
- 612.883
1411 (1943) 神部勝之助
 重量感覚に就いての研究 (2) 判断時による重量感覚敏度に就いて **8**, 250-258
- 612.883
1412 (1943) 土橋英夫
 圧覚に就いての実験 (1) 種々なる実験条件下に於ける圧点の刺戟閾に就いての研究 **8**, 259-268
- 612.883
1413 (1943) 土橋英夫
 圧覚に就いての実験 (2) 所謂一圧点の反復頻数刺激による圧覚刺激閾の時間的消長に就いての研究 **8**, 269-274
- 612.884 : 612.014.423
1414 (1954) 小西喜久治
 皮膚痛覚器に於ける slow process 並びに二重痛覚の問題 **16**, 199-206
- 612.886 : 612.766.2
1415 (1944) 猪飼道夫
 直立姿勢の研究 (第1) 直立時動揺曲線の分析 **9**, 197-199
- 612.886 : 612.766.2
1416 (1944) 猪飼道夫
 直立姿勢の研究 (第2) 直立時動揺の計量 **9**, 200-203
- 612.886 : 612.766
1417 (1944) 猪飼道夫
 直立姿勢の研究 (第3) 急激な受動的姿勢変化に続いて起る姿勢の変化に就いて **9**, 204-208
- 612.886 : 612.766
1418 (1944) 猪飼道夫
 直立姿勢の研究 (第4) Goniometer顛倒試験に於ける姿勢変化の時間的経過に就いて **9**, 209-214
- 612.886 : 612.766
1419 (1944) 猪飼道夫
 直立姿勢の研究 (第5) Goniometer廻転角速度と顛倒角とに就いて **9**, 215-218
- 612.886 : 616.28-008.15
1420 (1944) 猪飼道夫
 直立姿勢の研究 (第6) 嚙啞者を被検者とした研究 **9**, 219-222
- 612.886 : 612.014.424 : 597
1421 (1955) 福山正臣
 魚類の全体刺激に関する研究 **17**, 825-833
- 612.89 交感神経系**
- 612.897 : 612.014.424
1422 (1957) 小見 勇
 自律神経線維の電気生理学的分析 心臓神経中 adrenergic fibre と cholinergic fibre の混在に就いて **19**, 1100-1116
- 612.897/8
1423 (1958) 新島 旭・松本義雄
 内臓の求心性神経の多重支配について **20**, 314-317
- 612.898
1424 (1956) 宮川鉄男
 内臓及び下腹両神経刺激の回盲括約部の運動に及ぼす影響 **18**, 472-480

著者名索引

ア

- 会田 勘二 6, 117-122
 青井 保男 19, 1002-1010
 青木 一郎 18, 710-717
 青木清四郎 4, 33-43, 44-48, 49-53, 5, 219-225, 231-240, 348-355, 6, 342-344
 青葉 誠 9, 833-839, 840-843
 青柳 幸男 20, 486-494
 青山 辰夫 20, 235-252
 赤畑 正光 19, 843-851
 赤羽 武夫 3, 310-317
 秋元 新平 8, 76-87, 299-302, 9, 48-54, 134-138
 秋山 欣勇 17, 283-291
 朝井 清 8, 299-302, 9, 524-530, 531-535, 536-539, 857-861
 浅井 貞 1, 266-268, 2, 144-146
 朝比奈一男 17, 10-15, 587-592, 593-597, 598-600, 601-602, 603-606, 18, 387-389, 899-905
 芦塚 陽 9, 886-888
 足立千鶴子 13, 123-125, 434-437, 14, 386-387
 阿知波繁一 14, 106-109, 110-113, 388-389, 514-516, 15, 257-259, 619-621, 16, 84-86, 152-154, 19, 482-490, 562-567, 568-571, 1301-1306, 20, 90-93
 東 健彦 20, 775-800
 阿部 祐吉 8, 281-287, 9, 36-41, 300-304, 305-311
 味木 福孫 6, 464-477, 638-646
 天野 一忠 20, 41-49
 天野 恵 20, 63-65
 網藏平三郎 9, 406-409
 綾井治一郎 15, 81-86
 新井祐太郎 7, 145-166
 荒木辰之助 16, 552-554
 荒木 啓 18, 752-766
 有田宗太郎 5, 219-230, 231-240
 有馬 洋恵 14, 401-408
 有村 章 17, 774-776, 19, 26-30

イ

- 有本 和男 14, 70-76, 77-80, 81-85, 86-91
 安藤 毅 14, 1-9
 安藤 美夫 15, 16-19, 20-24
 飯田 精一 18, 734-751
 飯田 敏行 11, 73-78, 79-85, 13, 513-517
 飯塚 恒治 11, 126-127, 13, 309-312, 459-461, 14, 498-500, 501-503, 525-529, 530-532
 飯塚 寿夫 8, 54-59
 飯野 富雄 1, 79-89, 90-93, 165-169, 4, 321-327
 飯野 貢 17, 766-773
 猪飼 道夫 9, 197-199, 200-203, 204-208, 209-214, 215-218, 219-222, 654-663, 17, 253-262, 292-298
 池上鑑十郎 8, 299-302
 池 留雄 7, 303-313
 伊崎 輝雄 19, 1002-1010
 石井 猷一 8, 694-698
 石井 公正 12, 216-223
 石井(中根)公正 13, 399-407
 石井 恒夫 7, 1-21, 9, 573-583
 石川 勲 3, 363-368, 5, 21-31, 6, 229-232, 233-238
 石川 康 10, 171-177, 258-265
 石田 絢子 19, 113-120
 石田 俊雄 19, 272-283, 892-896
 石河 利寛 14, 487-489, 490-493, 494-497
 石丸 能照 8, 369-377, 378-383, 384-387
 石若 大三 11, 266-269
 磯野 弘 17, 318-326, 360-373, 374-382
 板井 忠生 15, 564-569, 17, 807-809
 板倉 一民 18, 571-581, 582-584
 井田 明輝 8, 583-597, 598-610, 611-624
 市岡 正道 13, 224-229
 市河 三太 8, 684-687, 9, 649-653, 701-703, 716-720, 10, 103-105, 12, 49-55, 56-61
 伊藤 真次 7, 101-107, 108-113, 114-116, 517-528, 8, 648-662, 663-667, 9, 493-499, 10, 123-125, 126-127, 128-129, 130-132, 287-289, 290-292, 11, 12-

- 伊藤秀三郎 10, 88-90, 11, 135-136, 13, 533-537, 14, 60-63, 120-125, 392-394
- 伊藤文雄 19, 826-836
- 伊藤正徳 9, 128-133
- 伊藤光彰 16, 643-646
- 糸賀宜三 16, 664-672
- 井戸東一 7, 195-200, 201-205, 206-211
- 井上章 6, 117-122, 10, 76-81, 82-87, 117-122, 11, 27-30, 31-35, 37-45, 46-52, 53-56
- 井上五郎 16, 316-325, 326-335
- 井上正士 16, 503-511
- 井上隆利 9, 844-847, 848-851, 852-856
- 井上太郎 14, 517-524, 20, 430-443, 444-452, 734-743
- 井上敏 17, 451-454, 455-461
- 井上康夫 19, 67-71, 72-75, 76-80
- 猪俣広 11, 169-175
- 稲垣克彦 10, 178-182
- 稲田朝美 1, 129-132
- 稲田素臣 16, 538-546, 547-551, 552-554
- 揖揚民雄 16, 555-565
- 今井章之 11, 27-30
- 今西義晃 19, 132-142
- 入江紀文 15, 570-574, 17, 619-622
- 伊利憲助 19, 165-173
- 入沢彩 18, 564-567, 568-570
- 入沢宏 9, 889-892, 10, 46-49, 100-102, 11, 19-21, 22-23, 13, 203-210, 14, 98-101, 267-271, 16, 52-55, 18, 564-567, 568-570
- 入沢優氏 17, 420-427, 535-539
- 岩木五郎 13, 351-355, 356-359
- 岩崎隼太 15, 524-533, 19, 143-151, 1234-1238, 1239-1256, 20, 163-169
- 岩瀬昇 11, 1-7
- 岩瀬善彦 11, 164-168, 13, 431-433, 17, 761-765
- 岩田賢次 17, 82-98
- 岩淵好二 9, 631-636, 637-641
- 岩本清美 18, 463-471
- ウ
- 植木俊次 16, 97-103, 115-123
- 上田三郎 18, 447-453
- 上田是 19, 1002-1010
- 上田哲也 16, 605-621
- 上野一晴 5, 411-414, 6, 113-116, 213-220, 683-685, 7, 167-170, 397-406
- 上野喬 19, 26-30
- 上山巖 17, 241-252
- 魚住浚平 7, 550-554
- 宇佐美駿一 19, 468-481, 20, 1015-1023
- 牛山順司 14, 386-387
- 内田倅喜 20, 950-955
- 内村俊雄 14, 10-14, 15-20, 21-23
- 宇野幸 10, 1-8
- 浦田章子 12, 168-174
- 浦部小次郎 9, 518-523
- 浦本政三郎 9, 833-839
- 工
- 江口文野 15, 454-463, 524-533
- 江上義之 7, 686-695, 9, 452-462, 463-469, 470-477, 478-491, 556-565, 566-572, 726-731, 742-748, 749-754
- 江藤喬 12, 140-149, 150-153, 154-156, 157-161
- 江田得一 4, 3-11, 379-389
- 海老坂衷 20, 495-503
- 海老原千春 12, 321-324, 327-328
- 遠藤尚義 8, 303-311
- 才
- 考川賢良 19, 416-424
- 及川恒一 12, 329-332, 333-336, 337-340
- 大賀泰郎 11, 130-132
- 大川重徳 3, 346-350, 351-359, 4, 23-29
- 大川真澄 13, 179-186, 385-398, 15, 301-315
- 大木誠止 10, 9-16
- 大久保金蔵 5, 195-202, 203-207, 6, 281-290, 291-304
- 大久保義夫 17, 77-81, 18, 943-947, 20, 453-461, 462-467, 468-475
- 大倉淳男 19, 383-387, 388-392
- 大島恭一 10, 95-99
- 大島公明 14, 517-524
- 15, 16-17, 18, 15, 534-538
- 大柴進 20, 1004-1014, 1015-1023

- 大武 八郎 12, 19-22, 23-25, 26-29, 30-33
 大谷 卓造 7, 272-280, 281-285, 286-292, 9, 368-377, 355-365
 大谷 達雄 19, 1136-1147
 太田 三郎 15, 93-100, 226-229
 巨田 泰信 5, 14-20, 260-265
 大野 真一 8, 389-393, 9, 113-116, 117-120, 223-233
 大野 喜一 17, 567-575
 大原 孝吉 10, 287-289, 18, 337-347, 19, 1315-1322
 大原 重信 14, 468-474, 15, 47-57
 大浜 博利 20, 713-722
 大村 正 6, 32-41, 42-48, 221-228, 527-534, 8, 330-335, 9, 223-236
 大山 英男 7, 756-760
 小笠原今男 15, 368-370, 17, 16-21, 271-274, 528-534, 20, 382-387
 緒方 維弘 15, 175-185
 岡井 一雄 15, 397-401
 岡 敬三 19, 613-620, 20, 513-519, 520-524, 956-958
 岡 芳包 9, 359-364, 365-367
 岡田 乾一 16, 629-630
 岡田 斌 19, 629-635
 岡田 忠雄 15, 559-563, 18, 822-825, 826-833
 岡田 博匡 15, 186-189, 190-192, 193-195, 196-202, 324-333, 334-337
 岡部 義数 20, 752-763
 岡本 歌子 18, 347-352, 405-412, 845-848, 19, 892-896
 岡本 彰祐 13, 555-562, 18, 845-848, 19, 892-896, 1034-1036
 岡本 智量 17, 820-824
 岡本 満男 19, 438-443
 小口 周男 16, 771-776, 17, 517-523, 726-732
 小川 庄吉 12, 168-174
 小川 義雄 11, 57-59, 60-65, 66-71, 97-101, 102-103, 104-106
 沖田 実 14, 98-101, 267-271
 荻野 修 17, 1-9
 荻野 舜亮 20, 253-261, 525-532
 荻野 正之 20, 296-306
 奥田 宣 7, 101-107, 505-516
 奥田 八雄 17, 753-760
 奥津 国福 12, 362-367
 奥村 修 20, 966-987, 988-996, 997-1003
 奥山 文雄 19, 292-303
 奥 義弘 7, 481-498
 小倉 博人 19, 852-857
 刑部 宏 18, 906-918
 長田 泰公 12, 168-174
 長田 良平 14, 323-326
 小沢 孝 15, 253-256, 16, 397-403
 小沢 弘 8, 349-368
 越智 勲 17, 781-789
 小田中 貞 13, 454-458, 14, 114-119, 352-354, 355-357, 15, 143-149, 271-275, 276-278, 279-280, 346-349, 350-352
 小田 満 14, 56-59, 64-69, 315-322, 323-326, 390-391, 392-394
 女川 清 19, 189-193, 194-197, 198-205
 小見 勇 19, 1100-1116
 織部 道雄 9, 708-715
- 力
- 賀川 竜夫 1, 42-51, 73-78
 垣田 堅二郎 19, 897-902, 20, 123-138
 柿沼 俊助 19, 1257-1262
 柿沼 美清 12, 62-66, 325-326
 景山 博水 9, 857-861
 笠原 竜喜 18, 875-889
 榎井 道仁 6, 378-384, 586-591, 592-598, 7, 418-423
 菓子井 幸則 17, 1-9, 18, 689-695, 20, 318-324, 325-330
 加藤 鋼蔵 16, 155-161
 加藤 漸 20, 801-811
 加藤 保 10, 151-156, 258-265
 加藤 初蔵 13, 319-322, 323-327
 加藤 政孝 18, 767-774, 864-874
 加藤 守 20, 331-340
 加藤 良二 16, 454-458, 459-469, 18, 15-25, 26-33, 19, 347-354
 加太呷一郎 20, 50-51
 片山 正紀 6, 478-492, 510-525
 金杉 重信 4, 344-347, 348-351
 加納 豊哉 8, 191-195, 196-199, 200-203

- 694-698
 上岡文雄 5, 596-604, 605-609, 610-613, 8, 288-298
 上小鶴克巳 6, 233-238, 535-543, 544-554, 555-559
 神山貞二 14, 338-344, 345-351
 龜山重徳 19, 572-581
 唐川正典 12, 103-106, 107-110, 111-115, 116-120, 269-271, 272-273, 274-279, 280-283
 唐木田良成 19, 1257-1262
 河合仁 16, 647-655, 18, 147-161
 川上政雄 3, 199-224
 川上正義 8, 67-75, 319-322, 324-329, 453-460, 9, 166-174, 223-233
 川口国臣 14, 35-40
 川崎元一 4, 18-22, 221-224, 225-236
 川島悦子 16, 177-184, 185-188, 189-192
 川嶋昭司 20, 1-7, 14-19, 20, 477-485
 川田輝夫 15, 59-63, 214-225, 16, 1-11
 川田深太郎 13, 143-145, 14, 24-32, 33-34
 川野輝夫 15, 524-533
 川畑愛浩 4, 212-220, 434-437, 438-443, 444-448, 5, 76-84, 245-254, 255-259, 7, 54-57, 8, 648-662
 河村謙二 10, 165-170
 河村虎太郎 6, 316-323, 324-333
 河村洋二郎 15, 428-433, 16, 656-663
 瓦田只二 1, 1-5
 神崎昂 3, 277-283, 284-288, 289-292
 蒲原沃 12, 208-215
 神部勝之助 8, 241-249, 250-258, 275-280
- キ
- 木内茂 3, 47-50, 304-309, 4, 12-17, 189-192
 菊地録二 12, 359-361
 岸欣一 15, 428-433, 16, 656-663, 17, 352-359, 18, 131-139
 岸本正義 9, 833-839, 840-843
 木沢和 5, 51-54, 55-62, 70-75
 岸良尚 13, 328-331, 415-418, 471-475, 14, 102-105, 15, 8-15, 43-46, 17, 39-42, 43-45
- 北川孝 16, 404-419
 北原実衛 19, 1162-1170, 1197-1216
 北原藤子 17, 10-15, 593-597, 598-600, 601-602, 603-606, 18, 387-389
 北村昭 18, 380-386
 北村尚信 16, 12-16, 17-26
 鬼頭京子 13, 434-437, 510-512, 14, 386-387
 木附一人 19, 506-518
 城所進 19, 1002-1010
 木野勢新次郎 4, 193-198, 199-211
 木村一雄 12, 91-102, 13, 140-142
 木村光博 16, 169-173
 邱徳金 2, 303-314
 久徳知行 5, 390-393, 394-410
 清谷長源 8, 625-633, 634-641
 清原寛一 9, 83-90, 335-340, 511-517
 清原迪夫 20, 262-279
 金鳴善 1, 290-292
- ク
- 櫛方早苗 11, 259-265
 工藤達之 13, 538-541, 542-546
 久保川道男 19, 1002-1010
 久保田效 16, 752-765
 熊谷信行 4, 328-333, 5, 307-317
 熊坂年成 18, 79-89
 久米幸夫 6, 423-438, 439-458, 459-463, 647-658
 倉沢和秀 17, 798-806
 倉品克一郎 7, 263-271, 745-755
 倉島昭示 15, 25-30, 31-37, 18, 520-526, 527-532
 栗原恒夫 19, 1002-1010
 呉寿典 10, 61-67, 68-75
 紅林康 8, 1-31
 黒田林三郎 3, 23-32, 33-46, 333-339, 4, 267-274, 275-281
 桑崎修 18, 103-107, 108-112, 113-122
 桑原薫三 19, 941-971, 1117-1118, 1119-1122, 1123-1126, 1127-1129, 1130-1135
- ケ
- 景鴻基 15, 504-508, 509-519
 毛塚好忠 1, 22-32, 33-41, 79-89

コ

- 小池 昇 9, 665-671, 672-676, 721-725, 732-741
 瀨瀬 教三 12, 175-178, 179-184
 香内 信一 18, 347-352
 古 栄裕 18, 165-180
 古賀彦次郎 9, 886-888, 826-832
 小河 博 15, 539-551
 古志谷淳三 19, 1037-1050, 1148-1161
 小島 吉治 20, 66-69, 70-72
 児島 三郎 15, 443-448
 小島 信一 1, 148-157, 2, 147-155
 小嶋 利顕 9, 91-100, 101-112
 小菅 武夫 4, 212-220, 370-377
 後藤 鹿島 14, 427-431, 15, 585-588, 18, 123-130, 19, 1257-1262
 後藤 昌義 10, 157-164, 12, 67-71, 257-260
 小西喜久治 16, 199-206
 小林 丘 10, 190-194, 12, 343-349, 14, 343-349
 小林 庄一 10, 201-205, 11, 142-144
 小溝 協三 6, 92-102, 103-112, 9, 809-812, 10, 33-40, 14, 452-457
 小山 生子 18, 594-604
 近藤 寿郎 12, 1-4, 5-9, 10-13, 14-18
 近藤 達子 13, 518-523
 近藤 勉 16, 193-198

サ

- 崔 漢 因 8, 148-159, 175-184, 642-647
 斎藤 一郎 17, 271-274, 810-815, 816-819, 19, 500-505
 斎藤 幸一郎 2, 213-224, 331-334
 斎藤 定雄 16, 490-492, 499-502
 斎藤 貞男 19, 1069-1079, 1080-1090, 1091-1099
 斎藤 貞二 16, 37-44, 45-51
 斎藤 次郎 19, 1291-1300
 斎藤 義夫 19, 636-651
 佐伯 寛吉 2, 27-34
 酒井 敏夫 11, 246-248
 酒匂 規夫 16, 512-517
 坂田 三弥 19, 1280-1290
 佐川 喜一 17, 402-415, 576-586, 18, 508-519

- 坂部 弘之 12, 72-75
 坂本健次郎 9, 433-452
 桜井 栄 19, 376-382
 桜井 達男 12, 44-48
 桜田 持 5, 274-280, 281-287, 288-292, 293-298, 299-306
 佐々木 謙三 8, 299-302
 佐々木 四郎 2, 187-195
 佐々木 進 1, 79-89, 211-218, 2, 342-362
 佐々木 寛昌 12, 284-289, 291-294, 295-303, 13, 151-158
 佐々木 弘純 14, 102-105, 16, 643-646, 17, 777-780, 19, 284-287, 438-443
 佐々木 祐治 3, 134-138
 佐藤 幹治 5, 32-37, 38-42, 43-50
 佐藤 謙助 8, 185-190, 9, 255-267, 16, 597-604, 17, 46-50
 斎藤 定雄 15, 585-588
 佐藤 佐与 13, 538-541, 542-546, 14, 392-394
 佐藤 進一 14, 427-431, 15, 577-584
 佐藤 信也 6, 415-425
 佐藤 豊次 1, 264-265
 佐藤 晴美 20, 105-114
 佐藤 宏 13, 497-498
 佐藤 浩 18, 484-494
 佐藤 寛之 9, 798-808, 862-872
 佐藤 正彦 6, 478-492, 493-509
 佐藤 正文 7, 555-562, 8, 160-166, 699-705, 9, 341-344, 345-350
 佐藤 素一 15, 31-37
 佐竹 一夫 13, 510-512
 佐竹 結実 8, 103-120, 168-173

シ

- 椎名 房男 12, 350-355
 塩谷 外男 9, 766-776
 塩見 清 16, 777-796
 志多 清英 16, 79-83, 139-151, 174-176
 篠崎 尚次 7, 438-443, 675-679, 696-701, 8, 54-59, 483-486, 487-491, 9, 410-412, 413-416
 篠原 進 11, 266-269
 柴岡 孝雄 15, 241-252
 柴田 定一 6, 268-272, 273-276, 277-280

渋谷善秀 1, 158-164, 2, 258-273, 363-367,
3, 340-345
島寛一 4, 239-251, 252-261
島種邦 18, 317-324
嶋越美夫 15, 402-408, 622-626
島崎賢 9, 237-242, 546-550, 551-555, 642-
645, 646-648
島田久八郎 16, 210-215, 18, 627-640
島田正一 20, 462-467
清水貞男 19, 355-363, 364-375
志水敏 10, 234-237, 238-241, 303-304, 305
-307, 308-310, 11, 92-96, 130-132,
133-134
清水茂弥 1, 16-21, 139-147, 2, 14-18, 35-40
清水孝 19, 986-993
清水増子 19, 254-259, 491-497, 20, 422-424,
425-429
下川末夫 15, 636-645, 17, 1-9
下田武司 19, 103-112
下村弥彦 18, 718-722, 723-727, 728-733
正路倫之助 2, 331-334
正田豊作 16, 484-489, 490-492, 499-502
白石信尚 12, 168-174
白井忠臣 16, 532-534, 18, 69-73, 74-78

ス

末広力雄 20, 50-51
菅原努 18, 353-357, 358-362, 363-365, 366
-369
菅原頼悌 2, 127-133, 156-157, 335-341
菅谷享三 14, 10-14
杉浦正輝 12, 34-37, 38-43
杉崎行三 3, 236-252
杉下孝人 9, 417-426
杉田長久 17, 834-847, 848-852, 853-857
杉本良一 1, 165-169, 8, 313-318
杉山盛枝 11, 145-150, 151-158
杉本順一 20, 988-996
鈴木一雄 9, 813-817, 821-825, 10, 50-52, 53
-56, 57-59
鈴木泰助 7, 639-646, 8, 204-226, 227-240
鈴木董三 16, 518-524
鈴木俊雄 9, 181-195
鈴木利三 7, 101-107

鈴木均 7, 212-232
鈴木正夫 9, 573-583, 798-808, 10, 68-75, 11,
145-150, 17, 223-234
鈴木勝 6, 686-700
鈴木陽之助 11, 86-91, 12, 79-83
須知泰山 11, 12-15, 13, 434-437, 510-512,
14, 386-387
栖原六郎 4, 262-266, 358-369, 5, 169-194,
195-205, 203-207
角忠明 15, 186-189, 190-192, 193-195, 196
-202, 316-323, 324-333, 601-608,
16, 379-383, 384-387, 17, 65-71

セ

西願幹雄 18, 890-898
関口晃 15, 357-367, 16, 27-36, 165-168
関沢外史 9, 223-233
瀬在昌次 13, 146-150
銭場武彦 5, 370-378, 379-385, 6, 49-67, 68-
83, 7, 178-181, 444-447, 761-766,
11, 8-11, 13, 175-178, 198-202, 203
-210, 328-331, 415-418, 471-475,
14, 102-105, 263-266, 15, 8-15, 43
-46, 520-523, 16, 52-55, 207-209,
643-463, 17, 478-480, 17, 777-780,
19, 284-287, 438-443

ソ

曾爾太郎 5, 386-389
蘭田芳澄 19, 121-127, 20, 20-26, 27-31, 32-
40

タ

高岡涉 14, 504-513, 15, 371-382, 646-654
16, 1-11
高雄幸一郎 18, 370-379, 845-848
高木一男 17, 333-338
高木健太郎 4, 352-357, 7, 303-313, 538-549,
9, 677-689, 11, 137-141, 142-144,
12, 216-223, 243-251, 13, 381-384,
15, 226-229
高木孝敬 19, 51-60, 61-63, 64-66
高木作治 7, 272-280, 281-285, 286-292, 13,

- 126-128, 129-131
- 高木 俊蔵 6, 662-666, 667-673, 674-682, 7, 137-144, 473-480, 8, 668-683, 9, 500-503, 504-510
- 高木 喬 19, 81-92
- 高木 鉄男 16, 354-367, 368-373, 586-596
- 高木 良雄 19, 26-30
- 高島 巖 10, 258-265
- 高瀬光一郎 5, 307-317
- 高田 文夫 10, 242-246
- 高橋 惠 14, 41-49
- 高橋 キヨ 9, 500-503
- 高橋 重丈 19, 304-313, 314-319
- 高橋 史郎 8, 461-482
- 高橋 忠幸 4, 183-188, 5, 63-69, 7, 655-658, 659-662
- 高橋 達弥 3, 293-296
- 高橋 英雄 8, 330-335, 9, 163-165
- 高橋日出彦 18, 557-563
- 高橋 宏 20, 950-955
- 高橋 文典 19, 1257-1262
- 高橋 六弥 1, 165-169, 2, 178-183, 184-185
- 高中 聡昭 12, 162-167, 13, 332-336, 337-339
- 高安 健之 18, 325-336
- 滝沢 修三 17, 59-64
- 竹内 大二 8, 200-203
- 竹内 剛 3, 412-418, 9, 175-180
- 岳 繁雄 10, 317-323
- 竹田 達男 16, 623-625, 626-628, 743-746, 747-751
- 竹谷 政雄 15, 389-391
- 竹谷 政男 17, 711-725
- 竹政健次郎 19, 1217-1225, 1226-1233
- 竹村竜之助 19, 1002-1010
- 田口半四郎 5, 231-240
- 田坂 巖 12, 304-309, 310-314, 315-320
- 田崎 一二 2, 315-319, 3, 61-64, 65-67, 10, 95-99
- 田崎 敬 18, 605-613
- 田里 健二 20, 84-89
- 田島 和穂 19, 1257-1262
- 田代 裕 18, 656-658, 659-662, 663-665, 666-668
- 田多井吉之助 19, 407-415
- 伊達辰之助 17, 478-480
- 田中英彦 12, 201-205
- 田中正己 18, 390-394, 395-397, 398-401, 402-404
- 田中光雄 15, 47-57, 524-533
- 田中 稔 9, 144-150, 151-156, 157-162, 614-618
- 田中 守也 20, 84-89
- 田中 義三 1, 219-224, 3, 12-15, 16-22
- 田中 誠禾 19, 1002-1010
- 谷 道也 13, 533-537, 14, 392-394, 16, 685-687
- 田村 満国 4, 390-405
- 丹野 楯彦 1, 135-138, 2, 139-143, 5, 208-218
- 子
- 近内 康夫 13, 243-246, 15, 493-497
- 知久源次郎 1, 67-72, 79-89, 165-169, 211-218
- 千葉 正子 18, 481-483, 585-593, 19, 498-499
- 千葉 康則 20, 84-89
- 中馬 一郎 15, 402-408, 20, 1-7, 8-13, 14-19
- 千早 卓郎 15, 524-533, 566-577, 631-639
- ツ
- 塚田 裕三 15, 627-635, 19, 1031-1033, 1034-1036
- 築山 一夫 13, 499-504, 15, 392-396
- 附田 恵 14, 432-443
- 塚越 三好 9, 584-591, 592-595
- 辻井 主 20, 1-7, 14-19
- 巻岡 務 17, 700-710
- 辻口 清孝 9, 249-254, 690-700
- 辻 豊 10, 17-22
- 津田 安正 19, 425-432, 433-437
- 土橋 英夫 6, 358-362, 566-569, 8, 259-268, 269-274, 281-287, 324-329
- 土橋 義雄 6, 385-395, 7, 427-431, 432-437, 639-646, 9, 42-47
- 円谷 豊 13, 375-380
- テ
- 手塚 玄 5, 335-339, 6, 348-352, 353-357, 570-574

寺師 博 20, 812-822
寺野 敬治 14, 282-286, 287-291

ト

土井 弘正 15, 260-264, 575-576, 16, 535-537
藤条 久成 9, 268-278, 279-282, 283-289, 379-392, 393-396, 397-405
時実 利彦 13, 518-523
時実 博 13, 518-523
戸谷 真澄 19, 1011-1030
戸塚 武彦 3, 134-138, 4, 406-420, 6, 123-125, 15, 498-503
百々 芳雄 7, 599-602, 603-607, 608-630, 631-634
戸出 一郎 20, 1024-1031
鳥羽 英次 5, 240-243
土肥 豊 20, 349-381
富田 勝郎 4, 54-66
富田理一郎 1, 203-210, 225-229
豊田 昊衍 9, 777-786, 787-792
豊永吉次郎 9, 809-812

ナ

内藤 美夫 15, 520-523
内藤 善夫 16, 207-209
永井 一夫 20, 70-72, 905-912
永井甲子四郎 20, 66-69
永井 健三 9, 328-334
中尾 竜一 5, 426-432, 7, 22-29, 40-53
中神 義男 19, 453-464
中川 孝 15, 552-558
中久喜 喬 18, 204-213
長生 卓治 7, 171-177
中沢 正雄 20, 959-965
中嶋 彥郎 17, 607-610, 611-618, 637-648
中島 猛 15, 203-213
長島 長節 10, 195-197, 11, 24-26
中島 誠 8, 60-66
長島雄三郎 20, 52-62, 63-65
中西 政周 15, 477-492, 17, 629-636
中根 公正 17, 416-419
中野 裕雄 13, 447-453
中浜 博 16, 61-71, 72-78

中原 一郎 8, 688-693
長峯 武彦 15, 383-388
長村不二男 9, 818-820
永持 和一 18, 669-677
中山 沃 13, 454-458, 15, 281-289, 290-293, 16, 388-391
中山 孝 20, 913-926, 927-936, 937-949
中山 達夫 18, 533-536, 537-540
中山 昭雄 17, 774-776, 19, 26-30
名取 礼二 2, 227-232, 3, 237-332, 4, 175-182, 5, 330-334, 356-364, 6, 16-20, 8, 67-75, 241-287, 324-329, 453-460, 9, 223-233
奈良 輝樹 19, 621-628
成田 敏男 6, 334-341
成田 稔 18, 463-471, 919-934, 935-942
名和 精 13, 533-537
名和 能治 11, 135-136

ニ

新島 旭 12, 121-127, 128-131, 13, 187-197, 17, 72-76, 20, 314-317
二階堂保彦 8, 32-40, 41-53, 10, 183-185
仁木庸次郎 7, 663-666, 8, 299-302, 394-413, 414-419, 420-426
西井 了 7, 233-238, 239-249, 250-259
西川 和夫 20, 988-996, 997-1003
西沢 一男 13, 247-259
西田 悦郎 19, 31-37, 38-44, 45-50
西田 力 19, 1301-1306
西谷 喜助 3, 293-296
西丸 和義 7, 716-766, 8, 54-59
西村 莊介 20, 143-162
西村 敏彦 14, 50-55
西村 文夫 17, 462-471
西本 和夫 12, 185-191, 17, 275-278, 524-527, 18, 564-567, 568-570
西山 信雄 12, 356-358, 16, 623-625
新田 初雄 7, 529-537, 9, 427-432, 504-510
新田 貴一 17, 416-419

ネ

根本喜久夫 14, 92-97

- 野口昌信 2, 331-334
 野沢市作 4, 282-285, 286-292, 293-306
 Norbert Wiener 18, 499-507
 信藤羊一 15, 464-475
 野間実利 16, 704-707
 野間全治 10, 41-46, 133-139
 野村志郎 8, 121-147
 野村博 18, 214-217
- ハ
- 萩原仁 11, 128-129
 橋田敖綱 9, 83-90, 335-340, 511-517, 518-523
 橋野昇一 15, 368-370, 16, 437-444, 445-449, 450-453, 17, 271-274
 蓮村省三 9, 144-150, 151-156, 157-162
 長谷川渙 13, 211-215, 419-430, 15, 25-30, 31-37, 397-401
 長谷川弘 10, 206-215, 216-223, 12, 216-223, 243-251, 15, 253-256, 16, 210-215, 397-403, 578-585, 640-642
 畠山一平 13, 360-366, 15, 504-508, 509-519, 16, 124-126, 127-138, 454-458, 459-469, 18, 1-14, 19, 347-354
 八田博英 4, 421-426, 5, 365-366, 13, 291-293, 294-297, 298-300, 14, 358-362, 525-529, 530-532, 16, 629-630
 八村正夫 16, 525-531
 服部鎮男 15, 81-86
 服部知己 7, 101-107
 服部美代子 12, 168-174
 羽藤博鬼 20, 388-396, 397-400, 401-406, 407-412, 413-415, 416-421
 花岡利昌 12, 197-200
 花岡虎男 1, 94-106, 170-184, 230-238, 2, 258-273, 363-367
 羽根田弥太 3, 318-326, 4, 328-333, 5, 307-317
 馬場三郎 12, 208-215, 13, 454-458, 15, 338-345, 609-618
 浜中健夫 16, 688-696
 浜道三 20, 833-842
 林浩平 17, 790-797
 林麟 13, 434-437, 14, 56-59, 323-326
 林雅男 14, 56-59, 390-391, 16, 623-625
 原田久雄 8, 313-318, 330-335, 9, 55-58, 59-62, 63-69
 原田文雄 7, 137-144, 8, 668-683
 原昊 5, 426-432, 6, 599-609, 610-620, 8, 92-102
 原芳子 20, 1-7, 8-13
 坂西照夫 16, 640-642
- ヒ
- 日笠頼則 10, 247-252, 253-257, 266-270, 311-316, 12, 31-35, 37-45, 46-52
 東田巖 14, 272-281
 東田昭二 17, 528-534, 816-819, 820-824, 19, 582-588, 589-597, 852-857
 引場昭男 17, 235-240
 日高暎二 19, 535-552
 日比敬行 8, 281-287
 平岩一也 15, 389-391
 平岡馨 20, 94-104
 平岡敬造 19, 604-612
 平岡達 19, 284-287
 平松茂良 15, 524-533
 平野修助 20, 73-83
 広瀬甚五 6, 25-31, 560-565
 広村嘉彦 7, 767-771, 772-783, 784-791, 792-800, 801-804, 805-810, 811-817
 樋渡志良 15, 87-92, 16, 87-90, 91-93, 94-96
- フ
- 深沢義雄 20, 225-234
 福田邦三 1, 133-134, 197-202, 264-265, 7, 756-760, 10, 258-265, 13, 179-186, 15, 301-315
 福田篤郎 10, 186-189, 190-194, 198-200, 12, 87-90
 福田忠 15, 434-442
 福田博 9, 873-878
 福田正弘 14, 517-524, 15, 68-80, 150-157, 417-427
 福原武 2, 19-26, 225-226, 4, 30-32, 6-305-315, 7, 95-100, 12, 206-207, 208-215, 13, 454-458, 15, 186-189, 190-192, 196-202, 324-333, 16, 345-

- 367, 368-373, 586-596
 福場友重 9, 704-707, 13, 216-220, 230-236, 237-242, 328-331, 415-418
 福山富太郎 8, 492-497
 福山正臣 17, 825-833
 藤岡玄治 20, 170-180
 藤沢正輝 13, 260-271
 藤城郁男 14, 373-377
 藤田周平 10, 91-94, 95-99
 藤本克己 13, 563-570
 藤本慶治 4, 309-320, 6, 1-10, 11-15, 385-395
 藤本辰一 18, 899-905
 藤本順三 16, 656-663, 19, 1263-1271, 20, 214-220
 藤本富太郎 6, 396-409, 410-422, 7, 117-126, 127-136
 藤森明 20, 853-862
 舟木広 17, 664-679, 733-740, 741-742
 船越正也 19, 553-561, 20, 115-122
 船越豊 15, 409-411
 船坂豊 16, 697-703
 古江生子 19, 892-896, 20, 287-295
 古川明 1, 189-193, 194-196
 古川誠 8, 281-287, 9, 139-143, 244-248, 540-545, 642-645
 古山誠 13, 367-374
 方沢郷 19, 1002-1010
 巫水綿 20, 84-89
- ^
- 舩松洋 17, 587-592
- ホ
- 北条和雄 1, 90-93, 258-263, 2, 4-13
 星猛 18, 834-844
 星野時一郎 1, 6-15
 細谷雄二 7, 499-504, 19, 227-235
 堀田利夫 19, 288-291
 堀内冷 13, 505-509, 15, 392-396, 17, 528-534, 816-819, 820-824, 18, 420-426, 454-458
 堀口慶次 16, 720-731
 堀口隆 14, 458-463, 464-467, 15, 81-86, 368-370
 堀口正夫 8, 330-335
 堀口正史 9, 163-165, 223-233, 291-295, 296-299
 堀佐喜子 18, 948-957, 958-964
 堀三蔵 6, 662-666, 667-673, 674-682, 9, 1-16
 本庄保 13, 273-282, 283-290
 本田定一 18, 845-848, 19, 598-603
 本田光徳 15, 428-433
 本田良行 16, 766-770, 18, 214-217, 19, 465-467
 本土昊 7, 647-654
 本間三郎 12, 261-268
- マ
- 前川広光 7, 167-170, 293-303, 397-406
 前野時弘 19, 994-1001
 真柄三夫 16, 317-325
 牧野秀夫 19, 206-221
 牧野博 19, 174-188
 牧政一 2, 249-257
 幕内精一 9, 631-636, 637-641
 正井章一 15, 120-128, 129-132
 正木光児 17, 649-663, 691-699, 18, 463-471
 正宗幹夫 19, 519-526
 真島英信 13, 547-551, 552-554
 増井市郎 7, 89-94, 101-107, 448-471, 517-528
 益子研三 15, 524-533, 20, 192-203, 204-213, 1015-1023
 益子博 17, 339-344
 榊田亀次郎 2, 196-212, 320-330
 増田実 15, 265-270
 升沢郁二 19, 892-896
 町田憲二 5, 340-347, 6, 363-368, 369-374, 375-377, 579-584
 町田都乎 14, 33-34
 松井良友 17, 587-592
 松岡脩吉 2, 1-3
 松田幸次郎 6, 84-91
 松田太郎 15, 524-533
 松田実 8, 336-340, 341-348
 松永千秋 13, 313-318
 松本栄吉 5, 390-393, 7, 58-79, 80-83, 84-88, 517-528

松本 茂彦 6, 252-267
 松本 淳治 16, 420-423, 424-427
 松本 政雄 12, 157-161, 19, 1257-1262
 松本 義雄 20, 314-317
 松本 良二 16, 470-483, 17, 263-270
 松山 竜一 1, 79-89, 211-218
 松村 起男 14, 378-385
 丸山 治郎 19, 852-857
 丸山 俊男 20, 307-313

ミ

三浦 隆藏 6, 239-251
 三浦 俊夫 7, 563-584, 585-590, 591-597
 三神 佑 1, 245-250, 269-272, 273-277, 278-283, 284-289
 美甘 守 6, 575-578, 7, 424-426, 8, 427-439
 三島 久人 17, 478-480, 777-780
 水野 一雄 9, 818-820
 水野 重恒 17, 327-332
 三田昭太郎 19, 918-925
 三田 俊定 9, 690-700
 三田 八玄 17, 22-31
 御供 武 7, 473-480
 藁口 真 19, 465-467
 三村 信之 12, 76-78
 宮内 和博 20, 504-512
 宮川 清 17, 299-309, 383-391, 392-401, 481-487
 宮川 鉄男 18, 181-192, 472-480, 19, 152-156, 858-861, 862-866, 867-870
 宮木 高明 13, 434-437, 510-512
 宮下 勉 18, 646-655
 宮田 誠 18, 437-446
 宮原 長知 14, 10-14, 15, 38-42, 64-67
 宮本 清純 16, 336-342
 三宅 隆雄 20, 744-751, 863-872
 三輪 久夫 16, 708-719
 三輪 英武 16, 392-396

ム

向島 迪 18, 775-779, 780-783
 牟田 信大 18, 459-462, 19, 977-985
 村上喜久子 11, 37-45, 46-52, 53-56
 村上 昇 3, 253-258, 259-265, 266-276

村上 元彦 20, 764-774
 村田 和子 17, 416-419
 村中光治郎 20, 950-955
 村松 清江 19, 972-976
 室川 正彦 3, 1-11

メ

銘 莉 進 6, 659-661

モ

本川 弘一 9, 328-334, 690-700, 15, 1-7
 望月 清 7, 635-638
 望月 秀男 11, 107-108, 109-115, 116-125
 本林富士郎 3, 379-393, 394-411
 本村 光博 15, 534-538
 元吉 滋直 18, 696-709
 桃井 国忠 19, 1272-1279
 森井 一碩 8, 200-203
 森川 昭 18, 413-419
 森下 完一 6, 345-347
 森下 敬一 17, 858-869, 870-876, 19, 1002-1010
 森 貞次 19, 236-248, 249-253
 森 隆之助 16, 1-11, 19, 1-15, 813-825
 森 信胤 10, 109-116, 141-148, 149-150
 森 悠子 12, 168-174

マ

八木 舎四 19, 882-891
 矢崎 定雄 4, 427-433, 6, 117-122
 安井 敏夫 8, 319-322, 341-348
 保田 止郎 8, 440-445, 9, 121-127, 619-624, 625-630
 安富 博 19, 903-917
 八十島外衛 2, 158-166, 167-177
 箭田 正輝 20, 988-996
 矢野 真琴 4, 334-338, 339-343
 矢野 正武 7, 182-193
 柳谷 岩雄 17, 77-81, 18, 943-947, 20, 453-461, 462-467, 468-475
 矢内 良徳 19, 1002-1010
 矢作善一郎 13, 163-174
 矢作 光美 9, 844-847, 848-851, 852-856
 山岡 誠一 14, 327-337, 395-400, 533-539, 15, 101-106

- 山形寿郎 12, 154-156, 13, 132-139, 140-142, 143-145
- 山上松義 16, 354-367, 368-373, 586-596, 17, 488-501, 505-516, 19, 128-131
- 山川晋吾 20, 181-191
- 山極一三 5, 1-13
- 山口周正 2, 232-239, 3, 369-378
- 山口重方 5, 63-69, 266-273, 326-329
- 山崎恒雄 15, 397-401, 17, 32-38, 445-450, 472-477
- 山崎 衛 18, 809-821
- 山下 祐 20, 823-832
- 山地廉平 13, 476-482, 483-489, 491-496
- 山田潤一 18, 140-146
- 山田達男 12, 252-256
- 山田敏男 20, 1015-1023
- 山田年比古 19, 1002-1010
- 山田 守 10, 293-297, 298-302
- 山田 豊 18, 34-42, 43-51, 61-68
- 山田芳夫 16, 343-353
- 山中 和 19, 444-452
- 山中太郎 12, 291-294
- 山中俊雄 3, 299-303, 5, 433-443
- 山中みよ子 17, 10-15, 593-597, 598-600, 601-602, 603-606, 18, 387-389
- 山根彦二 17, 540-543, 544-548, 549-554, 555-559, 18, 656-658, 659-662, 663-665, 666-668
- 山本晃朝 5, 426-432, 6, 621-637, 7, 667-674, 680-685
- 山本克起 15, 47-57, 449-453, 454-463
- 山本 清 11, 243-245, 14, 292-296
- 山本正道 13, 408-414, 462-470, 14, 444-451
- 山本喜昭 18, 641-645, 19, 1307-1310, 1311-1314
- 山本理平 12, 168-174
- ㄐ
- 湯浅国三郎 8, 694-698
- 湯浅 実 20, 988-996
- 湯田勝年 1, 61-66, 90-93, 8, 88-91
- 祐森市蔵 18, 541-556
- ㄑ
- 横関珠治 17, 345-351
- 横村庄一郎 19, 16-25
- 横山正松 7, 407-417, 9, 351-358, 17, 428-429, 535-539
- 横山泰和 20, 63-65
- 吉井直三郎 9, 793-797, 10, 225-233, 234-237, 303-304, 15, 392-396
- 吉川俊夫 10, 23-31
- 吉川春寿 8, 492-497
- 吉田 穰 15, 133-142
- 吉田良一 20, 129-142
- 吉村玄三 7, 702-712, 713-720, 721-731, 732-738, 739-741, 742-744
- 吉村寿人 2, 331-334, 14, 517-524, 15, 74-57, 16, 105-114, 20, 163-169, 988-996, 997-1003, 1015-1023
- 吉村正太 9, 71-82, 312-318, 319-327
- 吉森 延 1, 107-118
- 米沢 潔 19, 871-881
- ㄒ
- 李 鐘晚 13, 221-223, 15, 107-115, 116-119
- 季 廷霖 19, 837-842
- 林 彰東 19, 260-271
- 林 水源 1, 251-257, 2, 274-295
- 李 炳熙 1, 290-292
- ㄓ
- 羅 立芳 19, 1002-1010
- ㄔ
- 若栗 清 11, 159-163
- 和合卯太郎 3, 225-235, 18, 965-977
- 和佐野 忠 18, 193-203
- 和田惠州男 8, 281-287, 313-318, 319-322, 446-452, 9, 17-20, 21-30, 31-35
- 渡辺紋郎 19, 113-120
- 渡部嘉造伊 3, 51-55, 56-60
- 渡部 恭二 20, 843-852
- 渡辺 士郎 20, 723-733
- 渡辺澄男 12, 84-86
- 渡辺千春 15, 655-658
- 渡辺俊男 5, 367-369, 7, 599-602, 761-766, 11, 249-258, 12, 135-139, 185-191

第36回日本生理学会総会案内

第36回日本生理学会総会は昭和34年3月29日(日), 30日(月), 31日(火)の3日間にわたり下記の要領によって開催致しますから御案内申し上げます。

1. 会場

東京都文京区駒込千駄木町59 (都電⑩番線蓬萊町, 又は⑳, ㉟, ㊱番線千駄木町下車)
日本医科大学

2. 演題及び実験供覧

シンポジウムと一般口演の2本立と致します。

a. シンポジウムの題目 (予定)

1. excitable membrane
2. active transport
3. γ -アミノ酪酸
4. 中枢の電氣的活動
5. 反復興奮
6. transmission, conduction
7. 感覚生理
8. 脈管生理
9. 環境生理

以上の題目のシンポジウムに参加口演の申込み募集。

b. 一般口演

シンポジウムに含まれていない題目のもの。

尙一講座又はそれに準ずる一単位あたり, シンポジウム各一題, 一般口演一題宛です。

c. 演題申込締切

昭和34年1月25日迄に到着のこと。

d. プログラムの為の抄録

氏名(所属) 題目及び100字以内(図, 表は御遠慮下さい)を演題申込みと同時に
お送り下さい。

e. 詳細は当番幹事まで御連絡下さい。

当番幹事 戸塚 武彦

日本生理学会会費納入のお願い

昭和34年度会費(第21巻) 1,000円お払込みをお願い致します。

御手数でもお払込みは振替又は書留でお願い致します。

なお教室所属の方は教室員をまとめて御払込みいただければ好都合です。

前年度の会費未納の方は至急お納め下さいますようお願い致します。

東京都文京区本富士町(本郷局区内)

東京大学医学部生理学教室内

日 本 生 理 学 会

振替口座 東京 86430 番

第15回日本医学会総会会員募集 (第1次公告)

第15回日本医学会総会は昭和34年4月1日から5日まで東京において開催されます。

今回の総会は総会という名に適わしく、百に近い各種の興味ある主題(裏面参照)に五百数十名の講演者が参加し、シンポジウム、パネルディスカッション等その問題を取扱うに最も適した形式により、関連分科の固有の立場に立ちつゝ総合的に研究発表、討議が行われます。会場も本郷、丸の内、神田の3地域十数会場に亘ります(会場間には臨時バス運転)。

このほか都立産業会館全館を使用して恒例の呼物の学術展示会、商品展示会のほかに新機軸の世界最優秀医学映画の映写会、カラー・テレビによる手術、患者等の供覧等が、多彩に集約的に行われます。

正に明年4月には、日本医学の一大祭典がくりひろげられんとしております。

今回の総会はその性質上厳格に会員制度のもとに開催され、会員には種々の便宜が提供せられますので、どうか奮って御入会下さい。行事等への参加申込締切の都合もありますからなるべく早目に御申込み下さい。

1. 総会日程

	午前	午後
4月1日	開会式	学術集会
2日	学術集会	学術集会
3日	行 事	
4日	学術集会	学術集会
5日	学術集会	閉会式

学術展示会(3月30日~4月7日)
商品展示会(3月30日~4月7日)

2. 会 費

会 員 700円
家族会員 500円

(会員の同伴家族で、学術集会、見学、各種トーナメントに関係のない方。)

なお総会運営の経費補助のために篤志を以て10,000円以上(会費としての700円を含む)を寄附せられた会員には謝意をこめて記念品を贈呈します。さらに50,000円以上の寄附者に対しては記念品のほか第15回日本医学会学術集会記録一揃(5冊にて定価12,000円の予定)を贈呈します。

入会の御申込みは本年12月1日から受付ますから、所定の用紙に御記入の上、総会事務局へ

御便宜の方法で御送金下さい。

振替口座を御利用の方は日本医師会雑誌第40巻第11号より毎月添付の振替用紙を御使用下さい。なお所定の用紙並に振替用紙は総会事務局に備付けてありますから所用枚数御通知下さいましたら早速お送りいたします。

3. 行 事

皇居参観

原子力研究所見学(茨城県東海村)

歌舞伎座観劇

NHK交響楽団鑑賞(産経ホール)

シネラマ観賞(帝国劇場)

ゴルフ・トーナメント、囲碁、将棋などのトーナメント、美術展、この他にもいろいろ計画されております。具体的なことは決定次第逐次発表いたします。

第15回日本医学会総会

会 頭	内 村 祐 之
副 会 頭	小 林 芳 人
副 会 頭	緒 方 富 雄
準備委員長	三 木 威 勇 治

第 15 回 日 本 医 学 会 総 会

事務局 東京都千代田区神田駿河台2~5
振替口座 東京 8 4 7 3 2 番

第15回日本医学会総会学術集会主題

1. 医学史, 医学教育
2. 細胞の微細構造物とその機能に関する最近の知見
3. 組織培養の最近の進歩
4. 日本人の人類学
5. スポーツの医学的効用と障害
6. 健康管理
7. 日本における矽肺問題
8. 生活における中毒
9. 都市における公害の諸問題
別に「首都東京の衛生の諸問題」(公開講演および公開展示)
10. 体質, 遺伝, 発育
11. 発育, 形成, 特にその異常に関する諸問題
12. 栄養
13. 代謝 (1) 生化学の諸問題
14. 代謝 (2) 核酸
15. 代謝 (3) ビタミン
16. 代謝 (4) 電解質代謝
17. 糖尿病
18. 内分泌 (1) ステロイドホルモンの生体内代謝
19. 内分泌 (2) 内分泌の中樞支配
20. 内分泌 (3) ホルモン分泌障害とその治療 (1)
21. 内分泌 (4) ホルモン分泌障害とその治療 (2)
22. 感染と炎症 (1) 感染
23. 感染と炎症 (2) 炎症
24. 免疫
25. アレルギーの基礎問題
26. 膠原病
27. 侵襲と生体反応
28. 薬物療法の諸問題 (1) 化学療法剤の副作用
29. 薬物療法の諸問題 (2) 二三治療剤の作用機序
30. ウイルスの増殖
31. 感冒様症候を示すウイルス疾患群
32. 灰白髄炎, 狂犬病等
33. 恙虫病
34. 真菌症
35. 寄生虫病 (1) 鉤虫症・回虫症
36. 寄生虫病 (2) 日本住血吸虫症・フィラリア症
37. 日本における衛生動物研究の最近の進歩
38. 腫瘍 (1) 癌の生化学
39. 腫瘍 (2) 癌とホルモン
40. 腫瘍 (3) 癌の早期診断
41. 腫瘍 (4) 消化器癌
42. 腫瘍 (5) 肺癌
43. 腫瘍 (6) 癌の化学療法 (1) 制癌剤
44. 腫瘍 (7) 癌の化学療法 (2) 制癌剤の臨床
45. 白血病
46. 結核 (1) 結核の治療の諸問題
47. 結核 (2) 結核における免疫とアレルギー
48. 結核と癩との関連性
49. 梅毒 (1) 梅毒の疫学的研究
50. 梅毒 (2) 抗療性梅毒
51. 血液 (1) 血球に関する最近の諸問題
52. 血液 (2) 血漿蛋白・血液凝固
53. 血液 (3) 貧血
54. 新生児溶血性疾患
55. 大量輸血に関する諸問題
56. 循環 (1) 心電図, 心臓
57. 循環 (2) 脳循環, 脳卒中
58. 循環 (3) 肺循環 腎循環, 人工腎臓
59. 血管
60. 心臓外科
61. 高血圧 (1) 成因
62. 高血圧 (2) 治療その他
63. 腎炎・ネフローゼ
64. 尿路疾患
65. 胃炎および胃潰瘍
66. 肝炎および肝硬変
67. 胆道疾患・胆石症・膵炎
68. 腸疾患の臨床
69. 小児の嘔吐と下痢
70. 疫痢
71. 赤痢
72. 筋生理の諸問題
73. 筋電図
74. 骨折
75. 気道及び食道の異物
76. 発声機構と音声
77. 精神衛生の諸問題 (1)
78. 精神衛生の諸問題 (2)
79. 神経系に関する最近の知見
80. 脳波その他
81. 脱髄疾患
82. 脳神経外科
83. 放射線障害とその対策
84. 特殊X線診断
85. 放射線治療とその限界
86. 形成外科
87. 麻酔